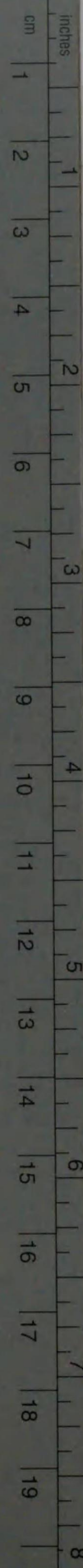


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



756

146

756-146



1200501595914



290





---

小田内通敏著

---

風土日本の研究基準

---

東京叢文閣發行

---





## はしがき

この大地の運行が、永劫不變の實在を續け得るのは、求心力と遠心力とが均衡する物理的原則に基くといはれる。ふるき民族國家たるわが日本が、その使命を宣揚して東亞の天地に新しき意圖を遂行するに至つたことは、故内藤博士がいはれたやうに、文化の運行上、自然の歸結であるといひ得ると思ふ。

わたくしは、長い間、廣い地理學の見地から、日本の姿を確認するために、それ自體が立つてゐる村落また都市を通じて、更らにそれらを朝鮮支那等の諸民族の生活と環境との比較に於て、讀書し觀察しまた思索し續けて來た。事變以來、あらゆる視野から、祖國日本の實相の再認識、また東亞の現實の動向に凝視の眼を向けなければならなくなつた今日、こゝに十數年來の論考をまとめて世に問ふことは、自省しまた精進する意味に於て、大きな希望と言ひ知れぬ感激を覺える。先年北京に赴いて、村落社會の研究文献を蒐めたり、學者達と交歡したりした時の記憶も、わたくしには、更に新しい印象となつて蘇つて來る。

すべて自己の眞の姿は、それが客觀されることによつてはつきりとするものである。われ／＼が各自の生活を客觀するのに、「生活と環境との關係の考察」が、その基準として大きな役割をなすべきことは、地理學の發達過程からは勿論、わたくし達の體驗からもそれが證據立てられる。



わが祖國の姿をその圍繞地域と、更らに世界とに比較して、その客觀性を明確にするために、まづ「風土」から「朝鮮・滿洲」に、續いて、「國際地理學會議」の論議に明徴されることを囑みたい。殊にそれらの研究の一つの大きな核心である村落居住と過剩人口とは、われ／＼が直面してゐる東亞の新しい結合の上に、重要な課題となりつゝあることは、特に注意さるべきである。それに就て、「村落社會」と「地方人口」の諸篇は、幾分寄與するであらうことを期待する。卷末に附した索引は、本書の内容の要約であり、その活用は、所與の地域の觀察と讀圖の反覆によつて効果さるべきである。

本書の諸論考は、わたくしが講壇に要する準備といふよりも、寧ろ多年の所志を調査研究の上に表現して來た過程の所産である。従つて、風土、村落社會、地方人口、朝鮮・滿洲は、夫々獨立した研究部門として成長すべきものであり、これらの研究方法の擴充によつて、「風土支那」の現實認識が意圖さるべきことは、わたくしの念願する所である。

調査研究の遂行に就ては、今まで多くの官廳、公私の研究機關の支援、また先覺・知己・學友の啓蒙による所が多いことをこゝに銘記して深厚の謝意を表したい。

本書の諸論考の整理に就ては長男通久、校正並に索引の作製に就ては岸重郎君の勞に謝したい。

昭和十三年十月二十三日

小田内 通敏

## 目次

### 序 説

「風土」認識の學として地理學……………一・二五

### 風 土

一 環境と日本民族……………一

海洋と生活環境……………風土と農業……………島國性……………民族の構成……………世界と郷土

二 地域社會の構造と地理學……………三二

序説……………村落……………都市……………研究方法……………結言

三 島國日本の風土的特質……………一〇九

風土の概念と其の考察方法……………日本の風土的特質としての瀬戸内海地域



村落社會

四 村落社會考察の一基準 ..... 一六九  
 はしがき..... 家族の觀察..... 部落の觀察..... 村落社會の考察

五 村落共同體の地理學的研究 ..... 一七七  
 概観..... 土地と産業と労働..... 居住と人口..... 結言

六 村落社會に於ける流動性 ..... 一九二  
 多様性..... 社會性の流動..... 人口流動に基く保健問題..... 農村社會の社會學的調査の必要

地方人口

七 中部日本の人口移動の地域的考察 ..... 二〇三  
 序言..... 人口の自然増加と現住人口の増加の傾向..... 人口移動の經濟的解釋

八 地方人口研究の對象として甲府盆地 ..... 二二七

甲府盆地の地域性..... 人口の地域性

九 小地域の人口研究の讀圖の重要性 ..... 二三二

一〇 村落居住と人口との關係の一考察 ..... 二四五

研究の基準..... 農山村部落の基本型あらはれた居住と人口との關係..... 標準農家にあらはれた  
 居間の廣狹と農山村居住との相關關係..... 山村の居住の諸型と人口との關係..... 田部落の居住  
 の諸型と人口との關係..... 畑部落の居住の諸型と人口との關係..... 標準實驗地設定の必要

朝鮮・滿洲

一一 朝鮮の人文地理學的諸問題 ..... 二八一

民族的交流地域..... 『八域誌』と『大東輿地圖』..... 境界線..... 北朝鮮と南朝鮮..... 社會階級の血  
 緣村落..... 邑内の崩壊..... 定期市の經濟的社會的價值..... 支那民族の經濟的潮流..... 日本民族  
 の發展..... 人文地理學の中心思想

一二 朝鮮の主要聚落 ..... 三〇二

概説..... 邑内..... 慶州と開城..... 平壤..... 京城..... 港市..... 地方的中心都市..... 結言



一三 滿洲の風土と生活形態 ..... 三二七

地域的特質……河流と航運……生活形態……近代的都市構成……民族と國家

一四 滿洲都市生活の特質 ..... 三五三

都市發生の萌芽……都市の舊さ……都市の進展性……生活……防備……風景

一五 北滿洲の都市と其の景相 ..... 三六五

呼倫貝爾の中心海拉爾……國境都市としての滿洲里……齊齊哈爾の都市的特色……國際的大都市哈爾濱の地域的特質

市哈爾濱の地域的特質

國際地理學會議

一六 一九三一年のパリ國際地理學會議 ..... 三九三

人文地理並に歴史地理の諸問題……村落居住委員會の協定事項……日本に關する人文地理展覽會……フランス學派との交渉

會……フランス學派との交渉

一七 國際地理學會議と日本人文地理展覽會 ..... 四一〇

はしがき……日本に關する人文地理展覽會……國際地理學會議

一八 過剩人口の地理學的研究と國際地理學會議 ..... 四一九

過剩人口委員會の立てた計畫案

一九 國際地理學會議の過剩人口委員會 ..... 四二七

國際地理學會議……過剩人口委員會……日本の過剩人口の地理的研究……日本景觀展覽會

二〇 國際地理學會議と村落居住の研究 ..... 四五二

二一 人文地理學の發達と日本の現實 ..... 四六五



圖版目次

風土

沿海平野と海岸(太平洋岸)……………挿繪  
 段畑と鹽田(瀬戸内海岸)……………挿繪  
 扇狀地と村落居住……………挿繪  
 新田開發と居住の發展……………挿繪  
 アジア洲の植物地帶圖……………三  
 アフリカ洲の植物地帶圖……………三  
 オーストラリア洲の植物地帶圖……………三  
 北アメリカ洲の植物地帶圖……………三  
 南アメリカ洲の植物地帶圖……………三  
 地中海地域の人口密度圖……………三  
 瀬戸内・花崗岩分布圖……………二七  
 寒霞溪……………二九  
 瀬戸内海鳥瞰圖……………二九  
 攝播路總圖……………二九  
 大阪繪圖……………二九  
 瀬戸内海地域人口分布圖……………二九

村落社會

案下部落の鳥瞰……………一七九  
 街村的な上案下……………一七九  
 案下部落土地利用圖……………挿繪  
 案下部落居住景觀圖……………挿繪  
 案下部落過剩人口圖……………挿繪

地方人口

五縣自然增加率比較圖……………二〇四  
 五縣自然增加率出生率死亡率表……………二〇五  
 五縣現住人口增加率比較圖……………二〇六  
 五縣現住人口增加率表……………二〇六  
 五縣移出超過率比較圖(全期)……………二〇七  
 五縣移出超過率比較圖(各期)……………二〇八  
 五縣移出入率超過率表……………二〇八  
 五縣縣外現在者率比較圖……………二〇九  
 五縣縣外現在者率比較表……………二〇九

五縣都市人口增加率比較圖……………二二三  
 五縣都市人口增加率表……………二二三  
 山梨縣都市別略圖……………二二三  
 山梨縣郡別土地利用率表……………二二三  
 山梨縣主要道路分布圖……………二二三  
 山梨縣森林分布圖……………二二三  
 山梨縣會社配電別區域圖……………二二三  
 山梨縣人口密度階級圖……………二二六  
 山梨縣青年層人口率圖……………二二九  
 東山梨郡町村圖……………二二九  
 岡部・春日居二村土地人口表……………二二九  
 岡部村離村者調……………二二九  
 三富・西保・諏訪・中牧四村土地人口表……………二二九  
 東山梨郡林野面積對全面積率圖……………二二九  
 東山梨郡桑畑面積對畑面積率圖……………二二九  
 東山梨郡田面積對耕地面積率圖……………二二七  
 東山梨郡小作地對耕地面積率圖……………二二七  
 三富・西保・鶴瀬・初鹿野・神金・玉宮六村人口表……………二二九  
 東山梨郡農業人口對有業人口率圖……………二二九  
 東山梨郡工業人口對有業人口率圖……………二二九

東山梨郡町村別土地人口表……………二四一  
 東山梨郡青年層人口率圖……………二四一  
 澤丸部落・袴谷部落圖……………二四九  
 新庄部落圖……………二五〇  
 基本部落・標準農家土地人口居住比較表……………二五一  
 仙納原部落標準農家……………二五二  
 萩野部落標準農家……………二五三  
 部落種別一戶當居間廣狹別利用率表……………二五三  
 鹽子部落標準農家……………二五七  
 山村部落・標準農家土地人口居住比較表……………二六〇  
 大竹部落土地利用圖……………二六一  
 葛浦部落民業業類別表……………二六二  
 折敷部落・葛浦部落圖……………二六三  
 折敷地部落標準農家生產形態表……………二六五  
 鹽子・白子部落戶口遞減表……………二六五  
 田部落・標準農家土地人口居住比較表……………二六七  
 植木部落・友永部落圖……………二六九  
 石塚浮戶部落土地利用圖……………二六九  
 畑部落職業別戶數人口土地比較表……………二七一  
 杉山部落圖……………二七一



森房部落・大出部落圖……………三七三  
 下岩崎部落圖……………三七四  
 標準部落土地人口基本表……………三七六  
 標準農家土地人口經營基本表……………三七七  
 農蠶山漁村部落集團形態表……………三七八

朝鮮・滿洲

日・滿・支航空路圖……………挿圖  
 朝鮮交通略圖……………挿圖  
 秋の金剛山(集仙峯)……………挿繪  
 冬の興安嶺……………挿繪  
 火田民の獨立家屋(厚峙嶺)……………挿繪  
 農村部落(平安北道)……………挿繪  
 舊き民家(開城)……………挿繪  
 開市記念碑(南原)……………挿繪  
 城門(水原)……………挿繪  
 市場(大邱)……………挿繪  
 慶會樓と北漢山(京城)……………挿繪  
 民家の諸相(京城)……………挿繪  
 牡丹臺と大同江……………挿繪

石窟庵より日本海遠望……………挿繪  
 景福宮外郭……………挿繪  
 朝鮮主要都市人口表……………三三三  
 滿洲國略圖(主要資源分布)……………挿圖  
 滿洲國地圖……………挿圖  
 龍首山と遼河(鐵嶺)……………挿繪  
 松花江を隔て、吉林を望む……………挿繪  
 大豆の馬車輸送……………挿繪  
 海拉爾市街……………挿繪  
 金州文廟祭……………挿繪  
 新京日本橋通……………挿繪  
 都市の生立つた核……………三三五  
 野路が街路に……………三三五  
 農業の集約さ……………三三六  
 新なる居住地區……………三三七  
 鳥飼の趣味……………三五八  
 烏拉鞋……………三五九  
 簡易な石炭爐……………三六一  
 防備としての堡……………三六一  
 清朝武官の住宅の表徴……………三六二

古い井戸……………三六三  
 素朴な木柵……………三六四  
 北滿産業地圖……………三六五  
 海拉爾の景觀……………三六六・七  
 海爾拉城內……………三六八  
 蒙古包の外観……………三六九  
 蒙古包の構造……………三六九  
 風車の丘よりの滿洲里の景觀……………三七二・三  
 牧畜する家構……………三七四  
 日本人戦歿記念碑……………三七四  
 店舗の看板……………三七四  
 路傍の磨屋……………三七五  
 常用の手袋と靴……………三七六  
 齊齊哈爾市街圖……………三七七  
 滿洲人の古風な家構……………三七八

滿洲人の倉庫……………三七九  
 河港の葫蘆頭……………三八〇  
 哈爾濱主要地區圖……………三八二  
 哈爾濱道路構造圖……………三八三  
 市街埠頭から松花江を望む……………三八四・五  
 埠頭素描……………三八七  
 中國大街……………三八七  
 哈爾濱公園……………三八八  
 埠頭東部圖……………三八八  
 傅家甸の入口……………三九〇  
 滿洲人……………三九一  
 民族と交歡……………三九一

國際地理學會議  
 パリーの國際地理學會議(一九三一年)……………挿繪



風土日本の研究基準



## 序 説

### 「風土」認識の學としての地理學

あらゆる人類社會は、それ／＼立地する地域々々の物理的構造に依存する。この物理的構造は、そこに居住する諸民族の文化度に準じ、それが生活資源として利用さるゝ過程に於て、「風土」の概念は構成される。故に地域的實在としての「風土」に對する人類社會の認識は、そこに立地する民族性、またその時代性によつて進化發展し、風土の概念の本質もまた共に變化する。

民族國家としてのわが日本の立地的關係は、地體構造に基く地形、季節風帯に屬する氣候、またそれらに育成された生物の生態等をわれらの生活資源たらしめてゐる。而して島國としての交通性と隔離性とは、長き年處を経つゝわが民族の構成、文化の醇化に役立つた。



今や近代國家としてのわが國の發展は、その核心が、昔ながらの島國に定置しながら、新に東亞の廣大な地域にその民族的進出を試みつゝある。故にわが日本民族の立地する地域的關係の現實は、一面には島國性に基く風土の認識を有ちながら、また一面には大陸性に基く風土の認識に努めなければならない新しい環境に直面してゐる。

この風土の多様性の認識の要請に對してのわれ々の覺悟は、明確なる科學的方法に基く風土認識の研究基準を把握し、これによつて、島國の風土を再認識すると共に、大陸の風土を確認することにある。

然らば、如何なる學問が、この重要な課題に解答を與へるであらうか。

わが國最古の地誌として知られてゐる『風土記』に書き記されてゐる幾多の事象は、われらの祖先が、その生活と風土とがからみ合つた地域的實在に對して、認識の眼を開いたことを證據立てゝゐる。また徳川時代の各藩がそれらの藩領内の需給關係を生活環境としてゐた關係から、それらの立地する地域的特質の認識に眞摯な努力を捧げて來た地誌的文獻に、われ々は十分にわが國の風土的特質に對する認識、即ちわれらの祖先の有つた風土觀を把握することが出来る。故に、わたくしはこれらの事實に徴しても、風土日本の認識に對する研究基準の把握には、先づ地理學的考察が何よりも重要な寄與をなすものであるといひ得ると思ふ。

「地理學は古くして、しかも新しい學問である」といはれるのは、それが人類社會の生活環境に對する認識に出

發しながら、今日なほ地域社會の科學的認識に寄與し得る學的内容を有つてゐるからであらう。

新しい學問としての地理學は、近代地理學 Modern Geography の稱呼によつて、それが前期の地理學と區別されてゐる。それには十九世紀に於ける多くの探險と製圖學とに關する地理學的事實が、この科學的地理學の確立を促進した。この科學的地理學は、その一部は自然地理學として、他の一部は人文地理學として發達したが、今やこの兩者の地域的結合、即ち有機體としての地域的實在は、われらの所謂風土であり、その科學的認識は近代地理學の研究對象となつて來てゐる。故に、近代地理學は、「風土の科學的認識の學」であるといひ得ると思ふ。

前に述べた徳川時代の地誌的文獻は、かゝる科學的な體系こそ有つてはゐないが、それがわが民族精神に基く地理學的精神を宿してゐる點に、近代地理學の苗床としての價値を認め得ると思はれる。故に、わが風土日本の認識の學としての地理學の重要な役割は、近代地理學的技術の行動の中に、かゝる文獻の中に宿つてゐる民族精神を生かすことである。即ち前世代の遺産たる精神を現世代に生かし、こゝに科學的認識に基く風土の國民的覺醒が促さるべきである。

明治國家の樹立に伴ふわが國家社會の自己認識の必要は、歴史的認識の要請としては修史局として、また地理的



認識の要請としては地理局として現はれた。明治十二年に、東京地學協會がわが國の政治家や有識者によつて創立されたのも、當時の國情を明示するものであらう。然るに修史局が大學に取上げられて大學的發達をなし、しかもそれが史料編纂所をも有つに至つたことは、それが國史の學術的研究の上に寄與したばかりでなく、わが國家社會の史的認識の上に重要な寄與をなしたことは、こゝに歎ずるまでもない。然るに之に反して、地理局は大學に取上げられず、爲にそれが歴史と共に大學的發達をなし得ずに終つたことは、日本に於ける近代地理學の發達を阻止した停頓せしめた。従つてその結果は、わが國家社會の構造が、各地の地域的特質に依存し、それが國民の經濟生活乃至社會生活の基底をなしてゐることに就ての國民的認識を缺き、ために明治時代に於ける諸行政に、地域的特質に基づく考慮を閑却したことは、否むべからざる事實であつたと思ふ。もし地理學の大學的發達が、明治初期に意圖されておつたならば、地域の科學的認識を基礎としての企劃が、已に明治期から國家的諸計畫の上に多大の貢獻をなし得たであらうことは、今日、歐米諸國の地理學的業績が、國家的計畫の上に參照してゐる實蹟からしても、それがいひ得ると思ふ。

明治中期以後に至つて、地理學の大學的發達は、京都帝國大學文學部また東京帝國大學理學部に於て設置され、また東京・廣島兩文理科大學、兩高等師範學校、東京・神戸兩商科大學その他に於て、地理學の講座並に科目の配置を見るに至り、その學術上並に教育上の業績は近年觀るべきものあるに至つたが、それが、行政的計畫に參照する

ことの少ないことは、わが國の地理學の發達過程が、これを然しめて居るものであらう。

然るに、わが國の今日の情勢は、事變以前、既に地方制度調査會の設立を見、その調査事項の中には、多分に地域的認識に基いての計畫の重要性が認められる諸方案が議題となり、現に同調査會は續行されつゝある。また國土計畫に基いた地方計畫の必要は、内務省並に企劃院の當局者また識者の中にも唱導されつゝある。故に從來、地理學者によつて提唱されてゐる地理區の研究等が、更らにこれらの地域計畫の方向に對して何等かの示唆を與へ得る研究に進み、その業績が機縁となつて、從來、講壇に終始することの多かつた地理學が、國家社會の行政並に施設に關與せられるに至るべきことは、地理學の現在並に將來に對して要請されてゐる重大な課題の一つではなからうか。

これに就いて、われ／＼は、近年、歐米諸國に勃興しつゝある地域主義 Regionalism の意圖が、

一、全國家の要求と地方的利害の均衡は、國家統一の基礎をなしてゐる。

二、各地域の個性的特質の精神的並に物質的發達の自由性は、國民の創造的勢力の發達並にその文化の豊かさが地域的に特色づけられてゐる基底をなしてゐる。

となし、これらの具現に對する學術と行政との協働によつて遂行さるべきことの必要性の提唱、また



國々の地勢・氣候・國民性・言語・宗教・經濟・人口密度・都市化等の多様性が、地域的關係から生起することが多いから、この地域的差異の研究は、地域的分類をなすべき類型を明かにする近代地理學的研究に待たなければならぬ。

といふ説などに聞くべきではないか。また

近代地理學が、より實踐的に計畫的方法に寄與することを、

一、踏査と分類。二、鑑定。三、設計。四、遂行。

に就ての幾多の事例により、國土計畫に於ける地理學的組織の重要性を述べ、地理學者によつてなされる踏査・分類・鑑定を通じての理解が、國土計畫の遂行の準備的工作として最も價值多きこと。

に言及してゐることなどを思ひ合はせ、近代地理學的研究に基く風土の科學的認識は、島國日本また大陸東亞を對象としてのあらゆる行動の基本的な作業でなければならぬことを痛感するのである。

## 二

島國日本の地域社會の研究に於て、その基本型たる村落の上に、その大きさが、まづ研究の單位として考へらるべきである。これに就ては、從來あまり適確な統計數字がなかつた。故に今日、その研究基準となるものは、農・蠶・

山・漁村部落別集團型の世帯別集計（内務省地方局）に據るの外はない。これによれば、普通農村に於ても養蠶村に於ても集團型として最も多いものは五〇世帯から一〇〇世帯のもので、三〇世帯から五〇世帯までのものと一〇世帯か三〇世帯までのものが、これに次いで集團である。集團の大きい一〇〇世帯から二〇〇世帯になると、農蠶共に前の三つ集團型よりも、その數が少なく、一五〇世帯から二〇〇世帯のものになると、部落數は共に七〇代に下り、部落數の最も多い五〇世帯から一〇〇世帯の集團型に比ぶれば、その數は五六分の一になつて了ふ。これを朝鮮とか滿洲とかまた支那などの村落の集團型に比ぶることが出来るが、日本の村落の集團型の特質がはつきりするが、それらと比較すべき資料がまだ得られない。普通農村といつても、田場所と畑場所とは、その集團の大小に自から差異があるであらうと思はれるが、これまた類別する資料がない。山村の集團型に至つては、農蠶村より遙かに小さく、一〇世帯から三〇世帯のものが最も多い。三〇世帯から五〇世帯のもの、また五〇世帯から一〇〇世帯のものほど、順次部落の數が少なくなつてゆくのは、農蠶村と反對である。これはその生活環境の上から見て、當然のことであらう。一〇〇世帯から一五〇世帯のものは、農蠶村より遙かに少ないのに、一〇世帯未満のもの、反つて農蠶村より多いこともまた首肯されることである。一五〇世帯から二〇〇世帯までのものになると、農蠶村に於ては、部落數が七〇代であるのに山村に於ては三〇部落に達しない。かく農蠶山村の集團型の群の大小が、その經濟機能や社會機能と相關關係にあるべきこともまた類推に難くはない。これらの解釋に就いては「村落



居住と人口との關係の一考察」に就て幾分それに觸れた。かゝる村落社會は明治維新以前には、村落共同體の一個體として、それ／＼經濟的また社會的機能を有つてゐたが、明治維新以後の經濟的並に社會的變革は、その機能にも影響し、爲にその人口の流動を餘儀なくしたことは、東山梨郡の事實に於てもそれが明かであり、殊に案下部落の「過剩人口の行方」の圖によつて一層鮮明にされる。かゝる村落人口の移動は、資源と生産と労働との相關關係から生み出されてゐることは、案下部落に就いての研究のやうに史的考察に據らなければならぬ。しかもそれが圖示されることによつて明確にされる。わが國の村落社會の經濟的更生に對しては、己に、農林行政の諸施設に待つ所が多かつたが、最近内務行政に於て、それらの有機的な機能の強化に對する綜合的な指導の必要が提唱され、また若き社會學者等によつて、農村協同體の研究や部落中心主義の社會施設乃至教育施設の必要が主張さるゝに至つたことは、わが國の村落行政振興の上に、また村落社會研究の上に、新しい動向を示すものである。

村落社會と殆んど對蹠的關係にある都市、殊に大都市の商工業の發展と交通機關の改善とが、人口の都市集中を來たしつゝあることは、近年大都市に於ける人口の激増がこれを證據立てゝゐる。しかも島國であるわが國の地理的位置は、北は北海道から南は九州に至るまでの間に、重要港灣四十五港と指定港灣三百十八港を育成し、それがわが國の都市の形態と機能に一大特色を保持してゐる。而して天然資源に乏しいわが國は、石炭を除いた主なる工業原料は、殆んど全部を外國に仰がなければならぬから、その經濟的輸送の必要上、大型船による大量輸送が

企てられ、その輸送費を軽減するために、それらを原料とする工業は、重要港灣附近に於て營爲されなければならない。かくして大阪・神戸・横濱を中心としての工業地域は著しく擴大され、これに要する労働力の需給關係は、終に農村の青年層人口を吸収し、それが國民保健の上に重大な關係を及ぼすやうになつて來てゐる。最近、わたくしは、ある公務の關係上、近代的大都市の多い神奈川県に就て、農村の人的資源としての青年層體力基本調査にたづさはる機會を得、三四の農村に就て、男女青年の移動の傾向とその保健衛生状態を見聞し得たのであるが、近年、府縣の所々に意圖されつゝある臨海工業地帯の出現に伴ふ労働力の需給に基く保健問題は、新に興りつゝある人口問題として看過すべからざる事象である。

交通機關の發達による村落と都市との空間的關係の時間的近適は、村落社會と都市社會のあらゆる交流を至便にし、この兩者の經濟的並に社會的機能の均衡を同一地域に抱擁する都鄙社會の現出を、殊に大都市の近郊にまた工場工業地域などに見るに至つた。これまた認識すべき風土の新しい一對象である。

このやうに述べて來ると、日本の村落社會と都市社會は、悉く移り行きつゝあるかのやうに見ゆる。しかし長き歴史的發展を経たわが國の村落社會と都市社會には、今なほ牢乎として抜くべからざる精神が、あらゆる機能の上に現はれてゐる（「地域社會の構造と地理學」）。故にわれ／＼は、この國家社會構造の中に躍動しつゝある脈搏を探



り、如何にしてその血清を保持しつゝそれを培養すべきかを常に工夫しなければならない。これを地理學的にいへば、われわれの祖先の風土觀の中に、横溢してゐる地理學的精神を發見し、これを近代地理學的技術を以て培養し、移り行く風土の中に不動の風土の姿を生かすことが、研究の目標たるべきである。

常に精密な統計的方法と實地觀察によつて、自然と人文の地域的特質の認識に努めつゝ、風土と人類經驗の一般性を擴充し、更らにそれが如何に民族社會に具現してゐるかを比較研究し、また諸條件の地域的結合に基く環境の影響が、數學的な意味を有つ一つ一つの自然的事實や範疇のみによるものではないから、土地使用の技術の可能性を研究し、人口の包容量を測定し、以て地域的再集團の過程を明かにし、それを單なる地理學的研究に終らしめず、實際政治の行動原理にまで推進せしめることが、近代地理學の精神であるとするならば、徳川時代のわれらの祖先の學的業績の中にも、十分にこれらの萌芽を見出すことが出来る。故に、

われらの意圖すべき「風土」認識の學としての地理學の新しき樹立は、明治以前にわれわれの祖先によつて遺された地理學的精神と明治以後に輸入された近代地理學的技術との結合によつて生み出されなければならない。

と思ふ。かゝる見解からすれば、明治以前に構成された學的遺産を顧みずして、歐米の近代地理學的技術のみによつて、わが風土を認識しやうとする方法、それは、ふるまわが國の風土の認識に對しては、僅かに平面的描寫の役割をなすに終るのではないかを思はせる。わたくしが朝鮮また滿洲の風土と生活の考察に於て、特に民族的所産た

る文献を涉獵したのは、全くこの意味に外ならないのである。

## 三

7  
古來、この島國を生活環境としたわれわれの日本民族は、その構成上、數多の民族の流入と混淆を受けながらも、長い風土の馴化と統一國家の化成によつて、全く渾然たる一つの民族的結合をなし、その長い歴史と傳統に基く民族文化は、全世界に稀な民族國家社會を築き上げてゐる。

東亞の海洋の中に位置するこの島國的環境に生ひ立つたわれわれの常に觸目する同胞は、殆んど同質である。従つて異民族の生活と文化に對するわれらの認識と包容力は、必ずしも充分に訓練が積まれてゐるといふことは出来ない。勿論、昔から他民族の侵寇また他民族との鬭争に經驗の少ないわが日本民族は、歴史と傳統を異にしてゐる民族との接觸またはそれらとの鬭争が多かつた國民よりは、他民族に對しての殘虐性が少なく、それが朝鮮統治などにも功を收め得たともいひ得る。しかし、明治以後、歐米の文物制度の攝取に慣れたわれわれには、それらの諸國民の優越性の受容に慣れ、従つて動もすれば、圍繞地域の國民また諸民族の生活と文化に對しての洞察を欠くの憾がなかつたとはいはれないと思ふのである。

わたくしは、今から十七年前、朝鮮總督府の囑を受けて部落の調査に當つておつた當時、朝鮮の背後地としての



滿蒙をも調査し、その所感を雑誌『滿蒙』に載せた中に、

支那人に對する正解こそ、われわれ日本人の一人一人が、日夜念頭に置かねばならぬ大きな命題である。この正解はこの地域に職業を有した利權を有する人々のみの體驗によつてのみ得られるものではない。より客觀的なより組織的考察によつて明かにさるべきものである。即ち文献によつて、その思想や習俗を研究して得た考察を、更らに支那人との接觸、即ち或は苦力、或は農夫、或は商人、或は讀書人との接觸によつて是正さるべきであり、その集團生活、例へば村落や都市に於ける彼等の生活を凝視することによつて悟入さるべきである。かくして得たる支那人觀こそ、在滿の日本人の有つべき支那人觀であるべきであり、この地域に投資し企業しまた從業せんとするわが同胞の須知の準備知識たるべきであり、わが國民の一般的常識としても有つべき総合的な支那人觀であらねばならない。この意味からしても、わたくしは「現代支那人」に關する組織的な研究が、わが同胞の間に企畫さるべきであると思ふ。

かくいふと、ある人は、滿洲に於ける日本の特殊關係は、經濟的關係であり、従つてこの地域に於ける資源の開発と産業の傾向を明かにする調査を急務とする現時に於ては、支那人に關する學術的研究の如きは、全く閑事に過ぎないといはれるかも知れない。しかし如何なる資源の開発も産業の振興も、人を通して行はるべきものであり、地元民である支那人との理解ある接觸を無視しては何事も出来ないと思ふ。かゝる見地から、わたくし

は、現代支那人の研究は、資源の開発や産業の現況の調査と共に、並行さるべきものであり、寧ろ一日も忽にすべからざるものであると信ずる。

以上は、實に十數年の卑見であるが、支那との結合關係が新に發生しつゝある今日に於て、再び以上の所説を繰返す必要があると思ふのである。

古來わが國と關係の深い朝鮮や滿洲、また支那に對するわが同胞の學術的研究は、歴史・思想・文學などに就ては、それら専門的業績が發表されてゐる。しかしその風土の認識と生活の凝視に基く研究が少ないことは近代地理學的研究が乏しいためであらうと思ふ。然るに、現前に密接な結合關係が生起し、しかも直接に指導誘掖の立場に立つやうになつたわれわれは、その風土と生活に對する科學的な認識を深めることが、當面の緊急事となつて來た。殊にわが同胞が北滿に幾多の分村計畫を實踐し、また全支に渡つての戦場にわが同胞が活躍し、これと共に平和的工作が着々意圖される今日としては、その風土と生活に就ての認識は、國民的常識としても一日も欠くべからざるに至つた。

しからは、如何なる研究基準が、かゝる時機に最も適應したものであるか。

わたくしが今まで朝鮮また滿洲を踏査し、その生活と環境との關係を考察した經驗からすれば、今日、支那の「風土」の近代地理學的考察は、この際最も必要であり、それには、



「人類社會と生活環境との關係の認識」といふ地理學の通念よりも、民族社會との關係のそれが主體となるべきである。民族社會の核心としては、まづ村落社會が研究の對象として取上げらるべきである。

村落社會を如何に研究すべきかの方法に就きての私見は、已に、本書の諸論考に説述してあるが、これを民族生活と結び付けて考察するには、民族生活を書き綴つてある文献の涉獵と、民族生活殊に村落生活の凝視が第一の要件である。

これに就て思ひ出さるゝことは、支那の地質研究に對して、不朽の業績を残したドイツのリヒトホーフェン博士の「現代支那人性格」の研究である。しかもそれは廣い地域に亘つての觀察に基いた歸納的考察であつて、それは「支那人の身になつて、支那人の考へ方、感じ方を試みる特殊な才能を有つてゐたベルギー人スプリゲントを通譯として伴つたこと」も倅したのであるが、ドイツ人らしい認識の眼光とその科學的精神の躍動に基く風土と生活の考察の結果（大谷孝太郎『現代支那人』  
精神構造の研究』參照）である。わたくしは、これを讀んで、前に述べた現代支那人研究に就ての私見が誤つてゐないことを明かにしたと共に、今後の日本の地理學者の支那研究に對しては、その民族生活が如何に地理學的精神の中に表現されてゐるかを把握しつゝ、その風土の研究に着手するべきであることを提唱したい。

上海の同文書院に學び、支那人の知己ともいふべきわたくしの畏敬する外交官の一人が、最近、

支那の三大小説は、『水滸傳』と『金瓶梅』と『三國志』であるが、わたくしはパール・バックの『大地』をこれに加へて、四大小説といひたい。古來日本と支那とは、密接な關係にあり、明治以後から現在にかけて、支那に居住したわが同胞の數は、數へきれないほど多いのに、『大地』のやうな作品の生れないのは、支那から求むることが多くして、その生活を凝視する態度が欠けてゐるからである。

といはれたが、支那に四十年も滞在して、支那人と産業の振興に協力し、いたく支那人に信服されてゐる一人の實業家が

支那の社會を理解するためには、われ／＼日本人は村落生活の研究を忽がせにしてはならないといふことを力説されたのと、また、故新渡戸博士が

人類史に於ける寛容の位置は、相當重視するべきである。寛容はあらゆる進歩と人類福祉の根柢深くにあるものである。文明はその大部分の生長をこの精神に負つてゐる。

といはれたことを思ひ合せ、今後、日支關係の問題を考へる人達はこれらの精神を省みつゝ、支那の風土と生活の凝視と認識に努むべきであり、われ／＼地理學徒は、これらの要請に對して學的寄與をなさなければならぬと思ふのである。（昭和一三、一〇、一五）



風  
土





沿海平野と海崖(太平洋岸)



段畑と鹽田(瀬戸内海岸)





扇状地と村落居住



新田開発と居住の發展

## 一 環境と日本民族

### 一 海洋と生活體驗

島即ちシマは、磯間といふ古語から出たものといはれてゐるが、四方海に囲まれてゐる島で、あらゆる生活——それが動植物でも人類でも——が、四圍の影響から、島らしく營まれるやうになつてゐるのは、我々の常に體驗する所である。

到る處、島國日本の海濱の風景に特色を添へてゐる磯馴松の木立は、地味の瘠せた岩間に育ちながらも、鹽風にままれままれて生立ち、平野や山間に育つてゐる松に見られない特殊な景色をつくるに役立つてゐる。そして又、かかる海濱を生活環境として生立つて來た我々日本人の血液の中にも、建國の昔からこの磯馴松のやうな強氣と氣韻とが、自然の中に養はれて來てゐることを、我々は否定することが出来ない。

日本晴の日に、我々はあらゆるものを蓋ひ盡す大空と、足下から無限に擴つてゐる大海原とが、遙か向ふに一碧相抱く天空海潤の廣やかな風景に對するならば、瀬戸内海にしる、日本海にしる、太平洋にしる、また東支那海にしる、



しろ、是等の海洋を生活環境とした我々日本人の心境には、強氣と氣韻にも劣らぬ偉大な包容性が、自ら養はれて来たことが首肯される。そして又、海洋が一旦風浪激して怒濤天に翻へる際にも、なほ漁業や航海の爲に、この偉大な天然力と戦はねばならなかつた我々日本人が、かゝる環境に依つて自然と不屈不撓の精神を鍛錬して来たことも認め得るであらう。

我々日本人のこの海洋に對する接觸と感銘とは、遠く建國以前からのことで、神武天皇が九州から大和への東征の事蹟に徴すると、瀬戸内海に於ける行程に數年間を要したといはれてゐるが、これによつても我々の祖先が、古來如何に海と島とに就いての生活體驗を豊かにしたことか。さればこそ大和平野に統一國家の礎を据ゑてからでも、島々に對しての憧憬と意識が極めて深かつた。こゝに島々が生み出されたといふ胎生傳説發生の理由が見られる。

我が國史の中で一番古いといはれてゐる『古事記』の序文には、「土を孕み島を産み給ふ」とあり、本文には「伊邪那岐命と伊邪那美命の矛先の鹽が垂つて、淡路・四國・隱岐・九州・壹岐・對馬・佐渡・本土等の八島が生れ、それが大八島國の名の起つたものであること、續いて瀬戸内海の兒島や小豆島などが生れた」ことが記されてゐる。

海洋に對しての生活體驗が、如何に我が民族精神の中に潜在してゐたかといふことは、その生活の經濟的基礎が殆んど農業の上に求められてゐた大和朝廷の時代に於てすら見られるので、例へば舒明天皇の國見の歌(萬葉集)に

大和には群山あれど

とりよろふ

天の香具山登り立ち

國見をすれば國原は

煙立ち立つ海原は

鷗立ち立つ

うまし國ぞ

あきつしま大和の國

かくの如く海洋的景觀が織り込まれてゐることによつても明かである。なほ海洋的景觀が祝詞の中に織り込まれてゐることは、祈年祭のそれにも見られる。

皇神の見霽し坐す四方の國は、天の壁立つ極み、國の退き立つ限り、青雲の靄く極み、白雲の墮坐向伏す限り、青海原は棹舵干さず、舟艦の至り留る極み、大海原に舟滿ち續けて……

海洋への生活體驗は、その生活資料の獲得によつて一層確實になる。あらゆる海産が直接の生活資料として取入れられたことは、古代の貝塚の遺跡は勿論、生業としての漁業に就いて、或は「須奈度利」(萬葉集)或は「伊乎止利」即ち魚取(和名抄)と記され、魚具や操舟が不完全な上代に於ては、漁業が殆んど淺海に於てなされたことは、淺漁を意味する「阿左流」(萬葉集)の言葉にも徴せられる。なほ「海人」とか「漁人」とかいふ言葉が、「記」「紀」に散見することからも上代の原始的漁業による生活が髣髴される。かく海産が我々の日常生活資料となつたばかりでなく、それが神膳にも供せられ、また宮廷の御料にもなつたことは、前に述べた祈年祭の祝詞の中にも、

青海原に住む物は、鰯の廣物、鰯の狭物、奥津藻菜、邊津藻菜に至るまで



とあるし、醍醐天皇の時に出来た上代生活の精神と様式を知るに足る法律書といはれてゐる『延喜式』の中には、宮廷に献上する魚類の産地としては、日向から伊豆に至る太平洋岸の國々、鮭の産地としては、越前から伯耆までの日本海岸の國々を挙げ、なほ鯛・烏賊・大鰯・鮫・鯖などの産地がそれ／＼記入されてある。

かくして、農業を立國の基礎とする國情にありながらも漁業は、それに次いで主要な生業であり、従つて之に従事する人達の中には、終に職業の分化を來し、『日本書紀』に據れば海人は「水手」にも編成され、諸國に海人が置かれるに至つた。この海人部の一族として名高き安曇族が、其の本據が玄海灘に臨める宗像郡(福岡縣)であつたに拘はらず、その名稱を山國信濃の郡名(南安曇郡)に残し、其の一族の祖神たる穗高神社が安曇郡にあるばかりでなく、この部族に由縁ある海部・犬飼などいふ地名が、信濃の國內に散見してゐるのに徴しても、島國人としての日本民族の國內に於ける活動が、交通の不便な當時に於てすら、如何に敢爲に行はれたかを知り得るであらう。三韓との國交が複雑となつて、百濟に日本府を設置された頃には、彼等の活動が國際的に進展するに至つたのは、國內から國外への飛躍であつた。奈良朝から平安朝にかけて行はれた遣唐使の船も、また海人部の手によつて動かされたといはれてゐる。鎌倉末から南北朝にかけて、戦亂相繼いだ國民生活の中で、利潤の多い海外貿易に目を着け、所謂「倭寇」となつて活躍したのも、島國人としての我が民族の國外への進展の著しき業績である。

以上は僅かに文献にあらはれた三四の事實によつて、島國人としての我々の祖先の生活體驗を窺つたに過ぎない

が、是等の史實の裏に隠れてゐる民衆の海洋に對する生活體驗こそ、二千五百年後の今日、島國人としての現代日本民族の生活體驗を活かす生活力であらねばならぬ。

嘗つて農相後藤文夫氏は、「協同精神の發揚」と題して、静岡縣焼津に於ける漁村青年講習會に出席した所感を述べて左の如くいつてゐる。

この講習會は、世間あり來りの本と机によるものではなくて、海洋の眞只中へ船に乗りこんでの實地教育である。七十名餘の青年が百何十噸かの漁船に乗り込んで、約半ヶ月といふもの海上生活を共にするので、全くの共同生活で、朝は午前五時起床と同時に訓練を行ひ、晝は技術者に就ての漁業の實習、夜は月下に郷土の盆踊を樂しむといつた具合に、厳格な規律の中に生活を樂しみ、精神的修養と技術的訓練、しかも娛樂をも織交ぜた意義ある教育をなしたのだが、丁度其の頃防空演習が眞に國民的に行はれたが、その際敵機の襲來など刻々の戦況に就いて、何處かしら或る一隻の漁船から非常に機敏に、然も的確に報告が本部に向けて送られて來るので、よく調べて見ると、それは焼津の海上講習會の若者達が乗り込んでゐた船からであつた。我が國の漁業の現状は、小規模の沿岸漁業から遠洋漁業に發展し、産業としては驚くべき進展であるが、漁村生活に就いては、また比較的世間の注意する所となつてゐないが、日本の漁村には、遠い昔から隣保共助の精神に基いた面白い慣習や制度が行はれてゐる所が多い。



といつて、この隣保共助の傳統を近代的な漁業組合に發達さす必要を述べてゐられるが、海洋に對してかゝる訓練の速功は、海洋に對する傳統的な潜在的な生活體驗がなかつたならば、容易に達せられるものではない。かゝる實例は他にも見出されるであらうし、こゝに我々は島國人としての日本民族と其の環境との關係を見出し、これを組織化する所に、共同體に對する國民的意識の再認識の意義が含まれてゐると思ふ。

## 二 風土と農業

我が日本民族が農業を営んでゐたことは、それが原始的な形態に於ては、大和平野に統一國家の礎を据ゑられな以前からであることは、人類生活の必然的な要求から推してもそれが知られる。即ち山幸が海幸とならび用ひられてゐたことは、『古事記』の上卷に、

火照命は海佐知毗古として、鰯廣物、鰯狹物を取りたまひ、火遠理命は山佐知毗古として毛麩物、毛柔物を取りたまひき

とあるし、大和平野に於ける農業生活に至つては、祈年祝の祝詞に、それが地域的にさへ記述されるほどに明かにされてゐる。即ち

御縣に坐す皇神等の前に白さく、高市・葛木・十市・志貴・山邊・曾布と、御名は白して、此の御縣（皇室領）に生ひ

出る甘菜・辛菜を持ち參來て、皇御孫命の長御膳の遠御膳と聞し食すが故に云々

なほ廣瀨大忌祭の祝詞の中には、同じく六の縣の山口に坐す皇神等に、種々の供物をして、

皇神等の敷坐す山々の口より、さくなだりに下し賜ふ水を甘水と受けて、天下の公民の取作れる奥都御歲（大收穫）を、惡き風荒き水に相せ賜はず、云々

とある。「山々の口よりさくなだり（差下）に下し賜ふ水を甘水と受けて」の一言によつて、我々は遠き古代の我々の祖先が、大和盆地の周邊をなしてゐる山麓、即ち谷川の水を引いて緩やかな傾斜地に容易に灌漑し得る所で、然も大和盆地の真中を流れてゐる大和川の洪水の害を免れ得る所に農業を営み始めたことが知られるし、それが『和名抄』（平安朝）のふるき郷名の所在からも明かにされる。かくして農業は、歴代の天皇の勸農と民衆の努力によつて發達し、その起原が、然も恐らくはマレイ・南洋方面にあるらしい稻が、主食物として栽培され所謂「豐葦原瑞德國」を實現したことは、前に述べた廣瀨大忌祭の祝詞の中の、「和稻・荒稻」といふ言葉にも立證される。

我々の祖先が、この島國としての日本に農業生活を營むが爲に最も重要な努力は、何よりも主食物たる稻を栽培する水田の開拓でなければならぬ。而してこの努力は、島國としての地形即ち山地の多いことから來る傾斜地の利用開拓が、その重要な役割となつてゐるからである。山麓の傾斜地を水田とする爲の苦心は、我々の祖先が最もやく開拓した大和平野の周圍の谷間々々の所謂山田に最もふるい姿が見られるのである。かくて谷川に沿うてゐる



る位置に水田のつくられるのは當然であるが、川岸をすつと離れた山側にも、地形に順應するためには、圓い小形のものや狭長なものが、しかも一枚々々の田の畦を段々にするが爲に、自然石を積み上げて築かれ、そこに用水をひくためには、また地形を利用してのうね／＼曲つた路筋が工夫されてゐる。私はヨーロッパの或る地理學者の書いた本の中に、地中海に沿うてゐる諸地域に文明のはやく起つた大きな一つの理由は、この地域に於ける重要な栽培植物であるオリブの樹蔭を、小さな農具で耕作する爲の農業經營、言葉を換へていへば集約的な農業經營に據るのであるといつてゐるのを見たことがある。私は同じ意味のことが、我が水田耕作に就いても言はれると思ふ。島國としての我が國の平坦地と緩傾斜地との割合を同じ島國である英國と比べると、英國の一部を形造つてゐるインランドとウェールズは、平坦地が百分の七十三もあるのに、日本では僅か十九に過ぎない。だから耕地の全面積でさへ、僅かに國土の總面積の一分五分に相當するに過ぎないのである。

水田を傾斜地につくる苦心に就いては、讀者は夫々の郷土で實見されてゐることと思ふが、こゝには田毎の月で全國的に知られてゐる信州城捨山に於ける經營方法だけを引用することにしよう。

口碑には朱鳥年間から開墾されたと傳へられてをり、寶永年間の領主の御筆入には、殆んど現今のやうに開き盡くされてゐたといはれてゐる。階段状に開かれてゐる段田の中で、上の田の畦畔が大きい處と、畦畔から多少水の出る處には、田の上側の方にうはよけといふ冷水の通る路を設けて、別に日當りのよい方から水をひくやう

にしたけれども、現今は暗渠によつて濕田を乾田とし、二毛作をするやうになつたから、かゝる設備はなくなつた。

私がこゝに之を引用するのは、單に傾斜地に於ける水田經營の技術的苦心だけを紹介する意味ばかりではない。かゝる技術的苦心の奏功の蔭には、一家擧つての努力が必要であり、一部落の協同も必要になつて來る。こゝに大きな精神的な結合が必然的に要求される。全日本に互つてのかゝる作業が、どれだけ日本の農民精神を鍛鍊したとか。

雨量の少ない瀬戸内海地域に於て、水田に灌漑する爲の堤の築造が、上代から工夫された事は、ふるく開けた讃岐などに見られるが、これらもまた我が國に於ける農業經營への一大試練であつた。同じく瀬戸内海地域に於ける無数の島々に於ける農業經營が、前に述べた地中海岸に於けるそのやうに、また奈良盆地などの農業經營と共に歸化人の技術に因つたことも注意しなければならない。

地形に依據した水田の經營に次いで、風土と農業との關係に於ける島國的な特徴は、日本が季節風帯に屬してゐることから起るものである。この季節風は冬季は北東に當つてゐるアジア大陸から、また夏季は南西の太平洋から吹いて來る。そして冬季の季節風は奥羽から北陸にかけての日本海岸地域を降雪地帯とし、爲にこの季節に於けるこの地域の農民は、その生活方法——住居や燃料や衣服に對しては防寒、食物に對しては貯藏——に對して特殊の



用意を繰返さなければならぬ。そればかりでなく融雪を終つての農業労働への活躍は、實に都會人の想像も及ばない苦心が要る。私の郷土の一友人が嘗てものした「北國に於ける農家の生活」の中に左の如き一節がある。

關東や關西の氣候と、北國の氣候とを比較したならば、春の季節は一月も二月も北國の方が後れてゐるので従つて種子蒔も田植も後れる筈である。春の雪解けを待つて種子蒔をなし、寒さにかじかむ手を焚火に温めてまでも田植をしなければならぬ苦しい理由がそこにある。制限された氣候の中になされる北國人の虐げられた生活、無理な農耕、あきらめから來る遲鈍な性格等、すべてそこに胚胎してゐる様にも思はれる。……北國の各季節に於ける農家作業の分配は、氣候の爲に非常に不均一である。即ち彼等が農耕をなし得る期間が短いから、その間の作業は一瀉千里の勢を以てしなければならない上に、長い冬眠生活の爲には、薪木の用意、魚菜の醃藏、宅地の防風設備等、なすべき事がとても多い。所がかゝる仕事は、秋になると雨の降る日が多いから、作業が一層制限される事になる。

かゝる北國の冬季の農業生活は、そこに永住してゐる人達の經濟生活をまたその精神生活を相當に特色付け、それが日本民族性への豊かさを添加する大きな土臺となつてゐることを我々は忘れてはならない。北國の中でも代表的な越後の農民が、冬季險しい清水越を踏えて關東に出稼し（中には移住したものもある）、江戸時代から今日に及んでゐるが、それが春季には郷土に歸つて忙しい農事にたづさはるのである。島國でありまた山國である日本の地形

的變異に富んでゐる風土に育まれた多様な地方生活が、綜合されて我が民族性に非常な弾力性を附與して來たことは、疑ふべからざる事實でなければならない。

私は十年前、短い時日ではあつたが、移植民の調査の公用で、西南日本の二府十九縣に出張したことがあるが、その時觸目した風景は、中國地方に於ける山陽・山陰の差異、また九州に於ける北部と南部との差異がはつきりと腦裡に映じた。のみならず、それらの風土に基礎づけられた農業生活が、移植民の動向にまで著しく反映してゐるのに驚かされたのである。次に當時の筆記から摘録して見ると、

京都・兵庫・岡山・廣島の三府三縣に互つてゐる中國山脈の中の山地帯は、南方の平野地帯（畿内平野から瀬戸内海岸にかけて）に、季節的に勞力を供給する。例へば京都府の船井郡では、南部の宇治・久世・綴喜・相樂四郡の製茶季に兵庫縣の水上・多紀二郡は、阪神間の酒造地に夫々勞力を供給する。京都府から兵庫縣に連つてゐる山地一帯からは、京都市や大阪市・神戸市や奈良市に、冬季に女中に來るものが多い。島根縣内で石見から出雲に出稼ぎに來るのは、山地から平野への季節的移動である。北部九州でもその南部の山麓地帯から北部の沿海地帯に季節的に移動するのと同じ動向である。香川縣は人口に對する耕地の狭いことは全國で屈指であるだけに、季節的移動が盛んで田植や稲刈には高知縣に、藪草刈には岡山・廣島二縣に、秋から春にかけての農閑季には、遠く賣薬を携へて北海道に赴くものも少くはない。愛媛縣の越智郡も人口の稠密な所で、同郡の櫻井町附近の農民は、櫻井町で出來る



漆器を、農閑季に九州や中國に行商するが、舊正月を終ると、旅に出て田植前に歸つて来る。又田植をすまして出てゆき、舊盆前に歸るものもある。

以上述べたやうな農民の季節的移動は、要するに、日本の風土と農業の關係の地方的差異を示すものであり、それがそれらの地方々々の經濟生活乃至精神生活の變異をも裏付けてゐるのである。しかも、近代交通機關のなかつた明治以前に於ては、是等の農民の季節的移動は、何れも徒歩での旅行によつて行はれたものであるから、それがどれ丈彼等の見聞を廣めたことであらう。かゝる地方的差異を認識した農民達は、更に大和巡りとか伊勢詣によつて、一層民族的意識への総合的な認識に導かれて行つたことは、所謂文獻を基礎とした歴史の上にはあらはれてゐないところの、「島國人としての日本民族の生きた精神の躍動」である。

我が日本のかゝる風土と生活との關係から来る多様性も、祖先以來目に慣れてゐる我々には、その感じは極めて薄い。ところが、大正九年から十二年にかけ、朝鮮總督府の囑託として朝鮮の農村を踏査し、北は咸鏡道や平安道から、南は全羅道や慶尙道の農民生活を觀察して、その單一さに淋しさを感じた私は、前述の西南日本の農業の多様性に基く農民生活の特質に直面した自分は、今更ながら驚いた。當時の私の最も大きな感銘は、「日本はふるい國でありながら常に若さを有ち得るのは、これらの環境から産み出される相異つた生活力の綜合がその重要な一要素である」といふことであつたが、これは實に日本民族がその環境から受くる一大恩恵であるといはれなければならない。

島國に於ける農業に關する我々の祖先の大きな努力として、最後に書き加へておかなければならないことは、沿海の低濕地を埋立しての新田開發である。この海岸の新田開發は、多くは徳川時代に於て行はれたもので、川口の寄洲を拓いたり、海岸を埋立てたものもあるが、排水や灌漑の工事が效を奏した結果に依るものも少くはない。私が十二三年前調査した南葛飾郡、今日では東京市の葛飾區となつてゐる地域は、江戸川と荒川との間に挟まれてゐる低濕な沖積地で、こゝの新田開發は幕府の直轄地であつただけに、代官・勘定役・普請役等が見立て、開墾せしめた見立新田を始め、村民が共同して開墾した村受新田、商人が豊かな財力で開墾した町人請負新田が多かつた。その新田の増加は正保・元祿・文化の三つの年代の地圖を比較すると分るのである(拙編『南葛飾郡誌』)。今こゝにこれを例示することを省くが、今日横濱市の中核をなしてゐる商業地帯(吉田新田)の如きも、大岡川の下流の入海であつた所を開墾したもので、横濱の開港以前已に水田として大部分は開墾されてゐた。かゝる沿海の低濕地の開墾は徳川時代に海に沿うてゐる諸藩で多く行はれ、最近また農林省での干拓事業としても相當に行はれてゐる。その企畫とこれを遂行してゆく努力とは、その計畫者の智能と技術にも依ることではあるが、之に参加した農民の撓まざる忍従に支持されて來たことの多いのは勿論であつて、かゝる地域の相當に廣い我が島國日本としては、そこで鍛へ上げられた性格が、民族性の涵養の上にも十分の基底をなしてゐることは疑ふ餘地がない。

最近農村の問題が、經濟上の問題、社會上の問題としてばかりでなく、國防上の問題としても盛んに論議される



やうになつたが、この農村問題を單に政策的に立場からのみ考察せず、その基底として島國人としての民族性とも關係づけて考察すべきである。即ち我が風土と農業との關係が、地方々々にどれだけの差異があるか、その差異が經濟更生とか自力更生とかの政策の遂行によつて如何に醇化されるか、また風土と農業とが如何に依存して地方性を構成してゐるかの研究にまで進まなければならない。

風土と農業に依存した地方性は、戰國時代の群雄がその經濟的支持者として、農業階級を訓練したことによつて、一層顯著になつて來た。甲斐に立籠つて雄を揮つた武田信玄も、結局民政に對して細心であつたから、彼の武力を支持し得たのである。またその遺臣の心あるものは、武田氏の歿後競つて歸農し、それが今日山梨縣に於ける多くの農村の中核をなしてゐる。又更に徳川幕府の鎖國時代に各藩に行はれた自給自給的な農村政策は、その他の産業政策と相俟つて、今日の農民の性格を築き上げる上に、重大なる役割を演じてゐるものと考へられる。たゞかうして出來上つた農民が、明治以後の激しい經濟的・社會的變動によつて、その性格は變化したか、また變化してゐないかの問題は、精密な研究資料に基いた綜合的研究の結果でなければ闡明されない。島國人としての日本民族の研究は、過去から現在へ、現在から將來への重大問題であるが、民族の大部を構成してゐる農民の研究も亦、かゝる立脚點から一層深く研究されなければならない。

との交通による直接の文化の傳播は固より、支那との航通でさへも、奈良時代に百濟の任那日本府が廢されて、日本の勢力が朝鮮半島よりなくなるまでは、朝鮮を迂回する航路を取つてゐた（推古朝の第一回遣唐使）。かくして大陸との交通は大陸の文化を傳へ、佛教は我が國の思想・文學には勿論、建築・繪畫・彫刻の上にも大きな足跡を残し、儒教もまた思想や道德の方面に多くの影響を與へた。

こゝに注意すべきは、大陸の文化を吸収するが爲に行はれた遣唐使は、前に述べたやうに推古朝から行はれたがそれが奈良朝を経て平安朝の初期に及び、

一、從來朝鮮半島を経て比較的安全な航路が、新羅との不和の爲に南支那海の航路を取るに至つたが、それが極めて航路難で危険であつたこと

二、我が國の文化が相當に發達し、爲に支那文化の飽滿を感じつゝ日本中心の思想が醸成しつゝあつたこと

以上の理由から廢されるやうになつた。そして、平安朝の中期以後、これらの大陸文化が基礎となつて日本文化の醸成がなされた。萬葉假名なる漢字を用ひた『萬葉集』から假名まじりの『古今和歌集』への轉化は、實によく日本文化の發展を物語つてゐる。之に次いで藤原時代に於ける日本文化の隆盛期は、寧ろ大陸とは交通の乏しい時代で、島國としての交通性よりも隔離性の發揮された時代である。而してその隔離性が對外的に最も顯著に發揮された適例は、鎌倉時代の元寇である。その後交通性としての倭寇（室町時代）、隔離性としての鎖國（徳川時代）が交



互して幕末に至り、交通性と隔離性とが開港と攘夷との二派に現はれた。併し幸にも明治維新によつて解決され、我が島國性が更に世界的な國際關係に於て之を發揮し得るに至つた。而して明治維新より約七十年後の今日の日本は、また此の島國性たる隔離と交通性とを、更に一層國內的に、また國際的に擴充しなければならぬ機會に遭遇してゐる。島國人としての日本民族の運命は、實にくしきものといはねばならない。然らば何を指して今日の日本の隔離性といふか、即ち「日本精神に還れ」の叫びであり、またその實踐である。しかし我が國の人口の過剰性は、國內的統制と國際的進出によつて、之を解決しなければならぬ状態にある。幸にも國際的經濟活動としての我が貿易品の世界的進出は、我が國の人口と産業との調節には、極めて好箇の現状にあるが、世界各國はこれを嫉視し妨害せんとしてゐる。しかも日本の現代社會の狀態は、明治維新當時とは非常に異なつた状態にある。故に島國性としての日本精神は、隔離性を發揮しては、國內に於ける非常時社會に善處し、交通性を發揮しては、國際經濟に適應するやうに努むべきである。こゝに我々は日本の明日への島國性の重要さを見出すのである。

#### 四 民族の構成

日本に限らず、島國人としての民族は、大陸に比べると概ね單一的で多種ではない。之は島國の民族本來の姿ではないが、島國の有つ二つの基本的な特性が、數多の異質的な民族を單一的なものに化してしまふ。即ち島の交通

性、言葉を換へていへば、島への交通の自由さは數多の異質的な諸民族の流入を容易にするけれども、島の隔離性即ち他から孤立してゐるその風土は、自ら是等の諸民族を單一の民族にしてしまふ。我が島國日本も、有史以前から極めて多數の民族の流入混淆を受けた。或は北から南から、また、アジア大陸や太平洋の諸島からも、屢々民族の移入があつた。しかも是等の諸民族は、長い年月を経るに従つて、風土の馴化と統一國家の化成によつて、いまや全く完全に渾然たる一つの民族的結合—民族的國家—を構成するに至つた。

すべて一民族が他の民族から區別せられる特徴、即ち人種を分類する基準は、體質的特徴と文化的特徴の二つに他ならない。體質的特徴とは、身長・頭形・顔形・顔面角の如く測定せられるものと、顔貌・皮膚色・毛髮形・眼色の如く、觀察によるもので、外に生理的特徴としては、最近有名になつた血液型の如きものがある。文化的特徴は、即ち言語・宗教・風習の如きものである。文化的特徴は體質的特徴に比べると極めて流動的であるから、民族が他の民族と交通し、接觸すると、互に相混交するのが通例である。人類學者はこれを「文化の傳播」として論じてゐる例へば嘗て未開のアメリカ・インディアンの特殊な風習に過ぎなかつた喫煙は、今や世界を擧げてその風習に染んでゐるが如きはその好例である。しかし文化的特徴のうちで、最も固定的なのは言語である。我が國の如きも、古來支那からは、言語として、また文字として多大の影響を受くべき位置にあつたけれども、その根本の性質は毫も改變されてゐない。體質的特徴に於ても、可變的流動性がある。それは新移住地の地理的環境から受ける變化である



例へば有史以前に南ロシア附近に居つたと推定せられる古代人種は、東西に分離し、一は西方に移動して現在のヨーロッパ人、即ち白人であり、他は東方に移動して印度に入り、その熱帯的風土に馴化し、皮膚の色は黒褐色に變じて現在の印度人となつた。しかも、言語は共に同種たるインド・ヨーロッパ語族に所屬してゐる。

私はこゝに我が日本民族の人種的構成に就いて、その體質的、また文化的兩側面から、従來の諸學者の研究業績を述べ、之を前述した島國性から顧みてみようと思ふ。

アジアは各大陸の中で最も多種の民族の居住地域である。故に人種分類に就いて最高權威者であるフランスの人類學者ドニッケは、その名著『人種と世界諸民族』に於て、現今の學者の多く依據する世界の六大人種の區分を案出したが、その中の五大人種をアジアは包容してゐる。我が日本民族は、殊に極東アジアに於て、朝鮮人と共に人類學上疑問視される民族で、周圍の諸民族とは一見全く格段の相違を示してゐる。即ち東北アジアを占めるツングース人・蒙古人、その他、アジア中部に占居する支那人、南方アジアに擴散するマレー・ポリネシア民族などに比較して、全く獨立した特殊な存在である。だから、日本民族の人種上の地位に就いては、人類學者・言語學者・歴史家の間には論議が多く、殊に我が國の諸學者は明治以後之に就いて努力するところが大であつた。例へば我が神話に於て、民族の發祥地とせられてゐる高天原の所在に就いても、高天原朝鮮説・高天原南洋説などの異説がある。

言語學者や東洋學者の中で、主として言語の研究によつて、日本民族の人種的地位を論じた人々は、多くは日本民族の北方起原を論じて、東北アジアの諸民族との關係に注意した。この説によれば、日本民族は有史以前 東北アジアに居住し、更に現在のそれら諸民族から分離して、日本群島に移住したといはれてゐる。その理由は、東北アジアの言語のうち、最も日本語と近縁關係にあるのは朝鮮語であり、日本語は朝鮮語とともに、ウラル・アルタイ語族に屬することに基いてゐるからで、日鮮兩語の近似に就いては、既に新井白石も注意した所であつたが、白鳥庫吉博士・故宮崎道三郎博士・金澤庄三郎博士の研究が出で、次いで藤岡勝二博士は、明かに日本語がウラル・アルタイ語族に所屬することを示され、それに共通する十四の原則のうち、殆んどすべてが日本語に見出されるとされた。

以上諸氏の研究は、主として言語の文法的諸性質に就いて行はれたのであつたが、言語の他の研究、即ち文法的諸性質ではなく、單語の類似に注意すれば、日本語は、東南アジアの諸語、南洋諸島のインドネシア語、ポリネシア語、またマレー語、フィリピン語と極めて密接な關係にあることが明かに示される。これらの研究は、坪井九馬三博士・新村出博士・堀岡文吾・北里蘭の諸氏で、最近最も廣汎な研究を公にせられたのは、松本信廣教授である。同教授によると、例へば、

一、手——日本語テ、琉球テヒ——は、テテク(マレー)、テ(印度支那)、その他、多く安南、南洋に、ティ・タイ・



ティ・テイに。

二、目——日本語メ(目)、オモ(額)、琉球ミ(目)、ムチ(額)——は、メデゥマト(マレイ)、マト(モン)、メタ(シャム)、マト(印度支那)その他に。

三、臍——日本語ボゾ(ホゾ)、琉球ブス——は、プワ(マレイ)、プセル(ジャワ)。その他に、フシエト、プセル、ボン、ボソル、ボンドなど。

があり、なほ子、親、神、日、夕、火、木、稻、米、粃、森、畑、澤、蜥蜴、飲む、嘗む、洗ふなどの諸語も同様であり、口、顎、腹、女陰、身體、指、人など、多数の類似が表示されてゐる。これら重要単語の近似は、南方系統の諸語、即ち松本教授等の所謂オーストロ・アジア語との密接なる關聯を實證するものである。

唯、それらの文法上の研究はまだ確證せられない憾はあるが、これほどの類似は單なる文化的接觸、例へば支那語やヨーロッパ語の日本語に對すると同様な關係にあるとは考へられないし、そこには、民族的な人種的關係が存在したことを豫想せしめるに十分である。しかし、これら南方系諸語と日本語の關聯を以て、直ちに前に述べた北方系諸語との關係を等閑視するのは尙早であつて、恐らく南北兩方に繋がるどころの日本語の位置が考へらるべきであらう。言語以外の文化的特徴たる一般的な生活上の風習や、原始的宗教の諸型式を人種的相違の基準とすることは、可なり不確實な方法ではあるが、この方面の鳥居龍藏博士の研究に徴すると、日本民族は結局、北方系及

び南方系の双方に類似したものの存在することが注意せられてゐる。

體質的方面からの研究は、先づ有史以前の人骨、即ち貝塚などから出土した石器時代の住民に行はれたものを舉げねばならない。それには坪井正五郎・小金井良精・長谷部言人諸博士の業績が舉げらるべきで、それによると、先住民族をアイヌ族とし、その後北方諸族、また南方諸族の混淆同化によつて、原日本民族が構成せられたとされてゐる。たゞ清野博士は、石器人骨と現日本人の相違を認められないのは注目すべき研究であらう。なほ現日本人について直接行はれた研究には、松村瞭博士の基本的研究がある。同博士は、最も顯著な人種の特徴を示す頭形と身長計測を行つたが、その結果は、從來親近關係にあると考へられてゐたアイヌ族、朝鮮族とは著しい差違が發見され、それらの計測の數値の平均値のみをとつて、周圍諸民族と比較すると、北部では東北アジアの諸民族、南部では支那南部と印度支那方面の諸族、臺灣・フィリピン・ボルネオ・スマトラ附近の諸民族中に見られるといはれてゐる。これは日本民族の構成を研究するものにとつては、極めて重視すべき事實を齎すものである。なほ、血液型の人種的研究については、ポーランドの學者ヒルツェフェルドがO・A・B・ABの各型(O型—落着いてゐる人、A型—遠慮深い人、B型—氣輕であつさりした人、AB型—内と外とが異つてゐて判斷しにくい人)に就いての研究から人種別による相違あることを發見し、日本人は南太平洋諸島住民に近いことになつたが、我が古川竹二氏は、この四型と氣質との關係に就いて研究し、その活動性は積極型と消極型とが殆んど相半ばして居り、歐洲の三民族(北方・アルプス・



地中海)に比較すると、北方とアルプスとの中間に位し、各型の分布よりやゝ外向型の性格の者が多いといはれてゐる(式場隆三郎博士)。

以上、種々なる研究から、日本民族は北方と南方の近隣諸民族の混血的構成を有することが明かになつたが、唯その基本的なものが何れであるかの決定は將來に残されてゐる。しかしアジア大陸の東縁に帶狀をなしてゐる日本群島の地理的位置は、有史以前に、已に大陸からの民族的移動を可能にした事が當然であるべきであり、朝鮮半島を経て、濟州島・壹岐・對馬等を航運の中繼點として、原始的交通をなし、また日本海は一種の内海としての役割をなしたばかりでなく、その中の佐渡・隱岐の點在と能登半島の突出は、これまた航運の中繼點としての價値を大ならしめたであらう。更に、南太平洋の諸島からは、フィリッピン・臺灣・沖繩列島の弧彎も交通の足場となり、所謂暖流黒潮に乗つて自然に漂着したのも、少くはなかつたであらう。かく間斷なく周圍から流入した多數の民族は、もと夫々の特徴を具へてゐたのであらうが、それらの民族的特質は、島國としての隔離性の下に、また統一的な統治の下に、完全に同化融合してこゝに單一的な民族が育成された。かゝる状態は優秀な民族を構成する條件であつて、我が日本民族の種的優越性は、寧ろ自信を以て今後の國際場裡に馳驅し得べきであらう。之に就いては小林政助氏の「日本民族の世界的使命」(經濟俱樂部講演)の如き大に聽くべきの説で、中には左の一節がある。

在米日本人の二世は、非常に優秀であります。今から十何年以前に、ロックフェーラーの財團が、二十五萬弗

の奨勵金で、スタンフォード大學のツリート博士が中心になつて太平洋沿岸の子供の教育のメンタルテストをやつて見たが、アメリカ人の子供よりも優れてゐる事を發見した。その報告によると、アメリカの間屋の子供より日本人の間屋の子供は十點高い。普通の商人の子供、農村の子供は、日本人の方が十四點高い。労働者の子供は日本人の子供の方がアメリカ人労働者の子供よりも十點高い。小學校から大學に進む子供は、アメリカ人の子供は百人に就き僅に二人であるのに日本人の子供は十一人強である。かく非常に優秀である。彼等の間からは大學教授も出た。發明家も出た。建築家も辯護士も商業家も農業家も出た。新聞記者も出た。皆非常に優秀である。日本民族がこの際各々が自覺して本當に自重し自覺して、自尊心を有ち、内に省みて捨つべきものを捨て、採るべきものを採つて、人格品性を磨いて本當に努力するならば、二十五年の後には、全世界の民族は、期せずして日本人に頭を下げる時代が來ると思ふ。さういふ意味で、日本民族は本當に自愛自重して、精神を締めて戴かなければならぬ。畏多い事ではあるが、

明治天皇の御製に、

よもの海皆はらからと思ふ世に

など波風の立ち騒ぐらん

とあるが、この四海同胞の精神を體して、全世界に膨脹し、東洋人と西洋人との調和を圖り、西洋人と東洋人との



一大衝突、一大混亂を日本民族が中心となつて解決してこそ、そこに初めて世界平等の精神が現はれて来る。これが世界の諸民族に對する日本民族の使命である。

常に日本とアメリカとの國際關係に關心し、「太平洋の橋になる」ことを畢生の念願とされた故新渡戸稻造博士は、一九三三年の春から年一九三四年の春にかけ約一年間、日本の滿洲問題に就いての立場を明かにする爲に、合衆國各地の講演旅行をされたので、その疲労が原因になつて、その夏カナダのバンフで開かれた太平洋會議を最後として、カナダで七十二歳を一期として急逝されたが、バンフに於ける太平洋會議を前にして、同會議に於ける講演「新時代の歩み」の中に

人類史に於ける寛容の位置は、相當重視さるべきである。寛容はあらゆる進歩と人類福祉の根底深くにあるものである。文明はその大部分の成長をこの精神に負うてゐる。

といふ言葉があるが、今後の日本民族の世界的使命は、かゝる精神を體しての世界觀から出發しなければ、それは固陋なる日本精神の墨守に墮するに終るであらう。

## 五 世界と郷土

一九三一年に、私はパリーの國際地理學會議に出席した節に、國際都市ジュネヴァを訪れ、國際的な教育機關に就いて、何か特殊な施設がないかをさがした。そこには國際學校(Ecole Internationale)なる學校があり、しかもそれはジュネヴァに於ける各國人の子女を教育するのに、公平な立場から世界を理解させようとの深い用意から計企されたもので、従つてその校長の人選も慎重に審議され、佛人ポール・デュビユー氏(當時は老齡のためその令嬢が校長であつた)が推されてゐた。世界を正しく理解するための同氏獨特の地理教育は、フランスの人文地理學の開祖といはれるヴィダル・ド・ラブラーシユの高弟である丈に、全く獨創的な教育方法によつて、國際心を養成することが工夫されてゐた。即ち同氏は、學生の年齢の上から、地理教育をする爲に三級に分ち、はじめの級には、全地球を一つの自然の球體として、それに就いての緯度や經度の位置を幾度となく作圖することによつて生徒の頭にたゞきこむ方法を取り、しかも黒板には北極または南極を中心とする半球圖を色チヨークで畫かれることによつて、生徒に大きな世界的な考へを起さすやうに工夫される。幾度となく描くこの作圖には、生徒も容易ではない。しかし次の級になると、ガッシリしたこの基礎の上に、大陸や大洋の位置、また氣候・生物・人類の分布が説かれるのであるから、生徒は文章の上からではなしに、それらの地理的分布の理由が、科學的に呑込めるのである。そこで新聞の記事を讀んでも、またラジオで世界的の事件を家庭で聞いても、それからの世界的な事實への聯想が容易に首肯されるやうになつて来る事が、教科書のみで教へられた世界地理と全然違つて自らの世界を生み出すやうな世界觀を有つやうになる。かくして一番年上の級には、現に世界の重要なる國際的事件の起つてゐる地域に就いて、理解



するやうに教授されるのである。

當時已に滿洲問題が、世界の關心事となつてゐたから、その教授には、各生徒が巧に描いた滿洲の地圖を手にして、熱心に滿洲研究をなしてゐるのには、私は少からず驚かされたのであつた。

世界の一角に立つてゐる今日の日本、しかもそれが極めて複雑な國際的情勢の間に立ちながら、よく民族的使命を果すの方法は、冷靜に「先づ彼を知りて我を明かにする」ことではなければならず、それには科學的方法を取る事、即ち前に述べた國際地理教育のやうな方法から出發するのが正當であつて、我を知るが爲には先づ彼を研究しなければならぬ。

島國とはいひながら、大洋の真中にある離れ島ではなく、自然的に見ても文化的に見ても、殆んどアジア大陸の一部否主腦部ともいふべき我が國は、獨自な民族的特質を根幹としつゝ、先づ印度及び支那の文化と融合し、更に歐米の文化をも輸入して、明治天皇の御製にもあるやうに、

よきをとりあしきをすてゝ外國に

おとらぬ國となすよしもがな

の念願に燃えてゐる。それ故に我が國民は、東亞に於ける國家的存在の確立を圖りつゝ、常に世界列強の動靜に細心の注意を拂はなければならぬ。伊藤述史氏は、「危機を孕むヨーロッパ」(昭和九・一・一一、讀賣新聞)と題して、

ヨーロッパの情勢は、歐洲大戰前一九二二年頃と同様で、諸國民はそれらの民族性に従つた自然的な運命的な坂を下り、世紀の大悲劇を音もなく聲もなく、眼に見えぬ速度で準備してゐる。この間に處して、日本人も今後の國際關係の推移變轉に就いては、十分警戒してかゝらねばならぬ。

といつてゐるが、世界を正しく知り、我が民族、我が國家の立場を明かにした上の我々は、これを體驗し、また實踐してゆく立場を何處に求むべきであるか。これは何處でもない、我々の郷土である村・町、また市でなければならぬ。それは我々の郷土である村町市たる自治的單位を足場にすべきであり、しかもそれを全世界的存在の、また國家的存在の一部を構成してゐるものとしての自覺の上でなすべきである。

我々の郷土である村も、町も、また市も、その生立ちはふるく、従つてそこに島國人としての我が民族精神を宿してゐる。たゞそれが、幕末以後の我が經濟的並に社會的變動によつて、それが如何に變つたか。明治以後の地方制度、教育制度乃至政黨政治の影響はどうであるか。また最近の經濟更生、自力更生乃至國際經濟からの自覺、殊に青年の覺醒はどうか。こゝに我々は、島國人としての日本民族の國際的自覺を見出さなければならぬ。

之に對しての地方行政、社會行政、農林行政乃至教育行政等は、如何に地方社會の變動を適切に指導したか。また地方社會を構成してゐる我々民衆は如何に自治的に活動して來たか。自治制施行後、五十年を経た今日としては、また非常時局の今日としては、嚴正に反省されなければならない。かくして我々の履むべき道は、一にその本



質を認識しつゝ中正の歩みをしつかりと、一步々々踏み続けるにある。

我々がこの歩みを踏む爲には、私は讀者に幕末から明治、明治から大正・昭和の時代を通じて、日本精神を國際化し之を體現して、我々に示された我が同胞の一人である故新渡戸先生の遺著に、之を聴き得ることの少からざることを最後に一言したいと思ふ。

## 二 地域社會の構造と地理學

### 一 序 説

人類集團の地球上に於ける分布は、各所に分散し、其の文化度は多様である。彼等は夫々異つた環境に適應するが爲には、生活を助成すると同時にこれを妨げる環境に對して、夫々の生存の爲に地方的解決をなした。此の人類集團と環境との關係は、年處を経るに従つてそれが緊密となり、こゝに郷土なる概念が構成された。近代地理學の創始者といはれるリッターが、其の著『地理學及び發見の歴史』（一八六一年）に於て、「無智蒙昧に止つてゐる諸民族も、彼等の郷土(Heimat)の學を有つてゐる」と道破してゐるのは、あらゆる人類集團と其の生活環境から生み出される郷土的關係を明かにしたものであり、筆者が、郷土を「特定の人口集團と親和的關係にある特定地域」と解したのも亦此の意に外ならない。

此の郷土を地理學的に解釋する時、そこに如何なる地理的要因が見出されるか。郷土への我々の居住は、何れも地球上に立地してゐる關係上、それは大地と大氣の接觸面の立體的特質に支配され、其の立體的类型は、山地と



平野と海岸に大別される。而して此の三つの土地の種類は、それを被覆する植物と土壤によつて、夫々の居住條件が價値付けられる。殊に近代地理學の建設によつて生れた地域概念は、一層郷土の立地的意義を明確にする。故に筆者は、郷土の地理的條件を明かにするが爲に、先づ地域を決定する(一)植物社會、(二)土壤、(三)地域に就いて概観し、次に(四)山地、(五)平野、(六)海岸等に就いて要説する。

### 一 植物社會

植物はあらゆる動物の庇護物として、また直接はた間接の食料として役立つから、人類集團の生活資料としてもそれが最も重要である。だから地球上の氣候的並に土壤的條件が植物の生育に適する地域は、夫々各種植物の生態を規定するばかりでなく、それが動物群の居住地域の基底をもなすに至るものである。かくて植物社會の生態型は動物社會並に人類社會の食料を決定するばかりでなく、それが彼等の住所と其の生活の一般條件をも規定する。故に人類集團の生活環境の地理的位置を明かにするには、先づ地球上の植物社會の地理的分布を考察する事が必要とする。即ちハーデーに據れば、各大陸の植物社會の分布は左の如くである。

#### アジア洲

- 一、苔原及び高山地帯 (Tundra & lofty Mountain) 二、松柏森林地帯 (Taiga or Pine Forest) 三、草原



第一圖 アジア洲の植物地帯圖

#### ヨーロッパ洲

- (Steppe) 四、冷涼落葉森林地帯 (Cool Deciduous F.) 五、地中海植物地帯 (Mediterranean V.) 六、夏季多雨森林地帯 (Summer Rain F.) 七、季節風及び熱帯森林地帯 (Monsoon & Equatorial F.) 八、草原 (Savana) 九、叢地 (Scrub) 一〇、沙漠 (Desert)

- 一、苔原 (Tundra) 二、松柏森林地帯 (Taiga or Pine F.) 三、冷涼森林地帯 (Cool Temperate F.) 四、中部高地帯及びカルパチア山地帯 (Central Highland & Carpathian Mt.) 五、アルプス (Alps) 六、草原 (Steppe) 七、カスピアン砂漠地帯 (Caspian Semi-Desert) 八、草原の西部諸島 (Western Islands of Steppe) 九、地中海植物地帯 (Mediterranean V.)

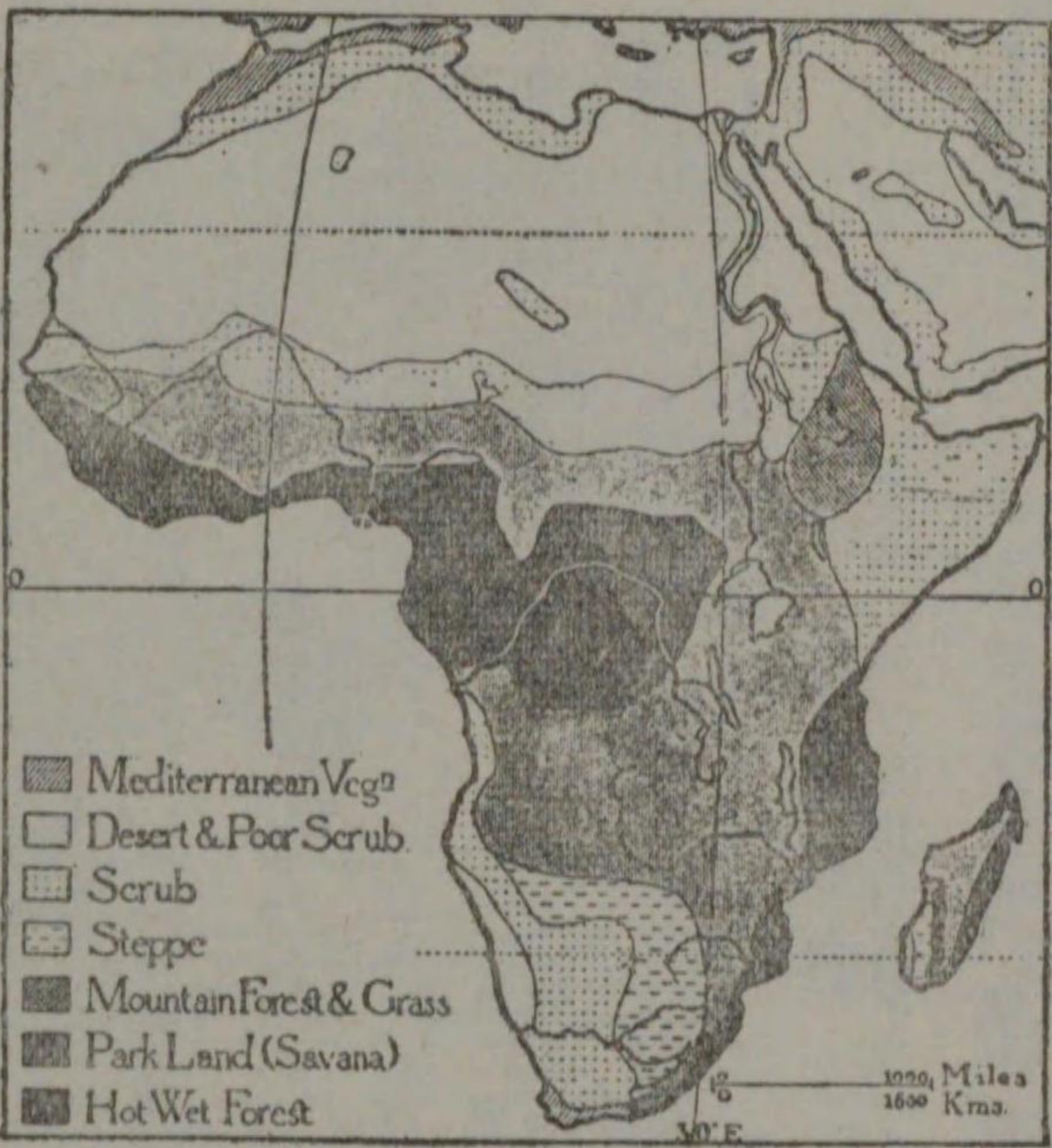
#### アフリカ洲

- 一、地中海植物地帯 (Mediterranean V.) 二、沙漠及び小叢地 (Desert & Poor Scrub) 三、叢地 (Scrub) 四、草原 (Steppe) 五、山地森林及び草地帯 (Mountain Forest & Grass) 六、草原 (Savana or Park)



二 地域社會の構造と地理學  
(Land)

オーストラリア洲



第二圖 アフリカ洲の植物地帯圖

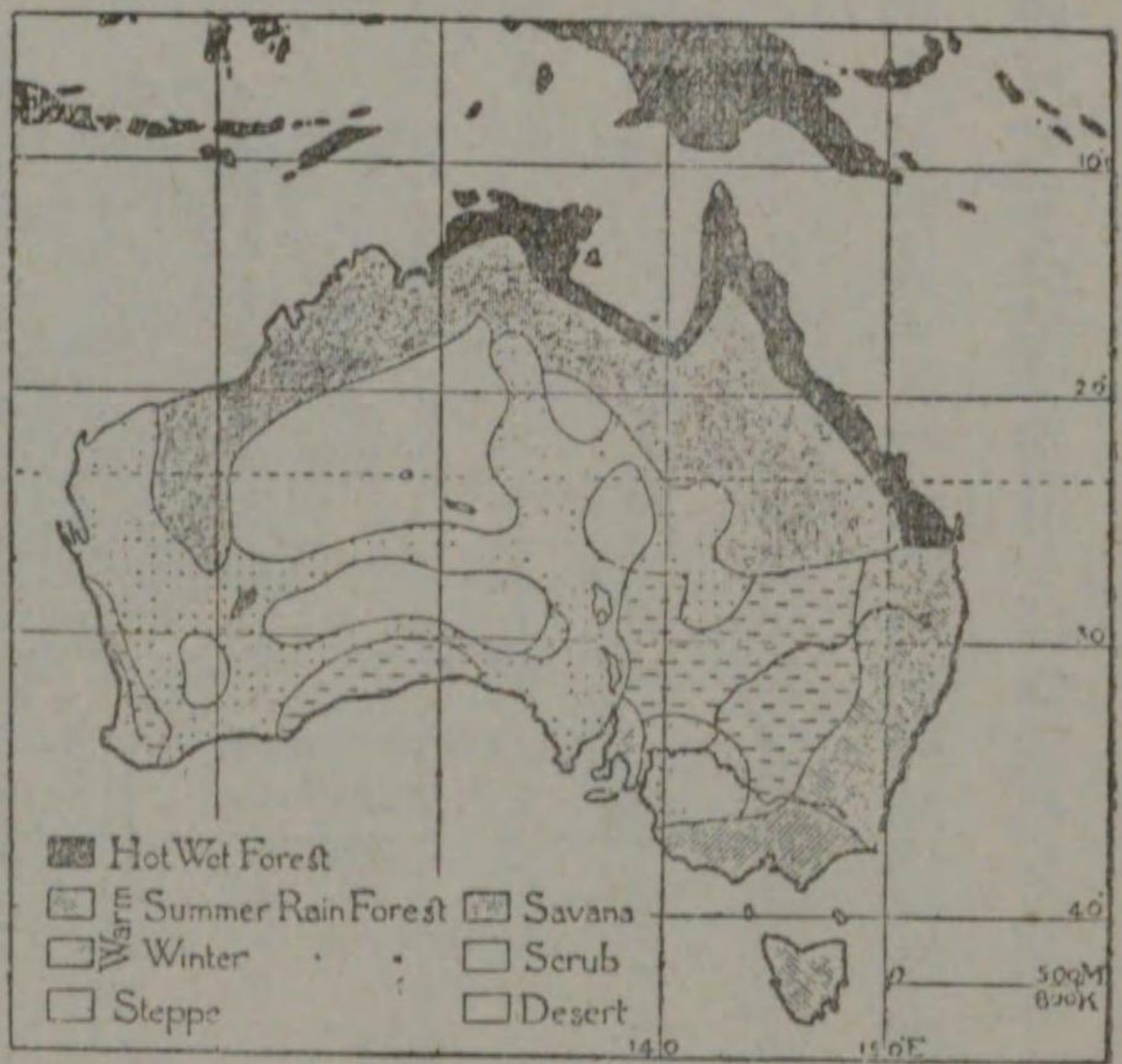
南アメリカ洲

- 一、草原 (Park Steppe)
- 二、叢地 (Scrub)
- 三、沙漠 (Desert)

- 一、高温多濕森林地帯 (Hot Wet F.)
- 二、夏季多雨森林地帯 (Summer Rain F.)
- 三、冬季多雨森林地帯 (Winter Rain F.)
- 四、草原 (Steppe)
- 五、草原 (Savana)
- 六、叢地 (Scrub)
- 七、沙漠 (Desert)

北アメリカ洲

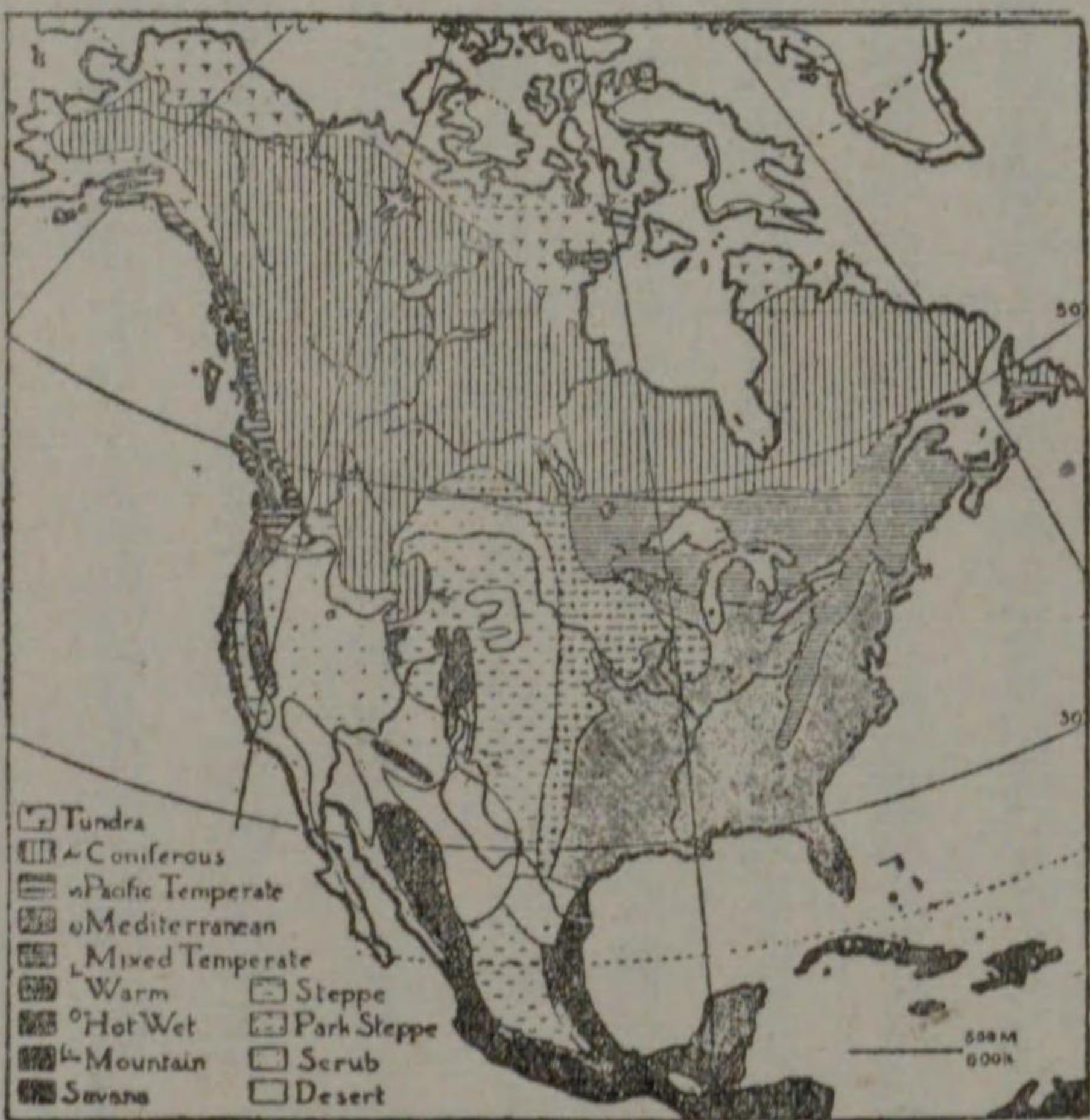
- 一、苔原 (Tundra)
- 二、松柏森林地帯 (Coniferous F.)
- 三、太平洋岸温帯森林地帯 (Pacific Temperate F.)
- 四、地中海植物地帯 (Mediterranean V.)
- 五、温帯混交森林地帯 (Mixed Temperate F.)
- 六、温暖森林地帯 (Warm F.)
- 七、高温多濕森林地帯 (Hot Wet F.)
- 八、山地森林地帯 (Mountain F.)
- 九、草原 (Savana)
- 一〇、草原 (Steppe)



第三圖 オーストラリア洲の植物地帯圖

原 (Savana) 一三、沼濕地帯 (Swamp)

是等の植物社會は、人類集團の居住を見ない時代に於ては、何れも夫々の原始的形態即ち自然的社會形態を保持してゐたが、過去及び現在に於ける人類の活動によつて、固有の状態が變改され、所謂半自然的社會を現出するに至つた地域が多い。殊に人類集團の定住

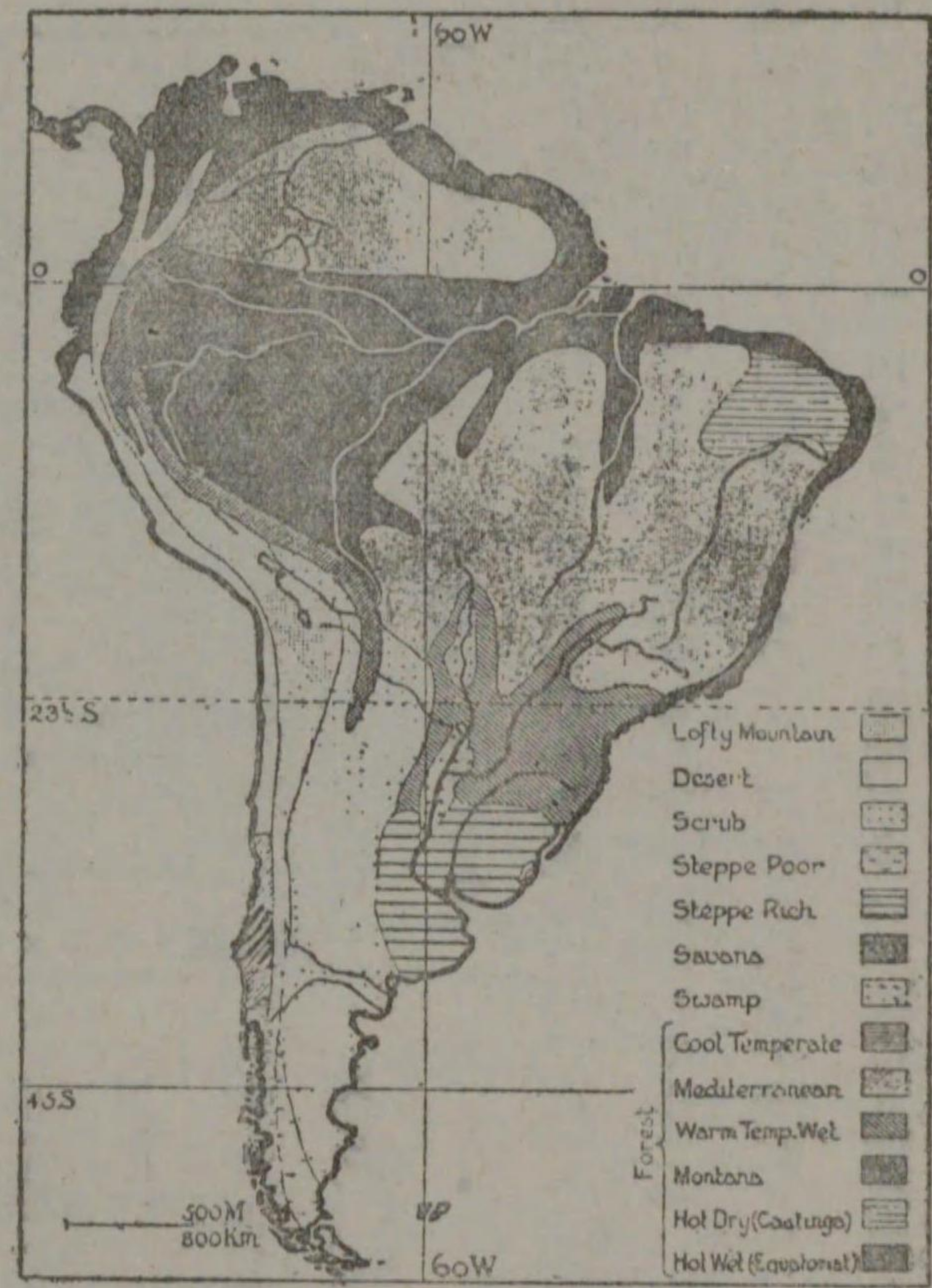


第四圖 北アメリカ洲の植物地帯圖

- 一、寒地森林地帯 (Cool Temperate F.)
- 二、地中海植物地帯 (Mediterranean V.)
- 三、温暖森林地帯 (Warm Temperate F.)
- 四、山地森林地帯 (Mountain F.)
- 五、高温乾燥地帯 (Hot Dry F.)
- 六、高温多濕森林地帯 (Hot Wet F.)
- 七、高山地帯 ( lofty Mountain)
- 八、沙漠 (Desert)
- 九、叢地 (Scrub)
- 一〇、小草原 (Steppe)
- 一一、大草原 (Steppe)
- 一二、草 (Rich)
- 一三、草







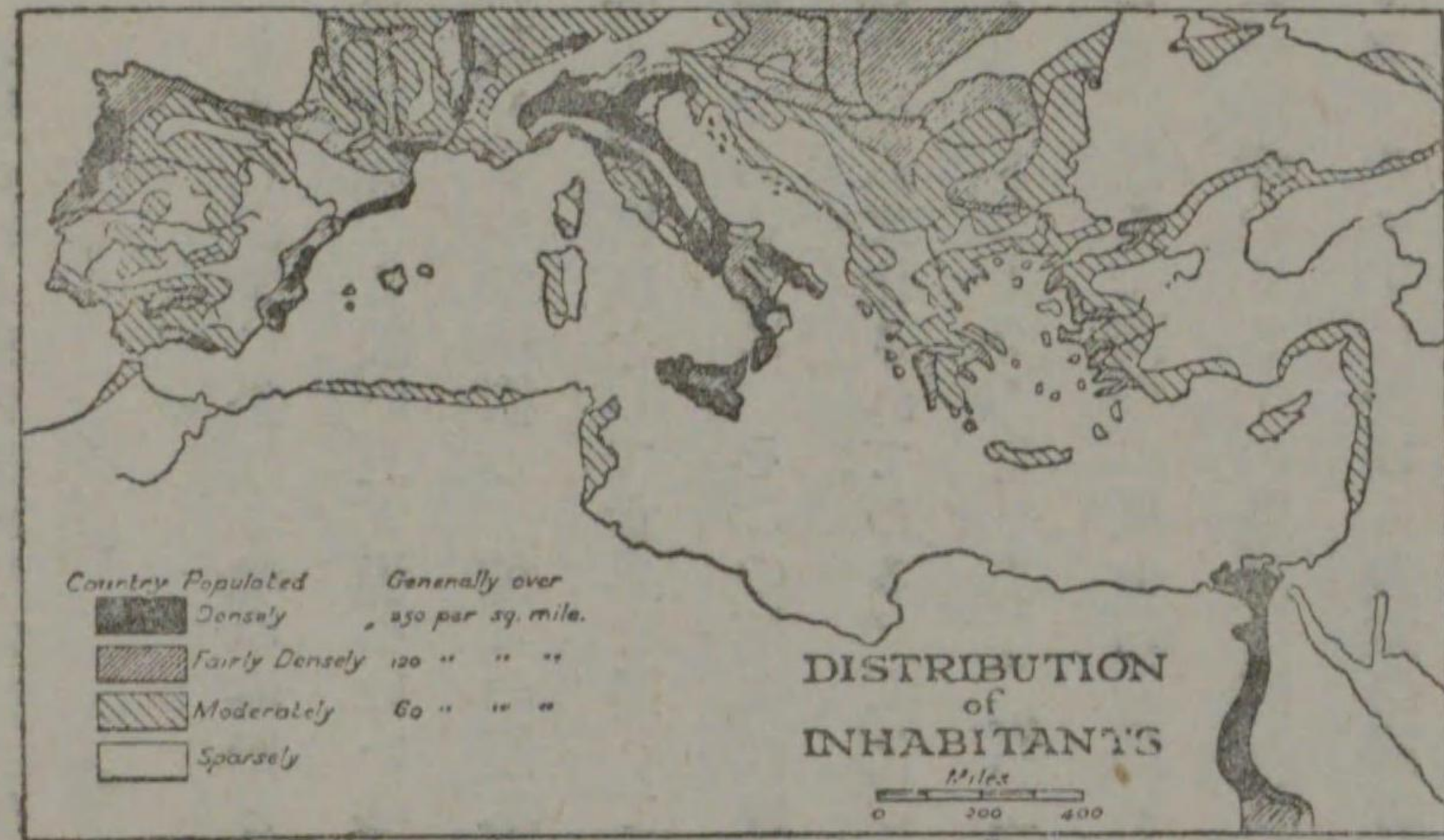
第五圖 南アメリカ洲の植物地帯圖

が古く、其の文化の程度高き國々に於ては、半自然的社會としての植物社會は一層變改されるから、人口の密度と其の文化の程度とは、夫々の居住地域の植物社會を區別立て、また支配する要因となるのである。

地球面上の植物社會を、自然的社會と半自然的社會とに分ちて、其の分布を見るに、自然的社會は、亞寒帶、亞熱帶、熱帶並に各帯の高山地の諸地域に多く、半自然的社會は、文化の古

い舊大陸としてのユーラシヤの大部とアフリカの北部に於ける温帯の諸地域に多く見られる。舊大陸に於ても近世の開拓によるアフリカ、オーストラリア二大陸と、南北アメリカの新大陸に於ては、自然的社會としての植物社會は、現在、比較的急速度に半自然的社會に變改されつゝある。かく植物社會の自然的並に半自然的社會と、居住民族の人口密度と文化度との相關關係は、直ちに夫々の居住地域の廣狹にも居住様式にもあらはれ、それが郷土社會の特質を生み出す要因となつてゐる。

舊、新兩大陸を通じて、亞寒帶の荒原とアフリカ、オーストラリア二大洲の沙漠地とは、共に其の土地的要因と氣候的要因とが、自然的社會としての植物社會の構成を貧弱ならしめてゐる廣大なる地域であつて、それが直ちに生物的的要因としての人類集團の活動を消極的ならしめ、ために其の植物社會



第六圖 地中海地域の人口密度

は自然的社會の形態を保持してゐる。またハーデーの分類から見れば、アフリカのギネア灣岸並にコンゴ流域と、南アメリカのアマゾン流域とは熱帶的特質としての植物社會の状態は、極めて類似してゐる。しかしこれを人口密度に徴するに、其の間に著しき差異あるのは、此の二大地域に於ける人類集團の活動が、夫々の植物社會を變化させ、又利用する上に差異があるからであつて、それが二大地域の居住地域の廣狹にも、著しい差異を來たしてをり、従つて夫々の地域社會としての文化度もまた異なるものがある。ヴィグル・ド・ラ・ブラーシュの左の言葉は、夫々の地域社會の實證的研究には歴史的研究の重要さを十分に示唆してゐる。

官廳の統計は、地理學者を満足させない。地球の人類居住が、如何に現代まで發展したかを明かにするには、其の居住地域を如何に利用してゐる



るかといふ事を究めなければならぬし、かくするには、種々の資料から之を説明しなければならない。

〔人文地理學原論〕「人口分布の不同と差異」

更らに温帯に於ける地中海岸と同型の植物地帯を比較するに、ヨーロッパ大陸の南部に於ける地中海地域に於ては、乾燥せる暖い夏と濕つばい冬とを有する其の風土的特質は、その植物社會を特色づけて、地厚な滑かな小さい葉を有つ常緑樹と、種々の灌木を有つ植物社會とを特相としてゐる。かくして、此の地域に於ける人類活動は、其の人口密度をして世界を通じての稠密地域の一たらしめてゐるばかりでなく、其の文化度は、所謂西洋文化の搖籃地である丈に、その植物社會は、橄欖、コルク、葡萄、無花果等の栽培によつて、其の半自然植物社會は最も高度に人文化されてゐる。文化の發達のふるいこの地中海地域は、居住地域としては、もう最高度に達してゐる。ヴィダル・ド・ラブラーシュが、之を人口分布上「からつばな地域」(vacant area)といつてゐるのは全く當を得てゐる。然るに同型の風土的特質を有つてゐる北アメリカの太平洋岸のカリフォルニア附近と、南アメリカの同じく太平洋岸のチリーの豊かな植物社會は、寧ろ人類集團の新たなる活動を要求するほどの處女的風土である。このカリフォルニアに於ける農業労働者の活動的な居住様式は、「からつばな地域」には見られぬ現象である。

## 二 土 壤

人類集團の生活環境としては、土地が直接重要な因子である丈、それへの考察は夙に行はれた。古代の地理學者として最も名高きストラボンは、「肥沃な土地の住民は幸福であり平和を愛する」と見、イギリスの文明史家バックルは、「アジアに於ては地味の豊饒が、ヨーロッパに於ては氣候の重要性が重きをなしてゐる」と説いた。フランスのモンテスキューは、地味の豊饒と君主政治の關係、地味の豊かな平野が防禦すべき自然的障壁がない爲めに外敵の侵入を容易にする事を説き、又土地を人類の環境として考察するのに、土壤が重要な觀點となつてゐるのは、彼の『萬法精理』の中にも述べられてあるが、それが「土地の性質」といふに止つて、何等精確な地質學的なまた地形學的概念を取り容れてゐない事は、當時の科學の程度が、それを許さなかつたからである。しかし近代科學の進歩によつて、土壤に就いての考察は著しく科學的になつた。「土壤の類型は、十九世紀の始に産業革命があらはれ始めたやうに、我等の上にはあらはれつゝある」とされ、從來土壤の分類が砂土とか壤土とか粘土とか、土壤夫自身の變異によつてなされた時代は去つて、氣候的基底に立つてのそれが試みられ、かゝる見地から土壤の分類が右の三つの類型に大別された。

### 一、氣候土壤帶と地域 (Climatic Soil Zones and Regions)

#### 一、地方土壤 (Local Soils)

#### 三、有機體によつて影響された土壤 (Soils influenced by Organisms)



有機體によつて影響された土壤こそ、實に人類社會の郷土であり、夫々の地域社會の立地する土地であり、こゝに「土地に於ける生物の作用」が考察される。即ち

「古代文明のあつた國々に於ける森林と森林土壤は、農業の目的に用ゐられた耕地及び牧場の面積に比べると、人類の影響を受けてゐる事は少ない。……中央ヨーロッパの森林に對しては、柵は土壤を改良するに最も重要な樹種であつて、其の下の土壤は肥え、爲に動物の生活には適する。しかしヨーロッパの北西海岸地帯に於ては、柵の純林の中に厚い泥炭層が出来てゐるので、自然更生が行はれない。……温帯氣候を考察すると、森林と草原地とは最も重要な植物構成であり、これらが耕作されて地球の表面の大部は、人類的干渉によつて特色附けられた。……中にも園藝土壤は耕作された土壤の中で最も進んだ類型である。」

郷土としての土壤は、農業の史的發達と結び付けて考察する事によつて、一層それが價值付けられる。例へば、「ふるく智的發達を遂げた地中海沿岸地域の一つの特性は、歴史時代を通じて雨量が少なくそして温度が高い風土が、そこに住つてゐる人達に、雨水を貯へまた土地を灌漑しまた川沿の低地の排水や開墾を必要としたのであつて、それが爲に機械への熟練と、設備と修繕に要する多大の勞力とが、そこに特殊な農業類型を生み出した」。また「歐洲のふるい國々や、イギリスや日本の事例は、ふるい土壤の能率とこれを利用する經驗であり、各々の土壤類型は確實な組織立つた實在であつて、是等の土壤類型に於けるあらゆる變異を理解し且つ利用する事」は、定住村落經

濟の重要な職能である。而して文明のふるい中心地に於ける住民が、如何に土壤類型に養はれたかの問題と、新しい土壤に對して新に移住した住民の行つた事から生み出された土壤構成の比較は、人類と其の所要の影響による土壤の生産力の持続性の活用を決定するが爲に、また人類が世界の食料供給を支持するに用ゐた方法を測定する爲に必要な事である。故に郷土としての土地の重要性は、夫々の自然的風土と人文的風土との變異による差異から、そこに著しい等級が生じて來るし、土地の農業的重要性を史的に考察して、「古代の諸帝國の滅亡した原因の一つが疑ひもなく土壤の消耗であり、人口の集積と沖積層の土壤との關係は、エジプト、支那、日本に見られるが如く、其の間に密接な關係がある」とする所説も首肯される。ホイットニーが、「土壤の類型は、十九世紀の初に、産業革命が現はれ始めたやうに我等の上に現はれつゝある」といつてゐるが、土壤の利用價值は、世界の農業地域に於ける人類集團の居住の新舊と、文化度との相關關係によつて分れるから、土壤と郷土、殊に村落社會との關係に於ける地理學的重要性を各地域に於ける山地・平野・海岸等に區別立て、考察するべきである。

### 三 地 域

土地に對しての考察が、科學の進歩につれて土壤への考察に轉向したと同じく、それが地域の考察にも向けられた。常に地球面上のあらゆる諸現象の分布を其の研究對象とする地理學は、始めはジオグラフィの語義それ自か



らが示すやうに、「僅かに土地の記載」に過ぎなかつたが、近代科學の進歩に刺戟されて、眞の地理學の概念は分布の科學的研究でなければならなくなつた。「合理的に地域を分つ方法」、「地理學者が先づ種々の現象の分布を別々に研究するのは、後に彼等の相互關係を明かにしようとするが爲めである」、「我が國に於ては、近年複合的渾一 (complex units) に就いての認識が、植物社會に於けると同じやうに、地理的研究にもまた自治の發達にも起つて來た」、「我が自然的地域と名づけ得る各地域の特色ある著しい各要素は何々であるか」、「大きな自然的地域に地球表面を分つ可能の認識は、それが地理學の研究にもまた教授にも有益であると自分は認むる。自分はそれを試むる」といつて、地質と氣候と植物と人口密度とを基準として、世界の自然的地域を分けたのは、イギリスの地域地理學を建設したハーバートソンである。彼が「自然的地域の認識は、人類社會の發達に對しての歴史家の研究に從來意識しなかつた地理的基礎を與へる」なる言葉は、地球表面を生活環境とする人類社會の考察には、史的考察が必要なるが如くに地理的考察も必要なる事を道破せるものである。これをかのリッターの言葉「無智蒙昧に止つてゐる諸民族も彼等の郷土の學を有つてゐる」と併せ考へる時、それは、我々の郷土たる地域社會が、各地域に依存する人類集團であることの認識に出發すべきを我々に示唆する。

ハーバートソンの此の自然的地域は、世界を六ツに大別し、更らにこれを數多の Sub-Region に分けた。

1. Polar. (a) Lowland (Tundra type); (b) Highlands (Ice-cap type).

2. The cool temperate regions. (a) Western Margin (West European type); (b) Eastern Margin (Quebec type); (c) Interior lowlands (Siberia type); (d) Interior mountain area (Altai type).
3. The warm temperate regions (a) The western margin with winter rains (Mediterranean type); (b) The eastern margin with summer rains (China type); (c) The interior lowlands (Turan type); (d) The plateau (Iran type).
4. (a) The west tropical deserts (Sahara type); (b) The east tropical lands (Monsoon type); (c) The inter-tropical tablelands (Sudan type).
5. Lofty tropical or Sub tropical mountains (Tibetan type).
6. Equatorial Lowlands (Amazon type).

是等の地域々は、夫々に於て一つの複合的統一をなしてゐるばかりでなく、夫々の地域社會の活動によつてそれが人類文化の展開に役立つてゆく。而して其の實證は、先づ複合的統一の單位としての特定地域に就いての認識が最も重要な基準となる。此の複合的統一の單位としての特定地域に就いての認識は、これを如何なる地域に就いて求むべきか。それには少なくとも二種の地域的研究が必要である。即ち其の一つは、我々が直接觀察し得るといふよりも、寧ろ我々が數多の書籍、地圖、其の他の敘述を求め得る大きなそして重要な地域であり、他の一つ



は、書籍、記録及び地圖等によつて觀察を補ひ得るにしても、主として直接觀察によつて、學ばれ得べき一つの小さな地域、即ち我等の親しみ深き郷土であつて、それが後述すべきリージョナル・サーヴェーによつて仕遂げらるべき地域である。

大きな地域の撰定は、研究すべき學徒の屬する民族または國家によつてそれが異なる。例へばヨーロッパの諸民族並に諸國家に取つては、地中海地域 (Mediterranean Region) は、其の標式的な大きな地域である。ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュは、これを『人文地理學原論』の一章としてをり、フィリップソンの地中海地域 (das Mittelmeergebiet) も亦重要な研究文獻に數へられる。一國家の領域の中にも數多の地域的區劃が認められ、ヨーロッパに於て、是等の地域的研究に就いては、近代の地理學の發達の先驅をなしてゐるドイツ・フランス二國は其の優であり、イギリスの地域的研究はフランスの地域的研究の影響を受けて發達したといはれてゐる。而してフランスの地域的研究の學風は、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュによつて建設され、それがドゥ・マルトンヌやドゥマンジオンによつて繼承され、今日多くの地誌が寄與されてゐる。此のフランス國家の領域内、於ける地域的特質は、パリイ・ベーズンとガロンヌ (ドルドーニュ)・ベーズンとロヌ (ソヌ)・ベーズンの三つの大きな低地と、それを分つ中央山地から成立つてゐる。其の間の交通は相當に行はれ、しかもそれがそれらの諸地域を均一に強ふる事なく、夫々の地域を共同團體たる觀念の強き意識に導いてゐる。のみならずフランス國家の地域的特質には、其の縁邊諸地域例へば南東

部のプロヴァンサル、南西部のバスク、西部のブレトン、北部のフレミッシュ、北東部のゲルマンなどは、夫々言語上、社會層上の特徴がある。又之に反して、フランスは國際的交通の中心に位置する個性に基いた「あけつばなし」の交際を有つてをり、殊にパリイ・ベーズンは、其の標式的地域であつて、パリイ・ベーズンの農夫の統一と一致共同と、河運と陸運の大きな集中的計畫とは、こゝに大都市の勃興を促し、またそれをして國內を統一する勢力たらしめた。「光の都」(Lumières) パリイの影響は全國を支配し、藝術、思想、政治に於ける國民の表現を集め、行政の中央集權をも可能にした。パリイ市立都市經濟地理歴史協會と並んで、十數年前に設置された市立高等都市研究學校の設置の理由と目的を見ても、フランス國民の郷土とも見るべき此の中心都市に對する郷土研究の科學的精神の發揮が實證されてゐる。パリイの如きは、其の地積から見れば小さな地域社會に過ぎないが、其の人口凝集からすれば、フランス國家に於ける一つの大きな地域的實在であり、ボエトは、己に大著『パリイ市の生活』(Une vie de cité Paris) に郷土パリイ研究の筆を染めてゐる。

以上の如き大きな地域に反し、リージョナル・サーヴェーともいふべき小地域の研究は、親しみ深い小郷土の研究である。此の研究の本領は、小さな地域々々の進化を究め、其の進化的連續關係を明かにし、以て明日の郷土社會の建設に資する事を直接の目的とするにある。しかし其の調査研究の視野は、我が村、我が町に局限されるにしても、それが大きな地域の一表現である事を認識しつゝ、しかも其の調査究研の思想的根據が、後述のリージョナ



ル・サーヴェーに立脚するを要する。今日我が國に行はれる郷土地理研究が、郷土なる呼稱に眩惑し、眼前の我が村、我が町の地理的特質のみに考察の眼を向ける事は、從來町村の地理的特質を明かにし得べき地域的研究のよき文獻少なきと、またこれを指導する思想的根據が明確にされてゐないからではあるが、今後の郷土地理研究には、郷土社會の建設に資することを目標とする必要がある。

大小の地域的研究の一つの基準として、特に注目すべきは、地域社會學の出現である。ムカージは、其の著『地域社會學』に於て、「社會型の地域的基底に就いて、近代の地理學的調査は、基礎的地表現象が特定地域の人類集團に於ける社會的並に經濟的構成の特殊型を刻印付ける。人種と地域との累積せる傳統は、社會的心理的要因が、進化の過程に於て、各種の文化地帯に於ける種々の方向の系列を生み出しつゝ、適應しまた相關する地域的地理學に適合する廣い社會的並に經濟的諸型に人類の生活を決定した」と説いてゐる。故に郷土地理の研究に於ても、其の地理的特質が、如何に郷土の社會構成と關聯あるかを究明すべき事を必要とする。これを人種と地域との關係に就いて、ハーバートソンが、「二つの異つた地域に於ける同じ人種の歴史を比較する事によつて、また同じ地域に於ける數多の人種の傳統の歴史を比較する事によつて、住民への環境の様式の不變的影響に就いての知識と、また人文的發達に於ける環境の否定的要素に就いての評價とを得る事が出来る」といつてゐる所説に徴しても、地域の考察に對する社會學と地理學との關聯の必要を思はしめる。

## 四 山 地

生活環境としての山地は、生活資料としての植物帯と生活條件としての氣候を決定する要因から見て、其の高度と傾斜度が最も重要な條件となる。なほ礦物・水力等の資源の地理的位置がこれを複雑化する。

之を農業に見るに、熱帯に於ける高山地帯は、生活環境としての垂直的限界を示す標式的地域である。アンデス山系の或る地域に於ては、七、〇〇〇呎以下の處でも、果樹栽培と葡萄栽培がなし得られるし、稍々上つても猶且馬鈴薯や大麥を作り得る處がある。山地に於ける人類居住の最高度は一七、一〇〇呎とされてをり、世界中最高度にある都市はボリビアのラパスで一二、一三九呎、西藏のラッサは之に次いで一一、八三〇呎である。インデアンが白人の堪へ得ない高山氣候にでも堪へ得るのは、風土馴化の結果であり、アマゾン流域の熱帯地域に於ける居住の高度は、住民の四分三が八、〇〇〇呎以上の處に居住してゐる。熱帯地方以外に於ては居住高度は遙かに低く、アルプス山中に於ける高度は、七、〇五五呎から六、九九六呎或は六、六六一呎の間にある。山國としての我が日本に於ける居住高度の研究は、居住地理研究の上にも重要な研究である。殊にアルバート・コラーの「アルプス地方に於ける人口減少の地理學的原因」は、筆者に少なからず其の研究の必要を示唆した。彼は山地の人口減少の客觀的諸原因として、



一、自然的現象の變化（氣候、山岳及び土地）二、經濟狀態の變化（鑛山業、農牧業、林業、工業、交通）三、生活費（生活基準）の變化 四、社會的關係の變化

を擧げてゐる。而して農牧業に關する節に、「最高の土地に住む人々に對しては、出来る丈の施設を講じて其の土地に止まるやうにしないでならぬ、何故かといふに一度居住地の高度が下ると、再び之を元に戻す事は極めて困難であるからである」といつてゐるが、我が國の山地居住の移動傾向は、夫々の地方に於て如何なる變異を示してゐるであらうか。信州の菅平高原の耕地は、現在は四、二六五呎を上限としてゐるが、それを四、九二一呎まで上したと信州の郷土地理研究家の故三澤氏が研究してゐた。

山地の資源は、農業以外には森林、鑛物、水力を主要とし、自然美も亦之に次ぐ資源の一たるを失はない。是等の諸資源の地理的位置は、夫々に依存する郷土の居住高度を左右すると共に、其の盛衰は直ちに郷土社會の盛衰に影響する事は、平野や海岸を生活環境とする郷土に於けるよりも甚しい。従つて夫々の資源への近代科學の應用は、また直ちに郷土社會の生活にも影響する。

### 五 平 野

平野が人類集團の生活環境として、最大最廣の地域である事は、地球面上の總人口の十分の九が、二、〇〇〇呎

以下に居住してゐる事からも推斷される。平野の類型は河成平野、海成平野、湖成平野等其の成因は種々あるとしても、人類の生活及び文化の基礎的根據である農業の可能地域としての價値は同質であり、村落に次いで都市が發達し、其の大衆人口は文化の錯綜を條件付け、また水陸交通の便宜は更らに之を促進した。平野に於ける人類集團の居住は、定住村落經濟の時代に入つてからで、殊に農業地域としての利用が其の要因となつてゐる。しかも其の利用の過程は、概ね山麓地帯から平野に及んだ事は、世界の村落居住の變遷が之を證明してゐる。例へばイギリスに於ては、クロイフォードの研究に依れば、イギリス海峡に注ぐアヴォンといふ小川に沿うてゐるサリスヴレー平野は、大部は白堊系の丘陵から成立つてをり、此の丘陵に於けるケルトの村落は、紀元前五百年に起り、千年後のサクソンの侵入まで續いてゐたが、農業を主としたサクソンの村落は、アヴォン河沿の沖積平野に占居してゐたのに反し、狩獵に據つて生活を支へたケルトの村落は丘陵に立地した。また我が國に於ても、信州南部の天龍川に沿うてゐる段丘、殊に左岸の所謂龍東段丘に於ける居住過程は、農業地域としての土地利用の過程を明かにしてゐる。即ち山麓から河岸までの段丘は、第一から第六までになつてゐるが、先史時代の遺物は第一段から第三段までに多く、また原始時代の古墳は、第四段から第五段にかけて分布してゐる。これによれば狩獵生活から農耕生活への推移は、各段丘に於ける村落立地の地理的關係によくあらはれてゐる。各段丘中、農業村落の最も發達してゐる地域は第四段と第五段の段丘であり、こゝに耕地としての土壤と灌漑水や飲料水としての用水の關係を見得るので



ある。此の段丘に於ける山麓地帯から平野への居住の推移は、これを全国的に類推し得るであらう。平野に於ける村落の發達、またそれが誘因となつての都市の發達は、洪水の氾濫地域までも、近代技術の力によつて、新しい生活環境を作り出してゐる事は、オランダ、日本其の他の干拓事業に徴して明かであり、それが特殊の居住型また地域社會を構成する。

廣い河口を有つてゐる河流は、海から陸への通路となるが爲に、河口附近に海港都市を形成し、また河岸に河港をも發達せしめてゐる。たゞ河運の方法の變遷は、之に伴うて河運によつて發達した港市の盛衰を支配し、殊に平野に於ける鐵道の開通は、一層河運とそれに依存した都市の運命を支配する。近代的交通機關の運輸方法は、工業の分散また集中を可能にし、大都市の膨脹は、附近都市の産業と交通、殊に人口移動に甚大な影響を及ぼす結果、平野の地域社會は、近代産業の洗禮を激しく受くる事は、山地の地域社會の比ではない。

人工河ともいふべき運河は、三角洲上の自然的分流が原始民族への運河構造を暗示に起つたらしいといはれるが多くの昔の運河は三角洲上にあつた。運河をつくつたカルデア人、エジプト人、東印度人、支那人などは、何れも夙に三角洲上に生活して、運河を輸送と灌漑の上に利用した。其の後多くの運河が河道に沿うて作られるに至つた事は、河運が困難になつた場合、河道に沿うてつくるのが便利だからである。あらゆる運河の目的が輸送であり、また灌漑であつたにしろ、人工河の開通に伴ふての居住地區の發生は、平野に於ける地域社會の一特相である。三

角洲上の處女地が、周圍の發達殊に航通によつて、開墾其の他に利用されると共に、ことに新しい地域社會を構成するが如き其の好例である。

## 六 海 岸

陸面と海面との接觸地帯である狹長な海岸は、陸面から海面に、また海面から陸面へのあらゆる浸透の行はれる地域である。殊に其の屈曲出入が多く、急峻な山地が背後に迫つてゐない限りに於ては、背後地たる廣き産業地域の實在ほど、其の浸透作用が活潑に行はれる。大陸としてのヨーロッパ、國としてのイギリス、日本の如き其の標式である。此の浸透作用、言葉を換へていへば、土地の經濟と海の經濟との轉移及び通過の關聯的結合は、各時代の港灣の進化にそれが如實に實現する。殊に近代技術を應用した港灣の設備は、爲に、防波と投錨が安全になり、こゝに港灣の機能は自然的港灣から人工的港灣に移動する。かくして地方的港灣が國家的港灣に、更らに國際的港灣に進化する。ロンドン、ニュー・ヨーク、上海の如き其の適例である。我が國の瀬戸内海地域の如きは、單に我が國に於けるばかりでなく、世界を通じての標式的な沿海地域である。徳川時代に於て發達した數多の地方的港灣の中には、明治時代に國家的港灣に、更らに國際的港灣に進展した兵庫―神戸港の如きがある。海面の經濟的資源に依存する漁業は、更らに沿海地域に漁村と漁港との發達を添加し、其の村落的また都市的特



質は、著しく他の村落並に都市と機能を異にする。殊に漁利の豊否は、農林業よりも、直接に自然的條件に支配せられるから、ムカージの所謂基礎的地表現象が、特定地域としての社會的並に經濟的構成の特殊型を濃厚ならしめる。故に漁村と漁港の地域的特質は、其の社會的並に經濟的構成の特相を育成する。

## 二 村落

### 一 概 説

日本の村落の特質を考察するに先ち、地球面上に現存する村落集團の生活形態を見るに、我々は産業發展の段階から、左の三段階に分けて考察する必要がある。

#### 一、採集經濟 二、農牧遊動經濟 三、定住村落經濟

今是等の三者に就いて、其の發達過程を見るに、例へば採集經濟に依つて生活してゐるエスキモーは、植物生態の中で最も自然的社會とされてゐるツンドラを其の生活環境とし、しかも其の風土は餘りに峻烈な氣候であるが爲に、其の生活資料は陸に於ては僅かに特殊なる動物馴鹿の牧養と、海に於ける漁獵とに限られてゐる。かくてエスキモーは生活環境としての烈しい風土の中に、全く「餘裕のない生存」(precarious existence)を續けてゆくのに汲々

たる状態であり、それが彼等の村落構成にも反映してゐる。即ちあらゆる生活資料に制限されてゐる彼等の村落集團は、一家が一村であるばかりでなく、昔からの居住地から殆んど動く事もなく、また其の住居も建て換へられもしない。夏季には其の生活資料を得るが爲に、一時移動することがあつても、冬季になると元の一つの家に歸つて共同生活を營んでゐる。ネーボアのいふやうに「いつも舊い居住地と古い建物から動かすに満足してゐるから、新しい建築物は必要でない」。かく一村が一家である其の家族構成は、一家に數家族(グリーンランドに於ては、四家族から十家族である)を抱擁してゐる。

採集經濟に次いで農牧遊動經濟の段階に屬する村落集團に於ては、動物を飼育しまた植物を栽培し始め、組織的にまた計画的に經濟を築き始めた。此の時代の村落構成の最小の團體は、父母と未婚の子女と既婚の男子と其の子女から成立つてゐた。しかし更に大きな團體は、是等の家族の五乃至十家族から成立つ宿營(カムプ)であり、數多のそれが集つて氏族なる血族團體を作り、更に數氏族が集つて一部族をなしてゐた。此の時代には、(一)植物か動物の一方又は二つながらを育成し、(二)彼方此方と移動し、(三)飼育と栽培をなしてゐる傍、採集的の作業をも營んでゐる。

農牧遊動經濟の段階から、定住村落經濟の段階に入るまでの推移の過程は極めて長い。一ヶ所に於ける居住が、季節から季節に續き年から年に繼續し、轉住が豫定の計畫でもなくまた年中行事でもなくなつた時、始めて定住し



たものであつた。此の時代の村落集團は、單なる集團たるに止まらずして、村落の中心が地表面の一部にはつきりと定住する事になつた。かゝる定住の過程には少なくとも一萬年を要したといはれてゐる。是等定住村落經濟に屬する村落構成の形態は、概ね集村であつて、それがイギリスやドイツに多く見出され、防禦に都合のよいやうに形造られてゐる。之に反して散村はフランスと西部ドイツに見られるが、是等は集村よりも防禦力が弱く、此の外長い列狀の街村は道路や海岸や森林や沼澤地などに沿うて發達してゐる。是等の村落形態の因由に就いては、或は人種的或は定住の特殊事情からとされてゐる。かく村落が定住してから、夫々の經濟條件をよりよくしようと試み、それから生ずる村落型式は、夫々の環境的條件に依存し、爲に祖先以來の遺風を變へるに至つたものであらうと環境に重きを置く説もある。なほグラスは定住村落經濟時代を、第一期の自由村落、第二期の從屬村落に分ちて、其の事例を世界に求め、歴史上の諸民族は、其の發達の初に於て、夙に第一期を経過してゐるが、今日の未開人の中には、なほ此の時期に屬するもの多しとなし、第二期のそれは、各國の場合を通じて、都市經濟の發達に先ちて、已に端緒を開いたものであらうとしてゐる。而して「村落民は村落に生れつゝいたものであり、村落そのものは働く工場であり、禮拜を行ふ教區であり、集つて遊樂する中央會場であり、證人若くは陪審人として立つ法廷でもあつた」と結んでゐる。

是等の村落が、立地上如何なる居住形態をなしてゐるか。これに就いて、地理學的考察は未だ歸納概括されてゐない。フランスのドゥマンジオンは、「村落居住の地理學」なる見解の下に、主として定住村落經濟に屬する村落居住を集村と散村に大別し、其の事例を蒐集し、これを分類しまた解釋を試み次の如く云つて居る。

「フランスを西から東へ横切つて、通つた人は、誰しもブルターニュの散村とローレインの集村との對象に氣づく。又大きな縮尺の地形圖を見れば、西ヨーロッパから極東に互つて存する國々に於て、同様の對象が存する。

此の對象の一般的存在は、地理學の大きな問題で、其の研究は廣く自然、社會、人口、農業等の狀態に及ばざなければならず、歴史、民族學等の知識をも必要とする。」

同氏に據れば、

集村の地方 主として地味のよい古い農業地帯で、大西洋から太平洋に至る間では、すべて舊く組織的な形をなしてゐる。

散村の地方 集村の地方では、住居と耕地とが各々分れて集つてゐるが、散村の地方では、住居が各地方の中に散在し、耕地と住居とが強く結び付けられて居る。

是等の形態を來した影響は、(一)自然狀態、(二)社會狀態、(三)農業經濟に分ちて考察すべきであるとし、

(一)自然狀態(地形、土地の性質、水利) (二)社會狀態(原始の傾向、民族の傳統、安全な條件) (三)農業經濟(人口の疎密、耕作法の程度)



を擧げてゐる。更らに同氏はヨーロッパ諸國の實例に就いて説明して、其の國際的協働を國際地理學會議に提出してゐる。

(註)

此の提出は、最初は一九二五年にカイロでなされ、一九二八年にはケムブリッジで、一九三一年にはパリで、また一九三四年にはワルソーで開かれた同會議で、何れも人文地理學部に於ける特別委員會で論議され、筆者も出席した。一九三八年オランダの阿姆斯特ダムの同會議で體系付けられる事になつてゐる。(後章「國際地理學會議と村落人口の研究」参照)

以上述べたやうに、各民族並に各國家の村落立地の地理學的特質の解釋は、其の資料の蒐集が漸く緒に就いたに過ぎない今日、之を歸納し綜合するに至らない。たゞ是等の研究方法から推して、村落の研究殊に其の地理學的研  
究には、其の形態の研究と共に、其の因由する理由の史的研殊に社會經濟史的研究が必要とされてゐる事が明かにされた。こゝに日本の若き地理學徒の反省が必要である。(参照「村落居住と人口との關係の一考察」参照)

二 日 本

日本國家の領域内に於ける村落の類型を、農業生産の上から見れば、其の一部には採集經濟の段階に屬してゐるものもあるけれども、其の大部は定住村落經濟に依存してゐる。定住村落經濟に依存してゐるもの、中にも、これを民族的に考察すれば、臺灣、朝鮮にも及ばなければならない。しかしこゝには舊日本の村落に就いての地域的性質を、其の發達と地理的位置から考察しようと思ふ。

發 達

我々の祖先が、郷土を「サト(里)」といった原義は、サ(幸)ト(所)であり、またムラ(邑、村)の原義は、メ、ムレ(群)である事から推して、上代に於て、已に定住村落經濟を營んでゐた。其の位置は特に灌漑の便よく水田に適した丘陵の端に占居し、氏神は村落の近傍で靜かな林野に立てられ、村落の組織は主として同族又は同一部民から構成された。しかし奈良朝以前の戸籍の紙片などに、一つの里に異つた姓の家が共棲して居た例が少なくないのは、村落團は決して一族團でなかつた事を示してをり、村開發の初期には共同して働く必要があつたからである。かくして發達した日本の村落は、其の成因條件からして、左の如く分たれる。

- 一、莊園以前の班田百姓村
- 二、名田百姓村
- 三、門前百姓村
- 四、根小屋百姓村
- 五、草分百姓村(隱田百姓村)
- 六、新田百姓村

是等の村落の位置は、概ね主食物たる米を栽培し得る水田經營の可能地區であつた。特に古い村落が水田可能地區を選んだ事は「和名抄」の郷名が現存してゐる村落が、生駒山塊の東斜面の小さい扇狀地などに跡付けられる事で立證される。扇狀地が古い村落の居住地區であつた事は、なほ多くの例證を擧げる事が出来るが、讀者の郷土に於てもそれが實證されるであらう。また徳川時代に於ける新田開發は、更らに沿海の低濕地を干拓し、または林野を開墾した事は、何々新田の名稱によつてそれが跡付けられるばかりでなく、地割を始め、村組織にさへ其の特色



が残つてゐる。

### 位 置

村落の地理的位置が、水田經營の可能地區を條件として、如何なる位置に占居したか、其の類型的なものとして我々は扇狀地、段丘、丘陵、河成平野、沿海平野、裾野の六つの地區を挙げ得る。

今左に、六つの類型地區に屬する三、四の事例を挙げれば、

**扇狀地** 信州諏訪盆地の横川扇狀地に生立つた平野村字今井は、昔は其の西方の山地に牧畜を生活の主業とした村落から分化した所で、分化して間もない生業として、半牧半農の生活を營んでゐた當時は、今よりも更らに西南方の山麓に近い塚間川に沿うて位置してゐた。それは古い地名によつて證據立てられる。即ち元今井を流れる塚間川は、水源地の樹木の伐採や開墾に伴ふ新田が増加した爲に、今は水量が少なくなつたが、昔は水量が豊かであつたので、それが元今井を居住の好適地とした主要原因であつた（今井夏夫氏）。また越前の大野盆地の南東部山麓の木ノ本扇狀地は、斷層崖下に位置し、上段扇狀地は封建時代の軍事的意義から、木ノ本部落の發生を見たが、地質が粗で且つ厚いので、部落の下位に作られた穿井が水が少ないから、中世以前の文化度では、其の利用が不可能であつた。従つて地上水を利用しての居住地區は、寶慶寺川沿から發生した。しかも氾濫性の此の川の特質は、部落のはじめの發生地區をより高い處に位置させた事は、上段扇狀地に於ける春日城址の北東邊に式内社があり、また其

の西方に古寺のある事でも明かである。しかし時代の過程につれての人口増殖は、上下扇狀地を利用するに至らしめ、爲に灌漑と飲料とに用ゐる用水路が、傾斜と浸透と距離とに順應しつゝ人爲的に網狀に作られ、そこに主要道路と作場道とが、からみ合ふやうになつてゐる。かく扇狀地の地形と土壤と水源と道路網とが調和されての土地利用は、はつきりと地價の地理的分布にもあらはれてゐるし、中にも水の浸透し易い砂礫質の耕土は、概して利用價値が少ないから、それが生活様式なり、利用轉換（牧草原、薪炭林、桑園）なりにあらはれてゐる。なほ過剰な人口は、部落内では分家としての小作、部落外への一時の出稼や移民となつた（吉田森氏）。

**臺地** 洪積層臺地と沖積層平野との接觸面は、また水田經營に好適な生活環境である。例へば常陸の行方丘陵の縁邊殊に霞ヶ浦に臨んでゐる西縁は、先史時代からの遺蹟があるばかりでなく、有史時代に入つても、常陸に於ける文化の中心であつた。試に『常陸風土記』所載の地名を跡付けて見ると、當時の村落の位置は、支溪に近い臺地の上か下に立地してゐるものが多い所から推すと、當時は臺地の森林を伐採しては畑を開墾し、支溪の谷底の濕地は水田に利用したのであらう。しかも谷底から霞ヶ浦沿に於ける水田可能地域の開墾が増大するにつれて、水田地域の中に、新なる村落居住地區を見出し、臺地の上の古き村落は、漸次谷底に移動した形跡を残してゐる。また地體構造の關係上、傾斜度の緩かな谿谷を狹長に開折してゐる武藏野臺地の縁邊は、其の土地利用状態の時代的變遷も少ない丈に、村落居住の移動性も亦少ない。即ち狹長な谿谷に於ける水田可能地域は、霞ヶ浦沿に於けるが如



く増大しないから、村落居住の中心點からの耕地への距離が變らなかつたから、従つて其の中心點の移動を必要としなかつたであらう。しかも武藏野臺地の中心の新田開墾は、反つて村落居住の分派に縁邊から中心への移動を促した事は、地形圖に現はれてゐる地割かとも知られる。

裾野 火山國としての我が國の裾野地域が相當に廣大であるばかりでなく、それが多濕多雨の氣候によつて、地下水の湧出地點を多からしめ、これが灌漑用水となつての水田可能地區を展開してゐる事が裾野の村落居住地區を廣からしめてゐる。例へば信州の八ヶ岳の裾野に於ては、熔岩下の泉が實に豊富に且つ各所から湧出して居り、それが用水として、此の地域の各方面に利用されてゐる。しかしそれが湧泉であるが爲に、夏季に於て、直ちにそれを水田に灌漑する事は出来ないが、其の代り此の地方では、其の湧水地點附近の緩傾斜で且つ卑濕の地區一帯は刈草地となつて居り、一度此の刈草地を潤した水が水田へと導かれ、極めて巧妙な土地利用の現象が描き出されてゐる。此の地域に於ける人工汐は、既に寛永年間に其の一部に行はれてをたが、最も大規模に開墾されたのはそれより約百五十年後に行はれた瀧の湯汐である。此の汐によつて灌漑されてゐる此の地域の水田面積は、全面積約五百四十餘町歩に對し、約四百二十餘町歩を占めてゐる（三澤勝衛氏）

沿海平野 大きな地域ほど、水田の可能地域も廣くまた灌漑も豊かではあるが、低濕過ぐる爲に排水と流水の氾濫に多大の努力を要する所もある。かゝる低濕な沿海平野の中で、最も早い居住地區は、比較的高くまた良質の飲

料水が得られる所で、それは、金町村大字柴又帝釋天境内の湧水で立證された。此の「柴又は、奈良朝時代から平安朝の初にかけて發生した村落で、正倉院文書（養老五年）の下總國葛飾郡大島郷である」同文書にある島俣里は今の柴又で、柴又と書くやうになつたのは元祿前後で、それ以前は島俣と書かれたと（蘆田伊人氏）。

沿海平野に開かれた新田は、江戸時代に人口が増殖した結果、それに伴つて起り、低濕な河の近邊、或は河の中の寄洲、或は海岸の埋立、或は沼であつた處を干して水田にする。又（従來原野であつた所に、灌漑の方法を講じて田地を開く等、色々な場合もある）此の新田の開発は屢々大仕掛の企業であつた。是等の新田で普通であつたのは、領主の直營若くは資本家が、其の特許を受けて、附近の各方面から烏合の衆を集め、個人の設計に基いた村を作る事であつた。近地交換交易が次第に起り、市場の組織が充備してからは、愈々以て一定の企畫の下に、昔ならば到底發生しなかつたやうな村が作られた。例へば自給農業の全然不可能なる新田、即ち田地ばかりで、野も林もない海邊の埋立新田の如く、果實蔬菜を始め炭を買はなければならぬ村、牛も馬も飼ふ事の出來ぬ村が現はれた。自然に任せてあつたら、日本人はとも其の様な村を作る事は望まれなかつた。例へば南葛飾郡の沿海平野は、當時幕府の直轄地であつたから、代官、勘定役、普請役等が見立て、開墾させた見立新田、村民が共同して開墾した村受新田、商人が豊かな財力で開墾した町人請負新田が各地に起つた。これは正保、元祿、文化の年度別の三圖を比較すれば、三圖に於ける新田の地名の所在によつて其の過程が明かになる。



(註) 沿海平野の低濕地域での新田開發は、近年干拓なる術語で呼ばれてゐる。此の新しい術語は、大正三年頃から農林省で用ゐられた。此の干拓が日本海岸より太平洋岸に多く行はれたのは、海岸の特質上、太平洋岸が隆起するからであらう。干拓の多く行はれた所は、福岡、茨城、静岡、愛知、岡山、熊本の諸縣である。熊本縣の八代海岸の如きは、加藤清正時代から組織的に行はれ、それが約百年を一期として進められてゐる事は、新田開發の過程に跡付けられ得る。近年着手されたのは、郡築村の北方に計畫されたもので、其の整然たる地割と計畫的な村の集團形態は、中心としての二十戸を最多とし、處々に點在してゐる。(板井申生氏)

## 三 都市

## 一 概 説

日本の都市を考察するに先ち、我々は世界の都市經濟の發展段階としての一、都市經濟 二、大都市經濟の二段階に就いて概説する必要がある。

都市は村落から發達し、附近の村落を經濟的に支配する事が其の特徴であつた。村落は商業の點では互に對等であつた。故に村落から分化した都市の發生は、市場のある村落に商人階級があらはれ、そこに店舗を持ち、それを以て市場を補ひ、又やがてそれをして市場の競争者たらしめた時に、始めて經濟都市が生れる。即ち村落は都市と

なり、村落經濟は都市經濟と變じたのである。故に都市の發生は村落の分化である。これの地理學的考察に就いてブルューンは、

「都市と村落とを判別するのは、正當のやうに思はれるが、何處に其の區別の原理並に特徴を求めたらよいであらうか。統計學者は少なくとも人口二千の住民が集合してゐるのを都市的人口と見做してゐる。しかし二千の住民の集合地でも村落に過ぎない所がある。之に反して數百名の住民の集合地でも小都市の風姿を保持してゐる所がある。……民家が抱合した所には、少なくとも都市としての萌芽があると認めることはよい。……都市と村落との間には、極簡単な區劃をする原理を發見する事に努むるよりも、地理學的事實に即して都市の種々様々な類型を考究する事にある。都市と村落の境界を定めるよりも、等級付ける事が問題である。」

といつてゐる。かゝる都市が廣い村落地域を通じて、いかなる地點に發生するかに就いては、我々はムーロー博士の説に聞かう。

「歐洲の都市的集團の検討に先つて、我々は一般的に都市的集團の形成に於ける地理的關係を注意して見たい。都市の位置は、事實に於て、純粹な偶然的出來事や有名な建設者の自由意志によつて決定されるものではない。其の位置は自然のものに従ふ。住民の未だ存在しない地域の地圖を研究する者は、其の地域が一定の人口密度に到達する時に、都市の位置すべき所を豫め決定する事が出来るであらう。人間を集中せしむるに最も與つて力



あるものは、交通を容易ならしむる海とか、河流の利用とか、平野地域と山嶽地域との出會つてゐる所とか、種々の地質的形成の出會つてゐる所などの自然的影響であらねばならない。」〔近世歐洲の都市的集團〕

ブルユーンとムーローの所説を通じて、我々は、村落地域の中に發生した都市の萌芽は、村落の自給自給經濟の必然的要求から發生した商業の展開を意味し、従つてそれは四圍の村落地域よりする交通上便利な地理的位置に立地する。かゝる關係は今日猶多數に定期市の現存する朝鮮に多くの實例を見る。即ち朝鮮の村落地域の交通の中心に位する所には、市は一六、二七、三八、四九、五〇の定日(陰曆)に五日おきに開かれる。それらの多くは村落の主要道路の一定地區に於て營まれ、また或る村落では道路に沿うてゐる一定の地區によつて營まれる。しかし定日以外にはそこには何等の商業的行爲の繼續がない。たゞ稍々進化した商業的中心地としての村落に於てのみ、二、三の常設店舗を見る。是等は經濟都市の萌芽であり、村落は都市となり、村落經濟が都市經濟と變ずる段階である。

(註) 福田博士は「經濟單位發展史研究」の中に、「韓國の經濟組織は何を以て名づくべきや。吾人慣用の意味に於て、國民經濟の域を去る事遠きは論を俟たず。都市經濟若くは領域經濟を以て目するも亦中らず。何となれば交通經濟の發達未だ低度であり、全國を通じて貨幣經濟の普及を見る事なければなり。殘る處即ち自給經濟村落經濟あるのみ。……直截なる言語を以て云へば、韓國には商人存せざるなり。唯だ定期に各所輪番に開かるゝ市と、此市に出入する行商(多くは負糧商)と、之が對手たる生産者又は消費者あるのみ。」〔經濟學研究〕

かく都市經濟の核心は商業であるから、其の商業圏の廣狹は、直ちに其の中心たる都市經濟の大小を條件附ける。

即ち一都市を中心としての商業地域は、一つの經濟細胞であり、都市は其の核である。かく都市經濟は多數の村落と一つの都市とを組織化して、そこに一つの經濟單位を形成する。地域的都市なる言葉は、かゝる經濟單位に於ける都市を呼びなすものであり、都市を一地域の結節點(nodal point)となすのもまた同じ意義であつて、都市の背後には之を支持する村落地域がある。

かくして發達した都市經濟は、人類文化發達の一段階であつて、年代上の一時期ではない。故に年代の區分は都市進化を研究する見地からしななければならない、かく時間的並に空間的に進化した此の都市有機體の濫觴は、已にエジプト、カルデア、アッシリア、メディア等に端を發し、ギリシア、フィニキア、ローマ等の諸時代を経て、中世の初には封鎖經濟時代の都市が現はれた。次いで十一世紀から十四世紀までの間には眞の都市經濟時代の都市が構成されたが、此の時代の都市は、前期の商業都市に比ぶれば、後期の商工都市である。都市經濟時代の都市は、到る處に於て相類似した機能を行つたとはいへ、すべての時期を通じて、否如何なる一時期に於てさへも、同じ型に依つてはゐなかつた。風土の相異とか文明の新舊とか、都市の位置とかさういふ事が一々影響を與へた。しかもいづれの都市も一樣に、最初は本格的に商業都市であり、後商業を擴張すると同時に、工業活動を取入れたものであつた。即ち都市を特徴づける商工業資料、都市の個性、都市と其の郊外、市町村權力の發生、智的藝術的飛躍、資本主義の勃興、都市移住の起源等の諸現象が現出し、都市の外形も爲に複雑化し、一定の設計に基いて建設された新



しい都市も起つて來た。十五世紀以後の都市は、國民經濟時代の都市であり、形成せられつゝある國民に對する都市の適應である。此の時代には地理的また商業的視野が擴大し、製造工業が起り、資本主義が進歩し、各都市が差別化し發展し、首都としての都市の外に大商業都市が起つた。ルネッサンスの影響は、都市藝術のギリシア、ローマへの復歸ともなつた。十六世紀には都市の防備と發展整備の計畫が現はれ、十七世紀に於ては交通手段が發展した。公共散歩道、都市路線に應用された田園住宅と佛國式の庭園術など、パリと近郊都市を始め、イタリア、ドイツ、オランダの諸都市に見られ、正規の計畫による新都市が起つた。十八世紀の後半は、大工業と企業集中の時代であるから、都市の構成と機能にもそれが反映した。科學の進歩と共に、其の應用が行はれ、殊に大工業の勃興による社會の進化、運輸交通手段の革命、之に伴ふ都市の過度の増大等、殆ど前代に見難い都市の發展を來した。大都市地域に關聯して起る人口移動の二重の方向即ち其の求心力と其の遠心力の如きは、大都市經濟の特質であつて、前時代の都市經濟に見難い現象である。かゝる大きな都市、卓越した都市は、次第に發達して經濟的大都市となつたもので、外面的には大都市と都市との相異は、主として大きさの問題である。

都市經濟が都市を核心として有つやうに、大都市經濟は更らに其の核心に母市を有つ一組織體として考へる事が出来る。都市經濟の普及した時代に村落が存続したやうに、大都市經濟が出現しても都市は存続する。けれどもそれは大都市に對する經濟的從屬状態に於てである。かゝる大都市經濟は、市場の全般的組織が確立され、また種々

の工業が起り、運輸業も改善された。金融機關もまた整ふに至つたのである。而してロンドンは、此の大都市經濟のあらゆる發達階段を通過した都市として最初のものであつた。此のロンドンは都市時代には、人口五萬を出た事は一度もなかつた。それも多數の官吏と其の奴婢を含んでゐた。然るにロンドンが漸次大都市となるに従ひ、其の人口は一世紀間（一五〇〇年—一六〇〇年）に二十萬を突破し、一七〇〇年には五十萬を超えた。即ち都市時代のロンドンの人口は、イングランド總人口の約百分の二だつたが、一七〇〇年には約一割、二十世紀には約二割を示すやうになつた。

大都市が、地理的位置の優越である事は、常識からも首肯れるが、ラッツェルは「大都市の地理的位置」に就いて、またこれを實證して、左の如くいつてゐる。

「海に近い國々が、比較的よく自然の條件に恵まれてゐる事、特に良好な氣候に恵まれてゐる事、數世紀の間、海外商業また海岸交通が、偏重または優越を維持して來た事、及びこれと相提携して海外移住が盛んに行はれた事、そして都市の分布の上に此の状態が惹起した結果は、アジア、アフリカ、南アメリカ及びオーストリアのあらゆる大都市が、是等の大陸の縁にあるといふ事である。大陸の内部の唯一の數百萬都市シカゴさへ、實は大なる海外交通地方の外縁に横はつてゐるのである。」

世界の大都市中二百萬以上の人口凝集を有するものは、ニューヨーク、東京、ロンドン、ベルリン、モスコ、



シカゴ、大阪、パリ、レニングラード、上海、ベノス・アイレスの十一である。此の如き大都市人口の凝集は、其の經濟上の意義が重要であるばかりでなく、其の社會上また保健衛生上の利害は、直ちに夫々の都市民または全國家に及ぼす大きな問題であるから、都市生活をより幸福ならしめる爲に、其の物的環境の發達に統制を加へ、之を合理的に導かんとする都市計畫の必要が起つて來る。パリ市立高等都市研究學校創設の理由に、「都市問題の科學的研究は、目下の緊急問題の一なり」とし、「大都市人口をして其の生存状態を不斷に改善せしめんと欲するならば、パリーの凝集人口を代表する人々——本問題の合理的解決に最も直接の利害關係を有する人々——は、進んで誠意を以て相協力し、區々の見解を統一し、都市問題の研究と其の實現に關する運動を起し、以て此の運動を全フランスに普及せしむる事が肝要である」から、其の「目的を達成する手段として此の教育機關を設置した」とある。

其の研究の目的は、「都市の整備、外装、發展並に其の行政上、經濟上、社會上の組織等、都市に關係する一切の事項を包含し、都市の諸機關は、其の經濟的、社會的機能によつて決定せらるゝ一つの「共同體」として取扱はんとする」にある。即ち

- 一、都市科學の樹立
- 二、此の科學より日常生活に於て認めらるゝ應用の數々の探究
- 三、人類の生存に對する都市科學の恩惠を一般民衆に普及する事

を目標とする。之を達成する爲に設置されてゐる四つの基礎は、

- 一、都市の進化
  - 二、都市の社會組織
  - 三、都市の行政
  - 四、都市の藝術
- であつて、今日の都市計畫に關するものは 二、三、四の中に包含されてゐる。

此の如く都市計畫は、都市夫々の現前の居住環境に基いてそれが意圖され、而もそれが新なる居住環境を現出するにあるから、郷土としての都市社會、即ち地域社會としての都市の地理學的研究には、かゝる考察を取入れる必要がある。イギリスの都市計畫に地理學者が参加し、また都市計畫學者が地理學的教養を怠らないのは、此の間の消息を物語つてゐる。例へばリヴァプール大學のロクスベは、地理學者であり、同教授を中心としての地域調査會は、デーサイド、ストラトフォード、ダブリン、コルク等の諸都市に關する研究報告を出してをり、リヴァプール附近の『ウイラル半島』は、同調査會關係のヘウィットの調査研究である。また後述すべきパトリック・ゲッデスは、イギリスの都市計畫學者として世界的聲名を有つてゐるが、其の著『都市に於ける進化』の中には、

「都市計畫は、其の基礎調査として先づ地理學的方法に依らなければならぬ」と説き、長く同氏の祕書であつたデフリースは、彼が近代地理學の發達に寄與した業績をたゞへて、

「彼の調査は其の本質に於て、鍛へられた地理學者よりも遙かに優つてゐる」。

といつてゐる。筆者は已に序説の「地域」に於て、地域の考察に社會學と地理學との協働的研究の必要な事を述べ



たが、社會現象の複雑な都市社會に就ては特に然りである。

(註) 都市に夫々個性があるやうに、各國の都市の計畫にも、々特色がある。フランスは、近代に於て最も早く大規模な都市計畫に着手し、其の計畫は主として都市の美觀に重きを置いてゐる傾向がある。ドイツの都市計畫は、之に比すれば實用的であり、また科學的研究が遂げられてゐる。東京や横濱の復興計畫は、世界の土地區劃整理の模範だといはれるフランクフルト・アム・マイン市に負ふ所が多い。これはドイツ人の研究的な所にも因るであらうが、古い歴史の都市が多く、それに産業的發達が急激であつたので、理論的に解決しなければならなかつたからである。従つて其の特徴は、飽くまでも經濟的發達を主とした處にある。イギリスの都市計畫は、衛生と快適とに主力を注いでゐる。殊に不良住宅の改造等には、便宜と援助とを與へてゐる。故に田園都市運動が此の國に起つたのも當然である。合衆國の都市計畫は遅く、シカゴが最も大規模に行つてゐる。一體合衆國のそれは實用的である。(弓家氏「都市計畫の話」雜誌「都市問題」)

## 二 日 本

村落に於けると同じく都市に於ても舊日本のそれを研究の對象とする。

## 發 達

日本の都市の發達の一般的原因は、世界に於けるその如く、村落地域に於ける商業的地區の發生に起因してゐる事は、其の語源に徴しても明かである。即ち「マチ(町)なる語義は、ミチ(道)と同原同義であつて、巷、街

の意に用ゐられたし、それが轉じて、イチ(市)と同じく、人の集合する所をもよぶやうになつた。「マチといふものは、區劃の事で、村の一部に宅地に區劃された處を意味し、それが一つの郷の商業交通の中心であつた」と解される。『和名抄』に「店家云町」とあるから、商店のある所を町といつたもので、町が村落地域の中から其の商業的中心として分化した事は、例へば九州の筑後川の左岸平野の安武村の中には、現に安武本村と安武町とがあり西牟田村の中には、西牟田本村と西牟田町とが事實によつても立證される。

(註) 村落地域の商業的中心地區としての市のあつた事は、多くの地名にそれが残つてゐる。大和の高市、十市、海石榴市、また大市、三田市、四日市、七日市、十日市など。是等の市の位置は、四方から集合する爲に交通の便利な、また成るべく多數の人達の集合し得る地點が、其の成立の必要條件であつた。だから是等の條件の推移は、市の移動即ち一定地域内の商業的中心的都市の移動をも可能にした。筆者の逢着した二、三の事例を述べれば、武藏野臺地の西縁と秩父山塊の東麓との接觸線に位置し、今日附近の商業的中心地として發達してゐる飯能町には、近年迄月に六回の日限市が立つてゐた。其の市は、もと此の町から東北に當つて十數町はなれてゐる中山部落から移動したもので、中山部落の道路幅は、部落としては似合はないほど廣く市場が昔開かれた姿を止めてゐる。また朝鮮の村落地域に於ては、現在日限市の開かれてゐる部落よりは、もと山麓に近い今日では四方からの交通に比較的不便な部落に、場基なる地名があるので、それを古老に質したら、以前に市場のあつた處であると。

交通の不便であつた時代に、一つの村落地域の商業的中心地區としての市が、交通の發達と民衆の集合の條件と



が推移するに伴れて、市の商業圏も亦移動し、また從來一つの村落地域の中心だつたそれが、交通の開通と共に更に數多の村落地域の中心となるまでに商業圏が擴大するか、從來の商業圏内の人口が増殖するかによつて、商業の常設を可能にし、爲に定期の商業が漸次常設のそれに進化し、こゝに都市經濟を確立する萌芽を見るに至つた事を證據立ててゐる。殊に莊園制度の發達と共に、各地方に於ける豪族の割據は、益々かゝる都市の萌芽の發生を培ふに至つた。

陸路の整つてゐなかつた上代に於ては、水路の航通が相當に利用されたので、其の舟附の地區即ちツは、交通の要點として、人々の集合、居住また商業の發生をも可能にした。此のツは、神武紀に已に白肩の津、草香津、熊野荒坂津などが見られ、殊に難波の津は、最も良港であつたので、御津とも大津ともよばれ、それがまた重要でもあつたので、此の附近の地域をツの國といひ、奈良朝には攝津職さへ置かれた。これはミナト即ち水之門に於ける都市的發生の適例で、近江の大津、筑紫の娜津<sup>ナツ</sup>、越前の敦賀津なども、これに次いで發生した。かゝる津の外、河岸での舟附の地區は、特に川津とよばれた。即ち常陸の水戸は、那珂川の河口に近く、海からこゝまで溯航し得た航路の終點であつたからよばれた水之門であり、其の對岸のカハチは今は河内とかくが、所謂川津の轉訛であらうといはれてゐる。

陸路としての東海 東山 山陽 山陰 北陸 南海 西海の七道は、平安朝までの間に完成され、其の他橋梁港

灣も修理されたから、道路に沿うて新に都市的發生をも見るに至つた。殊に、平安朝に於て開かれた驛路、即ち中央政府から太宰府への大路、陸奥や東海道に達すべき中路、或は各國々府に達すべき驛路の開通によつて、驛の數が四百一に達したといへば、此の驛の設置は、また都市的發生を促した。

上代から奈良朝、平安朝にかけて、我が國民の信仰の對象となつた社寺を中心としての群集と交通が、門前町の發生を可能にした事も亦都市發生の一過程ではある。

我が國家統一の核心たる大宮所は、以上の諸都市と異つに發生過程である。勿論神武天皇の橿原の宮から奈良の奠都までの歴代の皇居の中で、飛鳥宮の外は、概ね一代一處であつたから、何れも統治期に伴ふ一時的聚落に過ぎなかつた。たゞ其の中で孝徳天皇の難波京には、幾分都市的計畫が試みられようとしたに過ぎない。然るに奈良の平城京の都市的計畫と、之に續いての平安京の都市的計畫は、それが支那の都城の模倣であるとはいへ、確かに統一國家の首都としての都市的構成であり、また都市經濟の確立でもあつた。即ち其の規模は宮城區域を始め、社地寺地、邸宅地等、一切計畫の下に意圖され、従つて市場の如きも、東西の兩市に分設され、開市の時間、市場の陳列方法までも計畫的に行はれた。此の國家的中心としての都市に次いで、國府は地方行政の中心地としての都市經濟の機構 あつた。しかし地方行政の中心としての是等の地方的都市の都市經濟の機能は、莊園が各地に割據し、また地方的商業中心地區が、各地に發生して、何れも都市經濟が分散してゐた實情から推して、後代の封建時代に



於ける城下町のそれに比すべくもなかつたであらう。

中世に入つて、日本の都市經濟に劃期的進展を來たしたのは、封建制度の成立に伴ふ武士階級の發生による軍事的並に政治的機能を主體とした都市の出現であつた。此の種の都市型は、先づ鎌倉と小田原に其の標式的體様を示し、殊に小田原の如きは、武人や町人は、西國や北國から集つて、都市經濟としての商業的機能は頗る活潑であつた。次いで各地方に於ける群雄の割據は、鎌倉時代から室町時代に封建的都市經濟の地方的分散を可能にした。而して是等の武士階級の社寺に對しての信仰は、其の城下町を更らに門前町との合體に複雑化した。(鳥羽正雄氏)

(註) 武士の城郭を中心とする一團(城郭及び城下町)と寺院を中心とする一團(寺院と門前町)との合體は、何時如何様に出来たか。これは近世日本の都市成生發達の諸原因中の宗教的要素を見る上に、最も注意すべき問題である。戰國時代に於て、武人の實力が加はるにつれて、其の居住地附近に寺院の建立せらるゝものが愈々増加し、これが城下町と門前町との合體を來した。例へば小田原の寺院數は、鎌倉時代及び其の以前のものが九、南北朝室町初期即ち北條占據以前のものが四、北條勃興時代(明應―天文)のものが七、北條全盛時代(天文―天正)のものが二六、江戸時代のものが一九である。

以上述べた軍事的並に政治的機能を主體として發生した封建的都市の外に、工業(瀬戸)、鑛業(相川)等、特殊な産業の發達に伴ひ、また海路(兵庫、浦戸、坊の津)の航通によつて特殊な都市經濟の展開を見た。殊に國際的通商關係によつての特殊な都市、例へば南北朝時代から商港として發達した堺は、室町時代の後半には、日本での最大の商港となり、支那は勿論遠くヨーロッパとの貿易が行はれると共に、工業も起つて商工都市を生じ、また豊

臣秀吉が、當時寺院の門前町として發達したに過ぎなかつた大阪を、大規模な都市として經營して、遠く南洋方面への貿易港として發達せしめ、また一時衰へてゐた博多をも回復した。所謂倭寇の名によつて知られてゐた海賊の根據地としての瀬戸内海の島々にも、かの村落地域の中に商業的中心地區の發生を見たやうに、船津としての都市的發生を見たのは、此の時代の特殊な都市的形態である。

近世に至つて、封建政治形態を基底とした城下町の構成は、城郭の構造と城下町經營の意圖によつて成し遂げられ、それが多くの現代都市の區劃の本幹となり、爲に其の形體が井然としてゐるばかりでなく、其の居住地區の配置に於ても、また住民の職業に於てすら極めて限定的であり、かくして城下町としての都市經濟の機能も亦統制されてゐた。即ち是等の都市人口の職業構成は、現代の經濟組織の下に著しく崩壊し始めたとはいへ、なほ其の基底をなしてゐる事は、我々の眼前に展開してゐる事實である。

(註) 舊城下の結構は、武士の據つた威容儼然たる城郭の膝下に、大街道が通じてゐる。數多の商人乃至工匠の輩は、此の大道に近く住んで居つた。彼等はほゞ其の職業に依つて集團をなし、工匠の徒に就て殊にさうであつた。此の町家より内方には、侍屋敷が充満したが、なほ町家の外方にも低い身分の侍屋敷が置かれた。かく城下町は城郭と武士とを首腦とした都市であるから、其の經濟的價値は、必ずしも著しかつたものではなく、始めは町人も多くは武士階級の需要に應ずる爲のものであつた。しかし大名も領内の平和と繁昌を念とし、競つて生産の振興に努力した結果、後世の名産(塗物、陶器の如き小工業)と稱するものは、多くは城下を中心として發達した。のみならず、泰平が長く續いてゐる間に、町人の勢力は實に侮り難くなつて來





た。武士の經濟はやがて町人に依つて左右された。時代の趨勢が此の如き有様であるから、城下の經濟的意義も日に増し著しくなつた事と思ふ。(大類博士『城郭の研究』)

是等の城下町都市に次いで興起したものに、産業都市があり、宿驛があり、海港がある。しかも是等の諸都市は概ね封建制度下の政策並に施設と相關關係に置かれてゐる。即ち産業都市の主因である工業並に鑛業は、諸侯の國産獎勵と武士階級及び町人階級の奢侈的慾望等によつて起り、また宿驛は、諸侯の參觀交代の制度によつて著しく發達し、特に江戸城を擁護する上から、其の圍繞地域を發着地點とする直轄的交通機關たる五街道(東海道、中仙道、奥州道中、甲州道中、日光道中)に於て發達した。海港に於ても城下町都市の外港とも見るべきもの多く、外に參觀交代の際の寄港地、また江戸大阪間の菱垣船、樽廻船、奥羽廻船、北國廻船の如き、何れも特殊の發達に依る都市經濟の特殊型をも構成した。國際的通商關係による海港は、此の時代の鎖國政策によつて港の數は減じたが平戸から長崎への推移と集中によつて、それが一層國際的色彩を強めた。是等の特殊の都市が、封建制度の崩壊と共に、其の經濟機構並に社會機構の上に著しき變改を見たといへ、現前の都市社會の形體並に機能の上に、なほそれが基底をなしてゐるから、都市の郷土地理的研究には、此の基底の認識が最も必要である。

(註) 城下町としての都市計畫が、幹線道路に沿うて平行的道路が作られてゐるのは、京都に摸したもので、それは高岡の都市計畫に就いては、「京師ノ町形ニ倣ヒ作ラルトナリ」(『三州志』)、飯田の都市計畫に關しては、「京都ノ町割ニ準ジテ豎横ニ小路ヲ割ル」(『飯田萬年記』)に徴しても、また安永年間に我が國に來られたツンベルグが、我が國の村落と都市との形體に就いて、「日本の村落は町と同じ位に長いものであるが、容易に兩者の區別は出來る。村は一本の街路よりなく、町には數條の街路がある。」(ツンベルグ『日本紀行』)と述べてゐるのを見ても明かである。宿驛も特定の交通條件の爲に發生した都市でありそれが形體の上にも著しく現はれて、街道に沿うて殆んど一列に構成されてゐるから、外人の觀察にも直感されたりしく、「町といふ町は、悉く一列の通り(One street)より成立つてゐる。」(『ミニストル・オールコック氏紀行』)と記されてゐる。

かゝる封建時代の軍事的並に政治的都市が、全國家的に統制され、其の中心都市たる江戸は、更らに、明治政府の樹立と共に帝都としての大都市經濟を構成するに至つた。こゝに其の基底としての形體を概観するに、江戸は徳川幕府を始め、三百諸侯の邸宅並に旗本の居住地としての大消費都市であり、其の需給關係にある商業地域たる下町は、それとの依存關係に構成された。しかも二百有餘年の泰平は、此の國家的都市の發展を可能にした。之を居住地域の展開の上に就き、都市としての地域的進化を考察するに、

一、三百年前(天正十八年頃) 家康入府當時で、當時の都市的地域は、東は今の和田倉門から、馬場先門内西は四谷區の入口の傳馬町附近、北は飯田町から水道橋、南は雷門までは主要地區で、なほ東は溝を隔てて、兩國橋から木挽町までの一部であつた。別に離れて淺草寺附近は當時開けてゐた。

二、三百年前(寛永初年) 城郭都市としての面目が整つた時で、即ち木丸、西丸の區劃がはつきりし、大名小路半藏門などが出來、外濠もめぐらされ、日本橋、京橋二區の溝梁も整然と掘られ、隅田川口の永代橋から小名木川の運河も通じ、また佃島なども、都市の一部として意味づけられるやうになつた。



三、二百八十年前(承應年間) 四代將軍の時、著しく地區が擴張し、また市街の發達した時代である。即ち北は小石川、本郷から、西は大久保、澁谷まで、東は麻布、芝まで廣がり、東は新に深川も出來、千住大橋も通じてゐる。

四、二百五十年前(延寶年間) 都市地域の外縁である地區が、著しく擴充され、北は駒込、西は新宿、南は品川の地名が散見し、東の本所、深川も著しく整つて來た。

五、百九十年前(元文年間) 八代將軍吉宗の時、都市としての市街地域が漸く定まり、深川方面の埋立も進行した時代である。北から西にかけての縁邊も、著しく進展した事が跡付けられる。

六、百年前(天保年間) 十一代將軍家齊の時、都市としての江戸の最も整つた時代である。

(註) 明治四年改正東京大繪圖にあらはれた東京は、江戸時代に整つた都市江戸が、大正十二年の震災前、近代的都市としての面目を躍らしてゐた東京市との間に於て、最も衰へた時代である。我々は、以上の諸圖を比較し、各時代に於ける核心地域に於ける進化を地名、區劃等によつて跡付け、更らに擴張地域に於ける進化を跡付ける事を必要とする。

江戸を地域的區劃の上から概観するに、元來大體が軍事的見地から割出されてゐたから、軍事的地域と政治的地域と居住地域とが、近世都市の如く截然と區劃されてゐない。しかし核心部としての城郭を中心として、外郭即ち外濠内を軍事的地域とし、濠外を武士の居住地域と見るべきである。従つて濠内の武士と濠外の武士との幕府との

關係は、自から異なるものがあつた。之と對立しての商業地域は、所謂下町を本體とするが、なほ武士の居住地域の中にも、小さな商業地區が分散してゐるのは、自然の必要から發生したものであらう。以上の二大地域の外、運漕の便に富んだ隅田川岸、飯田河岸等に、倉庫地域の發生を見、更らに臺地(山手)の處々に宗教地域を置き、なほ娛樂地域をも區劃されてあつた。而して是等の區劃の大體は、今日帝都東京市の形體の骨組を形造つてゐる。

現代日本の大都市には、明治時代に入つて、産業上、交通上、軍事上等の諸關係から、全く新に興起した都市も少なくはないが、其の母胎を前代の都市的構成に受けたものが少なくはない。昭和十年十月に行はれた國勢調査によれば、人口十萬以上の大都市は三十六で、東京、大阪、名古屋、京都、神戸、横濱、廣島、福岡、吳、仙臺、長崎、八幡、函館、静岡、札幌、熊本、横須賀、鹿児島、和歌山、佐世保、岡山、金澤、川崎、小樽、堺、豊橋、新潟、濱松、下關、岐阜、尼崎、門司、小倉、大牟田、高知の順位になつてゐる。是等の大都市の中で、十年間に人口増加率の著しい所は、八幡(六三%五)、小倉(五三%八)、濱松(四九%九)、横須賀(四九%九)、川崎(三九%三)、福岡(三九%二)、吳(三六%八)の七市で、近代工業の發展に依る所が多い。以上十萬以上の三十六市の中で、市域擴張によつて人口の増加した所は、市域内に、中心市街地の外に農耕地山林地を包含してゐる所が少なくないから密度(平方軒)の上から見ると、大阪(一六、一五一)、神戸(一一、一一九)、函館(一一、〇三六)、東京(一〇、六六六)、姫路(九、八八五)、濱松(九、一〇二)、堺(八、九七一)の順位で、其の中、四つは關西の



立地してゐる事は、都市化の濃度を示すものである。また札幌(八、一三二一人)、金澤(七、九二五人)、名古屋(七、二二一人)、新潟(六、六七〇人)之に次いであり、大牟田、和歌山、八幡、横須賀、横濱、長崎の六市、共に五千人臺である事は、我が國の都市人口の密度の基準を示すものであり、かゝる大都市を通じて、其の動脈たる交通系統の近代化は、前に述べた都市計畫事業と相待つて、大都市機構の一大特徴であり、それが夫々の人口を求心的にまた遠心的に移動させる。

大都市の發達と人口と交通系統との關係は、其の近郊の交通機關と、各驛の乗降人數の大小と其の變遷に殊によくあらはれる。之は筆者が、大正六年に東京市の西郊を踏査した際に實驗した所(拙著『帝都と近郊』参照)で、東京市役所の調査(『東京市郊外に於ける機關の發達と人口の増加』、其の他大阪市等によつても明かである。これは單に人口の上のみならず、産業、經濟、金融等の諸機構にもそれがあらはれてゐる。

かく近代都市としての我が國の大都市は、三四十年来、著しき發達を來した結果、新に市域に編入せられた地域が、夫々の地域内には未だ村落的特質を保持してゐる所が少なく、また市域に編入せられたる地域に於て、都市的人口の延長を來してゐる地區もある。故に、近代都市の所産としての近郊地域の研究は、重要な一つの研究題目で、阪神間の精道村の如き高級住宅地がある。かく遠に近代都市化された近郊地域は、行政的にも、經濟的にも、社會的にも、一つの統制ある連帶觀念が乏しい。故に社會的な見地からしては、其の地域的研究に基いた地域的連

帶觀念を明かにする施設が必要である。

(註) 近郊地は中心都市の求心的威力(Centripetal force)の可及範圍であるから、其の範圍の廣狭は、自から中心都市の求心的威力を構成する諸要素の量並に質によつてそれが決定される。然らば此の求心的威力を構成する諸要素中、如何なるものが地理學的條件として最も本質的なものであり、しかもそれを如何に考察すべきであるか。こゝには近郊地の地理學的特質としての人口の重要性が顧みられなければならない。

現在の近郊地の人口は、總和的に見て極めて近代化してゐる。しかし多くの郊外地に於ける人口の基底は、長い年月を経て生み出された傳統的職業たる農業に依存してをり、此の農業人口の郊外地に於ける位置は、其の生産年齢級にある男女は、複雑なる理由によつて中心都市に牽引されるゝとしても、農業經營の集約化によつて、或程度に農業人口を支持してゐる。此の近郊地域に於ける農業人口の保持は、農業經營の爲には勿論、所謂田園計畫の實行の爲にも、また中心都市への勞働力供給の爲にも緊要であるばかりでなく、また人文的調和(human harmonization)としての役割を有つてをり、それが半永久的に近郊地の人口の支柱ともなるであらう。しかし近郊地としての人口の特質は、中心なる近代都市の發達に伴ふ都市的人口の凝集の出現でなければならぬ。即ちそれはムーローの所謂「近郊が都市プロバのやうに人口が稠密である」と否とに關はらず、そこは都市發展の地帯であり、その人口増殖は都市人口の凝集の結果であり、また其の條件其の物となるのであつて、現代大都市發展の特徴の一つは、輻市中心部の人口の減退と其の周邊人口の果進的増殖に存するからである。殊に近郊地域の人口凝集は、中心都市の縁邊に於ける地帶的狀態が、量的にもまた質的にも共に都市的である事を特色とする。而してその人口凝集が、密度に於て都市型をなしてゐるばかりでなく、其の職業の分化度に於てもまた都市型を帯びてゐる。しかし近郊地に於ける人口の今一つの人口凝集の特色は、所謂プロクラステイアン・メソッド(procrustean method)ともいふべき都市計畫に



よつて行はれた近郊地の新なる交通網の發生と、産業殊に新興工業の分布に基く人口の分散的凝集である。是等の人口凝集は中心都市の縁邊に於ける地帶的人口集團ほど、地域的には大きなものではないが、其の密度に於てもまた其の職業に於ても共に都市型である。しかも其の中のあるものは、都市型人口の細胞的集團 (molecular group) として、將來發達の可能性をも有してゐる。是等は、何れも中心たる大都市と近代的運輸交通機關によつて密接な相互依存關係をもつてゐるから、アメリカでは、其の關係を「大都市星座」なる呼稱をつけてゐる。

以上述べた大都市に次いで、なほ全國には九十三市をもつており、市制を施行すべく運動中の町及び町を中心としての隣接村落を包含しての地區は、三十四の多きに達してゐる。是等の趨勢からも、所謂都市化 Urbanization の趨勢を知ることが出来る。かくして、近代交通機關の發生は、村落と都市との關係を一層有機化するが爲に、アメリカに於ては都鄙社會 *Rurban Community* なる呼稱さへ生れるに至つた。

#### 四 研究方法

##### 一 郷土

我々の眼前に展開してゐる郷土、我々の生活環境としての郷土は、村落としてまた都市として、如何なる發達過程を辿つて來たか。夫等の特質は、已に序説と村落と都市とに分ちて述べた。しかし之を正しく認識しまた體得しこれを「我が物」とするには、先づ郷土の何物であるかを把握しなければならぬ。シュプランガーは曰く、

「郷土とは人間が土地と共に、又は其の土地に生ひ立つた凡ての自然的、精神的なるものと内面的に生成した時はじめて郷土を持つたといひ得るものであつて、人は誰でも或る郷土に生れたではないかと考へる事は、全く間違つてゐる。出生地が郷土と呼ばれる爲には、其の人が其の土地で親しく育たなければならない。従つて人によつては、出生地から遙かに離れた土地に郷土を造る事も出来るのである。……郷土は或る地域を、そこに生活してゐる人間團體の體驗界に對する全體的意義といふ見地から見た時にいはれるものである。即ち郷土は土地と共に體驗し、若くは全體結合であるともいへる。もう一度換言すれば郷土とは精神的な根元感情である。それ故にこそ郷土は決して單なる自然と見做さるべきではない。郷土は體驗によつて把握される。従つて精神が通ひ而して最後に人格的に着色されたる自然である。」(『科學的郷土學の陶冶價值』)

之を地理學的に考察したザウアーは、風土 (landscape) なる地域的實在 (Areal reality) とつて、

「自然的風土の因子は、地球夫自身の構成とそれを包む氣象が、其の主なるものであつて、それに次いで植物がある。これらのものが、永い年處を経る間に生れた風土の諸形式は、地表到る處に、氣候、土地 (表面、土壤、流水、礦物資源)、海洋と海岸、植物となつてあらはれてゐる。是等の自然的風土は、人類の有つてゐる文化と接觸交渉した結果、こゝに人口密度と移動、住家の間取と構造、生産物、交通となつて、人文的風土を現出するのである。」



と解釋する。ザウアーの此考へ方は妥當であるが、要素としての動物を缺いてゐるのはどうであらうか。

此の如き郷土をかく地理學的に考察するには、如何なる中心思想が必要であるか。筆者の信する所では、それには研究者自からが、先づ郷土を體得し、それによつて地域社會を地理學的に研究する事が要件となる。即ち近代地理學的技術を地理學的精神によつて驅使する事を必要とする。

## 二 地理學的精神

ブリューンに據れば、

「地理學的精神は、地理學的感覺であり、地理學的感覺は人類の經濟的、歴史的、政治的活動のあらゆる表現の具體的認識である。地域的實在の精確なる諸形體、また夫等のあらゆる物質的展開の中に現はるゝ諸形體を見、はつきり夫等の表現の種々相と空間に於ける夫等の差異を見る事は、地理學的精神の我等を指導する賜である。顧みるに我が日本國民は久しい年月を此の國土に過ごした。従つて、此の島國であり山國である風土の間に生活しつゝ此の風土の上に現はした歴史的、政治的、經濟的活動のあらゆる表現に對して、十分に體得し認識し、それが所謂地理學的精神として表現されてゐる。殊に長い徳川時代の封建政治下に育まれた地方文化の展開は、夫々の地域的實在として具現され、それが各藩の學者の業績となつて現はれてゐる。故に是等の文獻は、假令夫等が今日

の科學的見地から見れば精緻なるものではないにしても、すべて地域的實在のあらゆる諸形體の具體的認識である事は之を認めなければならぬ。言葉を換へて言へば、是等の文獻は近代地理學上の地理學的技術を通しての認識でないにしても、前時代の地理學的感覺即ち地理學的精神の表現であるといひ得る。殊にシュプランガーの所謂「郷土は精神的な根元感情であつて、それは體驗によつて把握さるべきものである」とすれば、是等の文獻は、明かに我が民族の精神的な根元感情の表現であるから、日本の地理學的精神の把握は、是等の原據に之を求めなければならぬ。故に日本の地域社會の研究には、近代地理學としての地理學的技術は勿論必要ではあるが、我が日本國民の地理學的感覺の所産である郷土的文獻を涉獵し、其の中に横溢してゐる地理學的精神を把握する事が先決的條件である。故に前時代の地理學的感覺、即ち我々の祖先の地理學的精神の所産である郷土的史誌を涉獵して、日本の地域社會の地理學的研究の基準の構成が、研究方法の中核である。

此の意味からして、日本の地理學的精神を體得した學者を明治時代に求むれば、吉田東伍博士の如きは、實に其の人であらう。同博士の日本の歴史地理的研究の論考が、多くの他の所謂歴史地理研究者に比して、殊に識見に富み而も實證的なる理由に就いては、後章「島國日本の風土的特質」に述べた。

此の地理學的精神の體得者として、我々は年中、土や海に親しみつゝ其の生活を終始してゐる農民や、漁夫のある事を見逃してはならない。是等の人達の生活の中には、地理學的精神が實在してゐる。故に我々は、文獻と生活



の両面から學的精神の躍動を把握する事が必要である。次に述ぶるルプレー學派の如きは其のよき典型である。

### 三 ルプレー學派

然らばルプレーの學派と地理學に結び付けた人は誰か。其の建設者としてのハーバートソンに就いては、已に前に述べたが、最近ブラオン氏は、

「ハーバートソン教授が近代地理學者としての先驅者であるのは、最初氣象學者であつた彼が、植物分布の研究に於てフランス學徒の影響を受けたばかりでなく、社會學者としての先驅者たるルプレー學派に負ふ所多い事が彼をして六十年前に逝いたにも拘はらず、實に二十世紀の地理學者としての風格をもたらしめた所以である。」

と述べ、なほ彼の地理學的思想を窺ふべき論文として、殊に一地域的環境と遺傳と認識」を挙げ、其の中の言葉を引用して、「人類と自然とは明かに分解されない一體である」として、「人類の身體も、また其の思想も、自然と密接の關係ある」考へ方を述べてゐる。

かくハーバートソンに影響を與へたルプレー(1809—1882)の學風は、筆者は他書(拙著『郷土地理研究』、『郷土教育運動』参照)に公にしてゐるが、其の思想の中核たる公式は、「土地と勞働と住民」の相關關係を實證するにありとなし、其の學徒は之を、

「人類の生活は環境(土地)と業務(勞働)と生物(住民)の律動であり調和點であつて、それが此の進化的科學の絶對命令である。」

と解してゐる。而して環境は地理學によつて、業務は經濟學によつて、また生物は人類學によつてそれが解釋されるところとしてゐる。此の範疇は實に彼ルプレーの家庭と郷土を通して、國家との關聯を見出した指導理論であつて、あらゆる彼の生活環境の反映と彼の社會觀察の實證の歸納である。イギリスの地理學的研究の方法が、著しく此の學派の洗禮を受けてゐる結果、それが所謂地理學の方法論のみに依據せずして、常に社會學的考察また經濟學的考察を多分に取入れやうとする學風を馴致したから、有機體としての地域社會の地理學的解釋には、此の研究方法が最も効果的であると信ずる。

(註) ルプレーの教養時代は、非常によく調和されてゐる。セイヌ河口に生れ、早く父を喪つたが、母の宗教的感化に浴した彼は、少年時代の體驗によつて、家族の富殊に多くの貧しい家族の本當の蓄は、薪と果實と同じやうな天産物である事を知り、それが成人としてのかれの思想の根柢をなした。殊に二十四歳の時、友人レーノーと共に七ヶ月に互つて西はモーゼル、マース、ライン三河の流域から、北は北海、バルチック海、南はエルツ山脈、チューリンゲン森の間を全長四千哩の長途徒歩旅行を試みた結果、社會問題は想像したよりも限りなく複雑であり、社會科學の研究は材料の精密を必要とする總べての他の科學と同じく、觀察に基礎附けられなければならない事を覺つたといはれ、殊に其の中に引用された手記に、「我々の達した結論は、此の科學は他の諸科學の課程で教へられたものと同じく、先に決めた概念に囚はれずに、唯事實に就いて秩序ある觀察と



嚴しい論理の歸納に基礎附けられなければならない事であつた。私は社會的事實の知識の中に社會科學の法則を求めようと考へた。」とある事から推しても、彼の社會觀察の研究方法としての公式は、生々しい體驗から生み出された歸納である。

ゲッデズ (1854-) は生物學者でありまた思想家である。彼は、生物學から社會學に突進し、生活の活動理論への基礎を有機的、心理的また社會的に考察することに置いた。即ちブランフォードに據れば、彼はコムトとルブレの傳統の繼承者たるばかりでなく、また其の補導者として、二人の本質的寄與を完成すると共に、更に新しい方向への理論を發達させた。彼の社會學的綜合の體系は、經濟學、社會地理學、人類學、社會心理學等關聯ある諸學の専門學者を結合させ、更らに進んで新しい方法——不十分な名稱ではあるが、それは地域及び都市調査 (Regional and civic survey) とよばれてゐる——を案出し、野外自然科學者の研究方法を現代の社會生活の研究に適用する事に成功した。此の方法は都會や田舎を觀察する事であり、觀察によつて理論が吟味されると共に現代文明の最も複雑な活動と最も大きな希望とが記述されまた解釋される。ゲッデズの所謂地域調査の基本的單位即ち地域は地理學者によつて提供される「河谷」である。此の一つの河谷を記述するが爲に、地域調査者は、地理學者と共に河源から河口まで徒歩し、其の間に展開してゐるあらゆる現象を觀察し其の諸現象を作圖するのであつて、それが更らに次の調査者によつて是正されまた確實にされる。かく河谷を觀察の研究對象とする研究方法は、常に地理學者によつても採られる方法であるが、それをルブレの社會觀察の研究單位として取入れたのは、ゲッデズによつ

て確立されたのであつて、其の研究方法は「谷の断面」(Valley section) とよばれてゐる。

(註) ルブレ學派の研究方法は、ロンドンのルブレ・ハウスから刊行されてゐる雜誌『社會學評論』所載の諸論文に窺はれる。以上は皆同雜誌からの引用である。ゲッデズの業績は、此の外にデフリースの著『解釋者ゲッデズ』に據つた。

#### 四 村 落

地域社會としての村落の單位を如何にすべきか。これは村落の地理的研究に當つて第一に決定しなければならぬ問題である。

今日我々の所謂村は行政上のそれである。これを發生的に見れば、徳川時代の數村が一村になつてゐる處が多い。徳川時代の村即ち今日の行政上の村の中の大字又は小字は、明治以前には夫々一つの獨立した村落團體であつた。是等の村落團體は、其の成立上多くは同じ神社の氏子であつたり、同じ寺院の檀家であつたりする關係から、其の信仰關係が一つの村落團體としての組合を強固にし、また姓の本支關係や、地主小作の農業労働關係が、更に一つの村落團體としての結合を有機的ならしめた。故に此の特定地域の住民は、かゝる依存關係にある土地利用状態を基調としての農業經濟關係の下に、郷土としての村落の單位を構成してゐた。かくして是等の村落團體は、極めて小數の外は明治政府の地方行政組織によつて、また其の産業政策等によつて、其の經濟組織並に社會組織に幾多



の變革を來したとはいへ、一つの村落團體としての傳統は今日猶多くの殘存を見るのである。故にそれを單位としての地域的展開と其の機能には、今日社會的意義が見出される。だから研究の單位としては、先づ徳川時代の村落團體を取るべきである。而して其の研究要項は、

一、土地利用状態——田、畑、山林、原野、宅地等の分布と地形（山地、平地、濕地、池沼、傾斜、水系、用水等）との關係、明治以後の變遷地區は殊に其の位置と理由を明かにする。

なほ別に耕地と作物の關係、土壤と作物との關係を明かにする。（圖示）

二、道路——古道、主な作場道、昔からの街道と近代的道路（縣道、國道）等の分布、耕地、原野、居住地並に傾斜との相關關係、更に居住中心地區並に神社との關係を明かにする。（圖示）

道路の種類と其の廣狹、並木の有無、敷石の有無を明かにする。

三、居住状態——方向、傾斜、最高限界、疎、密、職業別、並に本支別の分布、公共建物の位置、中心地區と周圍との關係を明かにする。（圖示）

住居の隔離程度を夫々の前庭、庭園、果樹園、耕地との關係に依つて明かにする。（圖示）

類型的農家に就き家構（住宅及び以外の建物）、宅地の利用状態、農業用土地の利用状態、生産及び消費の状態等を明かにする。——成るべく農業經營から見ての中位を取る。

四、生活の動き——新しい生長を代表すべき事物の位置と、保護さるべき事物の位置とを明かにする。（左註『イギリス田園の保護』要約参照）

五、村落團體存立の要因たる産業、人口並に交通機關の推移から、部落の盛衰傾向を究め、殊に出生並に死亡率、保健状態、離村、出稼並に外來者の入村に就いて考察する。

六、研究對象としての村落團體が、行政上の村の中で、經濟上、社會上如何なる立場にあるかを考察する。

七、作圖には、以上の諸現象の分布と地理的環境との關係を明かにし得るやうにする。なほ發生を明かにする爲に、村役場や舊家にある切繪圖を參考にする必要がある。

（註）行政上の村でさへ、少なくとも二萬分一か一萬分一でなければ、其の土地利用状態の大觀すら明かにする事が出来ないから、大字である村落團體の地理的環境を明かにするには、土地利用状態だけならば五千分一乃至三千分一圖を必要とする。住家の分布を明かにし、殊に其の疎密の程度、更に進んで住宅と宅地との關係を或る程度まで明かにするには、更に大きな縮尺を必要とする。

しかし、村落團體を地域社會として考察するのに、かく項目別に分析的にする事は、着手する順序としては已むを得ないが、夫々の諸現象を圖化した上、夫等を比較研究し、其の間に躍動してゐる有機的な機能を把握してこそ始めて研究の目的が果さるべきである。かゝる有機的な機能は村落團體の居住と生活とがからみあつて、それが土地利用のまた道路の形態にも機能にも現はれてゐるのであるから、一旦調査した資料を材料として、それらの機能



の躍動を表現するやうに村落團體なる新建築を構成する心構を必要とするのである。それには、下記の註に述べたイギリスの田園生活の動きなど、考察方法によい參考となるのであらう。日本でもかゝる考へ方が必要である。

(註) 以上の調査事項を通して、村落社會を明かにすべく、これを綜合するには、常に「田園郷土の動き」を把握しなければならぬ。それには、左に述べられてをるやうな諸項目によつて田園生活を觀察する必要がある。

田園の生長と其の變化、これを保護すべき爲の條件、新しい田園の生長とそれへの制限、これを包括する田園計畫乃至風景設計は、イギリスの如く日本の現状にも起りつゝある。故に此の田園郷土の動きを洞察する觀察眼、即ち地理學的精神を以て、田園郷土に向つて呼びかけられなければならない。かくしてこそ、郷土は體驗によつて把握され、精神が通ひ、最後に人格的に着色された自然となる。此の著者アーバー・クロムペーはまたルプリーの信奉者である。(『イギリス田園の保護』要約)

イギリスの田園は變化しつゝある。此の避けがたい變化は、田園の成立つてゐる特色ある光景を破壊しつゝあるが、其の間にも田園の特質を保護し、また處によつては田園美の新しい標式を創造する事が出来るであらうか。ミルラー卿は田園生活の改造を高調してゐるが、田園計畫は都市計畫と相對的なものである。我々は祖先の足跡ともいふべき古い記念物を破壊から保護しまた救ひ出す義務はあるが、これにもまた最大の史的記念物であり、田園イギリスにとつての最も本質的なものである市場町、村、垣をつくつてゐる灌木、小徑、小川や農場が閉却されてゐる。科學や機械力は、此の田園の喪失に對して、それにかはるべき何物かをイギリス人に與へ得るであらうか。

田園に變化を與へる三つの大きな力は、「一」田園が發達すると共にそれが地方分權に伴うて都市的になる。「二」都市と田園との經濟的相互關係からも来る。「三」發動機による交通、であるとして、田園の發達と地方分權に伴つて都市的になる事と交通の發達による具體的な例證を挙げ、最後に此の三つの傾向の長足な發達を述べてゐる。

かゝる田園の變化に對して、保護されるべき數々は、「一」田園の町や村の數々を始め、「二」手のはいらぬ田園ともいふべき山、野、澤、林、濱など、「三」特別にいゝ景色の處——リチモンドから見たテームスの谷やアヴオンの谷、「四」イギリスの田園でよく見られる景色、「五」歩道や小徑、「六」小川や川、「七」垣根などとしてゐる。

之に反して田園に於ける新しい生長は、「一」民家の配置、「二」大都市によりかゝつてゐる町、「三」工場、「四」休養に行く小屋、「五」農家、「六」家構と色彩、「七」道路、「八」石切場、煉瓦製造所、「九」一時的の不恰好——廣告、商標、「一〇」古植物、「一一」遊戯場、地方公園などとしてゐる。かゝる田園の保護に對し、著者は其の主なる制限の方法として、「一」古い記念物の保護、「二」設計及び材料から見ての新建築の制限、「三」取擴げの制限、「四」道路、「五」地域的計畫、「六」樹木、「七」廣告、「八」買収を擧げてゐる。

かくして以上の目的を達成するが爲の田園計畫は、「一」委員會、「二」田園計畫の單純化、「三」田園計畫の實驗所としての東部ケント、「四」誘致する計畫、「五」田園計畫に就いての心得を必要とし、それが都市計畫よりも複雑である數々の理由を述べてゐる。

最後に風景計畫と田園調査と題して、「一」新しい主題として、風景の美しさと其の設計が、都市計畫の上に最近二十五年間研究せられては來たが、これが田園への應用ともなつて來た事を述べ、「二」「風水」と題してヨーロッパの風景設計が殆んど全く都市にのみ限られてゐたのに、支那は千年前已に自然的條件と人文的條件との調和を企てゝゐた事を述べ、また支那の都市に過剰になつた人口が田園に向つて注ぎ、それ等の人達が所謂「風水の説」により、居住の適所を選ぶ事例を引き、「三」「風景設計への無頓着」に於ては、技術家達が技術を應用する理論と、其の方法とを定むるに忙しいが、民衆は其の無頓着から醒めなければならぬとして、其の事例を述べてゐる。次に「四」田園即ち村落調査として、ルプリーの所謂土地と労働と



住民とに就いての調査を主張し、最後に「五」全國的調査として田園の村々を中心としての調査が、教會區の調査に出發し、それが州から國に及ぶべき事に説き及ぼしてゐる。而して其の結論として、イギリスの田園が、今や一層不意にそして激しい變化に脅かされつゝあるから、種々の方策が講ぜられるべきであるが、風景設計に於て、田園の尊重に於て、田園の狀況の部分的調査に於て、地方の教育が役立つべきであるといつて、其の問題は決して樂觀すべきでないと結んでゐる。

## 五 都市

地域社會としての都市の單位を何處に求むべきか。これは行政上の村の中にも其の萌芽が求められる。即ちブリーンが、「數百の住民の集合地でも、小都市の風格を保持してゐる所がある」といつてゐるやうに、小さな辻や市場や宿驛や船着場や停車場や遊覽地や温泉場などにそれが見られる。かゝる都市的集團の地理的特質は、其の居住密集の状態、また其の住民の職業の複雑さに最もよく現はれてゐる。また行政上の村落でありながら、最も都市的集團の特質を示してゐるのは、大都市に隣接してゐる近郊村落である。しかし之を概念的にいへば、地方の商業的中心をなしてゐる居住地域が都市の最小單位であり、それが常に農業地域の中心地區であるのである。かゝる農業地域の中心をなしてゐる町、即ち商業的中心をなしてゐる居住地區は、我が國では行政上の町なる特定地域の中で、最も密集的な居住状態をなしてゐる地域であつて、其の住民の主たる職業は商業を營んでゐる。しかし我が國に於ける都市の最小單位は、是等の商業的中心地域を始め、徳川時代の封建政治形態の所産としての小さな城下

町、所謂街道などに沿つてゐる宿驛、地方的の小さな河港や湖港や海港、火山國としての所産たる温泉町、山國としての所産たる鑛山町などがある。是等は明治以後の政治形態の變革に伴ふ産業、交通等の消長によつて、徳川時代に於ける形態と機能よりも、量に於てもまた質に於ても或は退化し或は興起した。

行政上の市である都市は、町であるそれに比べると、形體も機能も共に大規模で、人口の如きも前に述べたやうに百萬以上の東京、大阪、名古屋、京都、七十萬以上の神戸、横濱、二十萬以上の廣島、福岡、吳、仙臺、八幡、函館、静岡があり、十萬以上は、札幌から高知まで二十一に及んでゐる。是等の都市の人口階級は、十萬以上を大都市といひ、二萬から十萬までを中都市、五千から二萬までを小都市といふ分け方をしてゐる。今大都市の地域的分布を見るに、其の濃度は關東地方を第一とし、近畿地方は第二位、關門海峽から北九州一圓は第三位を占め、瀬戸内海岸、東海道海岸、北陸海岸之に次いでゐる。以上の諸地域は、我が國の文化發達上重要な地域であつて、諸都市の濃度は、直ちに各地域の生活力の指標といひ得るのである。しかし個々の都市の經濟的並に文化的水準は必ずしも地域性の制約を受けてゐるといへ得ない事は、夫等の生活力の諸要因たる經濟資源の種類、夫等に依存する産業並に交通等によつて、夫々の形態並に機能を異にするに至るからである。都市の研究方法としては、都市社會の立地、其の存在理由、其の生活根底等が根幹となるべきであつて、都市社會を構成する人口の質量の測定は是等の重要な研究基準となるのである。



(註) 都市の人口の測定は、其の増加の三つの形態に現はれる。第一は、都市地域の擴大に伴ひ、郡部の居住者が其の儘都市化される場合で、社會學的には、環境其の物の移動と稱せられる。第二の形態は、都市の人口の自然増加に依るものであり、第三の形態は都市への人口の流入に依るものである。最初の國勢調査から最近のそれに至る一九二〇——一九三五年の一五年間に於ける日本の内地の都市人口の増加は、第一の形態に於ては、増加人口一二五七萬の中、四三〇萬で三四%を占め、第二の形態即ち自然増加は二八七萬で二三%、第三の形態即ち流入は五四〇萬で、三四%を占めてゐる。

一、人口状態——現住人口、現在人口、職業別人口が、如何に地區的に分布し、集團してゐるかを明かにする。殊に類型的地區に就いて、産業並に交通等と結合しての人口状態(出入、移動、密集)を明かにする。

都市の人口集團の分布状態は、都市が村落的城市(以下)より小都市、中都市、大都市と階級的に大きくなるにつれて複雑化するから、産業並に交通との關係は部分的にまた全體的に考察しなければならない。

二、居住状態——傾斜、道路、産業、交通と人口の相關關係を地區的にまた全體的に明かにする。殊に主なる商業地區、工業地區、住宅地區、慰樂地區、智的中心地區等の居住状態の特色と、それが都市全體に有つ意義とを明かにする。

三、産業状態——産業の特質と地區別の分布、殊に近代的産業の特質と其の分布を明かにする。

四、道路——昔からの街道、主なる辻、廣場、主道と河海の配置、殊に主要産業と近代的交通機關の位置と其の關係とを明かにする。

近代的産業と近代的交通機關との關係と、近代的交通機關の構造と施設とは殊に明かにする。

五、生活の動向——都市生活の動向は、都市進化の必然性、殊に都市人口の質量、都市人口移動の二重の方向(求心力と遠心力)、都市人口の増加より生ずる社會的作用、都市の藝術的特色が綜合しての結果である。これは量的にいへば都市の大小、質的にいへば都市の成因、産業、新舊等によつて、以上の生活の動向即ち生活の根底に、夫々差異があり、それが都市の個性としての地域的實在に具現されてゐる。

六、立地地域——都市の階級により立地地域の占居に著しき廣狹がある。中心地區と縁邊地區、其の中間地帯など、産業の種類、富力の差異、地價の高低等によつて、夫々價値を異にする。發生的に見ての中心地區と現生活のビジネスセンターと結合してゐる都市と然らざる所がある。多くの都市は、發生的であるから、核心を中心としてゐる。しかし、最近防空の必要上、數多の中心地區を計畫的に分離形成すべきであるときへ主張されるに至つた。

八、財政——都市が大きくなればなるほど、また其の産業が複雑であればあるほど、殊に近代的産業並に近代的文化施設が多ければ多いほど、財政との關係を考察する必要がある。

九、作圖——以上の諸現象の分布と、夫等の相關關係を明かにし得るやうに作圖する事を要するが、大都市ほど作圖を大きな縮尺にしなければならない。故に諸現象を大觀し得るやうな略圖と、部分的な詳圖とを對照しなければならない。なほ發生を明かにするために、市役所、町役場、舊家にある切繪圖を參考にする必要がある。



(註) 我が國の都市計畫は、都市の急速な發展を自然に放任しておいては、種々の弊害を生ずるので、始め、東京市區改正條例として、明治二十二年に制定されたものを濫觴としておるが、世界大戰後、大都市の發展殊に著しく事業の勃興、人口の集中等から起る弊害が放置する事が出来なくなつたので、それを改正し、東京の外、京都、大阪、横濱、神戸、名古屋にも施行し、續いて都市計畫調査會が設けられて都市計畫法と市街地建築物法が制定された。

## 六 地 域

郷土としての村落、また郷土としての都市が、其の經濟的生活に於てまた其の社會的生活に於て、更に精神的生活に於てすらも有機的機能を保つてをるのは、それが地域社會としてある。此の地域の地理的基礎は、其の地域が山地、高原、裾野、溪谷、臺地、平野、海岸等である事によつて、同一地域に立地する村落並に都市は、地形學的、氣候學的、植物生態學的諸考察を必要とし、更らに其の歴史地理的、經濟地理的、社會地理的の諸考察をも試みなければならぬ。かゝる地域の研究に着手するに先ちて、我々は其の地域内の個々の村落又は都市、また地域全體に關する前時代の地理學的感覺、即ち我々祖先の地理學的精神の所産である郷土史誌を涉獵し、其の精神を科學的近代地理學の技術によつて再現されることを必要とする。

しかし地域なる概念に就いてこゝに一言添加しなければならぬ事は、それが單に學術の研究對象としてばかりでなく、國策具現の地方行政施行の一單位として考慮されるに至つた傾向に就いてある。地域はいふまでもなく

Region の譯語であつて、歐米諸國に於ては、かゝる問題を Regional Planning とし、これを地域計畫と譯すべきである。然るに、我が都市計畫委員會に於ては Zoning に對して地帶制といはずに地域制と譯し、これを法制上の成語とした結果、地域計畫を地方計畫と呼ぶに至つた事は、學術の用語としては遺憾な事である。何れにしても、我々は、地域に對する認識と其の活用が法制化されつゝある時代に直面してゐる事を知らねばならぬ。

(註) 筆者の地域研究の體驗ある武藏野臺地の地域的特色を實例として述べて見るに、秩父山塊の山麓線から東南方に展開してゐる洪積臺地で、其の中央に狭山丘陵の古三角形の隆起があり、其の北縁は荒川によつて、其の南縁は多摩川によつて限られてをる。北西から南東に傾斜してゐる地形によつて、地下水を源としつゝ、其の間を流れてゐる數多の河流は、其の沿岸に水田の可耕を可能にし、それが村落居住の發生の核心をなしてゐる。多くの村落の中で、所謂ホムムラ(本村)は多くは此の河岸の南向の水田可能地區に位置してゐる。更に此の武藏野臺地に發生してゐる都市の地理的位置を考察するに、西縁即ち秩父山塊の東麓との接合線ともいふ地區には、谷口町として飯能、青梅などの町々が發生し、八王子市は其の圍繞地域が飯能、青梅に比べて稍々廣いのと、甲州街道の要衝に當つてゐる位置の上から大きく發達し、從つて其の形體もまた飯能や青梅よりは複雑である。此の西方の山地と東方の臺地とは、夫々地理的條件が違ひ、從つて物産も生活も違ふから、東方と西方との接合地區では、東西の所産を夫々交易する必要が起り、其の必要を充たす爲に市が立ち、それが是等の町々の賑ともなつた。飯能町は今日でも常置の商業地として發達してゐるが、近年までは月々六回の市が立つた。しかも以前には飯能町のやゝ東北に當つてゐる中山部落は、月六回に市が開かれた所で、今日中山部落に行つて見ると、村としては似合はないほど廣い路幅に、市場のあつた面影を止めてゐる。



武藏野臺地の南縁で、多摩川の左岸に沿ふて發生した府中町は、南方の相州の方から北方の上州の方へと通じた鎌倉街道の通路に當つてゐるが、其の北方近くに國分寺の地を見るのは、今日こそ水涸れのしてゐる多摩川は、昔、水が豊かで航通のあつた當時、此處らが水陸交通の接合點であつたので、附近に國分寺などの發生を促し、また府中驛をも生み出すに至つたものではあるまいか。江戸時代に通じた甲州街道の宿驛としての府中は、更に其の近代的構成を可能にした。しかし町としては圍繞地域の狭い此の町は、交通機關の變遷によつて其の生命を絶たるゝ運命に陥らざるを得なかつた。北縁に發生した川越市は、西縁や南縁に發生した町々に比べると、河港としての圍繞地域としての背後地が廣いだけに其の發生と發達が可能である。此の河港川越は城市としてまた樺業地として更に複合的發達を遂げたが、それが江戸の發達に及ばなかつたのは、河の機能が中流としてのそれであり、江戸に比べると海の働きがないからである。

縁邊に發生した是等の町々に比べると、武藏野臺地の眞中に發生した所澤町や田無町は、其處を貫通する街道の開通に伴うての發生であるのは、此の臺地の地形の關係上當然の事である。東縁に發生した江戸が、東京としての近代的大都市にまで發達した理由は、一つの地域の所産としてよりも、寧ろ十數地域の複合的作用の所産であるから、武藏野臺地の縁邊に於ける都市的發達の考察としてのみ取扱ふ事が出来ない。

此の武藏野臺地の踏査は、顧みれば二十餘年前に、まる一年間、地形圖と寫眞機を手にしたの踏査の所産であるが、當時、近郊として取扱はれてゐる村落は、今日では杉並區や世田谷區となつてゐる。そればかりでなく、東京市の復興に伴つて環狀線の貫通や、舗装された道路は三四十年前の東京市内のそれよりもよくなつてゐる。従つて此の地域も、今日では東京市の一部として所謂地域計畫が問題になつて來てゐる。

## 五 結 言

一九三一年九月、パリーの國際地理學會議に出席しに際、かねて懂れてゐたロンドンのルプレーハウスを訪れ、毎年行はれる地域調査に關する調査を瞥見する機會を得、當時チェスターの調査に、十數人の同志の研究者が作圖した十數枚の地圖によつて、其の研究内容を明かにすると同時に、かゝる業績の集積が一つの大きな運動として、それが學術的にもまた教育的にも展開してゐる事の偶然でない事を知つた。しかし是等の調査は花々しく知的に行はれてゐるといふよりも、地味にしかも思想運動的に繼續されて行きつゝある事は、今後の日本の地域研究に對して大きな啓示であると思ふ。

今其の傾向を述ぶるに先だち、日本の地域研究の現状を顧るに、それが多くは地理學に立脚してゐるだけに、最近我が地理學界を風靡してゐる地誌學的研究方法のみに依據してゐる。地誌學的研究方法は、或る地域に關する自然的現象の分布に就いての地理學的記述はた人文的現象の分布に就いての地理學的記述に専心する所が多い。是等の精緻なる方法は、新しい若い科學の建設の基礎としては最も必要な事である。従つて地域の地理學的研究の一部に、其の研究方法を取り入れる事は必要である。しかし研究對象としての郷土は、已に前に述べた如く人格的に着色された自然であるから、其の地理學的研究には今日我が國に行はれてゐる地誌學的研究以外に、郷土なる地



域社會の精神をも把握し得るやうな研究方法を主とする必要がある。こゝに思想的の一面が必要になつて來る。

『地域調査概論』の著者ファッグ氏が、一九二八年、地域調査部の部長就任の際になした「地域調査運動の歴史」なる講演は、地域研究の思想的運動の必要を立證する點に觸れてゐる所極めて多いから、筆者は日本の地域社會研究の若い學徒に、遠いイギリスの此の學者の熱意ある講演の數節を紹介し、イギリスの地域研究が、我が國のそれに比して、如何に思想的でありまた含蓄的であるかを反省したい。

「地域調査なる名稱は近代的であつても地域的に調査する事は、動物生活本來の機能である。あらゆる有機體は、其の要求と事情から生活技術の一部として其の環境を調査しなければならなかつた。此の最も基礎的な觀察點から地域調査運動の歴史には、地質時代を通じての動物の系統發育に就いての記述を包括し、調査の手段として種々の方法が講ぜられなければならない。……人類の環境としては自然的並に生物的環境よりも、其の生活環境たる社會的環境が最も重要である。……二十世紀の地域調査運動は、原始民族が其の環境に對してなした調査に比ぶれば實に高等に發達した方法である。……現代の地域調査運動は科學的發展に屬するけれども、其の遠い淵源は之を文藝復興に見出し得る。我々はこゝにベーコンが、「すべての科學は結合してゐる。彼等は一つの大きな全體の部分部分として役立つ材料である」といつてゐるが、あらゆる科學に對してのベーコンの此の見解に就き、現代の地理學者は、ベーコンの態度以上に諸科學に對しての態度が進んでゐないが、ベーコンは諸科學の此の本質

的綜合は、地表の同一地域に於ける關係に於て研究される時ほど明瞭に現はれないと附け加へる事を望んだに違ひない……十九世紀を通じての地質學的、氣候學的、植物學的、農學的、考古學的、史學的、社會學的各特殊部門に就いて述べる時間がないから、其の一、二に就いていへば、社會學的範圍に於ける最も重要な調査の一つは人口調査である。……植生調査の發達は、地域調査運動の必要缺くべからざる部分として注目されなければならぬ。植物生態學の最も著名な解釋者クスレーは、植物生態學の最初の講演に「植物と其の環境」を試みたやうに、「人類と其の環境」は人類生態學即ち地域調査の本質である。此の二つの研究の發達は、共にほゞ時代を同うし、イギリスに於ては、二つながらゲッデス教授から創始された。植物生態學に對しては、彼は數多の植物學者の努力を此の新しい分野に向はしめ、人類生態學即ち地域社會學に對しては、彼自から其の運動の主腦者となつた。……」

次に、ファッグは初めエヂンバラに於て是等の事業を始め、今はフランスのモンペールに於て特殊學校を經營してゐる。ゲッデス教授の消息によつて、フランスの人文地理學者エリゼ・ルクリュエと其の甥ポール・ルクリュエとの交遊關係から、『教育の爲の地理的環境の利用』の著者マベル・エム・パーカー女博士や、都市計畫者としてのアーバー・クロム・ペー教授（前出）の消息を語り、ファッグはなほ

「現代の地域調査運動は、ゲッデス老教授によつてのスコットランドとフランスの長き知的協力の結果である。



……此の文化運動に於て、ゲッデス教授はフランスの大きな社會學者ルブリーの影響を受けた。ルブリーの事業と社會科學の學派は、其の弟子たるドゥモランとトゥヴィユによつて建設された。イギリスに於ける地域調査へのルブリーの影響は、實にゲッデス教授の手によつて深大となり、彼の地域哲學の解釋と其の修正と其の發達は仕遂げられた。ゲッデス教授と其の仲間のヴィクトル・ブランフォードとは、ロンドンの社會學協會を創設し、殊にゲッデス教授は、地域調査運動の最も主な部門たる都市計畫の實際的領域に、ルブリーの地域哲學の精神を取入れた。……」

我々地理學徒としてこゝに最も注意しなければならない事は、ゲッデス教授の仲間に二人の地理學徒の與つてゐる事である。即ちゲッデス教授のグループの中に、此の地域調査運動に直接寄與した二人は、ロバート・ミルと故ハーバートソン教授とである。殊にハーバートソン教授への影響は深く、同教授がエヂンバラからオックスフォード大學に移つて、そこに地理學の講座をつくと共に、ゲッデス教授の調査の理想も、同教授によつて移植された。而して其の學風はロンドン大學とウェールズのアベリストウイス大學によつて繼承され、雜誌『地理學教師（今の『地理學』）もハーバートソン教授によつて創設された地理學協會の發行である。アベリストウイス大學に於けるフルール教授（最近マンチェスター大學に移つた）は、近年殊に地域調査の方面に努力した。

ファッグの講演には、尙ほ多くの學者、殊に多方面の學者が、此の思想運動ともいふべき地域調査事業を、地域

調査協會の設置までにした經過を細々と述べてゐる。それはイギリスの事例であるから、茲に省くが、讀者は以上引用したファッグの言説だけに據つても、イギリスの地域地理研究の精神は、單なる専門科學としての地理學的研究のみに依據してゐるのではなく、實に人類生活の改善に寄與しようとする大きな思想運動に深く根ざしてゐる計畫に基いてゐる事を理解されたであらう。

翻つて我が國の地域地理研究の傾向を見るに、科學的地誌又は地誌學なる研究方法が主になつてゐて、それが我が地理學界を指導した風靡してゐる。殊に地方の若き教育者等の地理學的研究に進まうとする登龍門としての文部省教員檢定の地理試験問題の傾向にもそれが現はれてゐるから、地方の若き教育者によつて研究される我が國の地域地理研究にも、地誌的研究方法が最も重要な領域を占めてゐる。勿論我々は、所謂科學的地誌又は地誌學の研究方法を否定するものではなく、其の研究方法来に大に學ぶべき事あるを認むるものであるが、たゞ此の技術的な研究方法のみでは、生きた地域精神の把握を脱逸する恐ある事を遺憾とするものである。

最近地方の師範學校や中學校等に奉職してゐる若き地理學徒の中で、長い年月を日々觸目してゐる地域の地理學的研究、即ち郷土地理研究に従事してゐる熱心な人達の中には、從來の科學的地誌又は地誌學の研究方法だけでは、生きた郷土社會の真相を研究し得ない事を自覺し始め、其の結果、之を中央や地方での農會の農村調査方法や、一、二の社會學者の調査方法などによつて、其の研究方法的な欠陥を補はうとする傾向が著しく増進して來た。檢定試験



に合格しようとして地理學的研究に没頭してゐた若き小學校教員の間にてさへ、文檢受験の目的を放棄して、眞に郷土の地理學的研究を樂まうとする學徒は、從來の科學的地誌又は地誌學の研究方法のみに満足せず、爲に眞の郷土社會の地理學的研究を、何等か他の研究方法によつて補はうとする機運がボツ／＼動きつゝある。此の二つの現象は、我々地理學の研究と教育に携はつて居る者の見逃す事の出來がたい思潮であつて、かゝる地方學徒の眞の要求が何處にあるかを顧み、それに對して反省し協働し建設してゆく事は、日本の地域地理研究の將來を、今日よりも自由にまたより眞劍に築き上げてゆく所以であると筆者は信じてゐる。

之を要するに、地方の地理學的研究の完成は、單に從來我が國に行はれてゐる近代地理學的技術としての科學的地誌又は地誌學の研究方法のみによつては、地域哲學の精神に觸れ得る事が出來ず、また人格的に着色された自然即ち郷土社會を把握し得る事が出來ない。今日地方の若き學徒が、從來の研究方法のみに満足しない叫びは、やがて大きな力となつて全國に現はれて來るであらうが、中央集權的な我が國の學界また我が國の教育界は、逸早く、此の聞えざる地方の聲に耳を傾けつゝ、中央の學界にまた教育界に、イギリスの地域調査運動のやうな思想運動に依據した研究方法が鮮明に樹立され、それに參加する學者並に教育家は、必ずしも地理學者のみではなく、前に述べたイギリスの學風のやうに、自然科學者も人文科學者も、共に人類生活をよりよくするが爲に、此の地域調査運動に寄與する目的を以て、新しい結合が創設されたならば、清き溪川の流のやうな地方の若い學徒の要求も、こゝに

集大成して、一つの大きな思潮にまで導かれる事は決して夢想ではないであらう。

こゝに思ひ出さるゝは、大戰後にドイツで、ベルリンに創設された科學的郷土學研究會の事である。前に研究方法の中に引用したシュプランガー博士の『科學的郷土學の陶冶價值』は、一九二三年四月二日に開催された際の講演で、此の學會の創立の際に、シェーニツヘン博士のなされた挨拶に徴しても、其の覺悟が知られるのである。

即ち一面には自然科學の姿、また他の一面には精神科學並に歴史科學に近い姿を有つてゐる郷土學を、綜合觀察の方法によつて、完全なる妥當性を見出す爲に郷土に觸れる事を企て、歩き觀且つ聽く事によつて體驗を深めなければならぬとされたが、計畫的に二ケ年に亘つて開催する講演は、着々實蹟を擧げつゝある事は、昨夏、日獨文化交換の使節を帯びて來朝されたシュプランガー博士の語る所であつた。のみならず、十年後の一九三三年の十周年記念講演として、ウィレー・ホツペ博士によつてなされた「郷土學と國家」には、此の學會の成功に就いて、

我が學界が困難な期間を背後に控へて十年間やつて來た事は誇るに足りる。我が學界が健全に成長した事は、郷土學に正しき方法を養つたからである。

といつてゐる事に徴して明かである。なほ注目すべき事は、「郷土と民族性の不可分である」事を述べ、「郷土學の強き力は、文化政治的課題である」事に言及し、「郷土學は狭い研究室、大學の講義室や教室のうちに拘束される事を許さない」としてゐる。



支那事變以來、我が國の政治的指導者によつて高調されてゐる國民精神總動員運動に對して、各地方からの要求は、其の内容の充實且つ具體的な事にあるが、かゝる社會情勢に徴しても力強い指導原理によつて、地域社會の構成の更新を意圖する事は、いふまでもなく、我が國目前の緊急事である。即ち力強い指導原理は、國民生活の現實の中に躍動して生命に觸れるものでなければならず、その樹立は、生きた郷土の體驗の綜合の集大成でなければならぬ。

(註) 地域社會の構造を明かにして、これを國家社會改造の指導理論の確立に役立つやうに體系付けるためには、以上に述べたやうな研究方法に依據した業績を、如何に國策に寄與すべきかの考慮が常に拂はるゝ事が必要である。それには地域研究に就ての計畫の實例を歐米諸國に求めつゝ、之を東洋の文化の特質に即したものに創造する事が目標とならなければならない。最近我が國の都市計畫が、更に國土計畫としての地域計畫に進展しやうとしてゐる事、また上海の新都市計畫への我が國の専門家の關與する事などが、一層其の方向を裏書してゐる。ドイツの「居住事業」Das Deutsche Siedlungswerkの如き、他山の石として顧みらるべきもので、それが、一、人口政策、二、國家食糧及び原料經濟、三、労働の整理、四、經濟の整理、五、經營立地及工業施設を主題としつゝ、種々の計畫殊に農村計畫と都市計畫を主眼としてゐる事を注意すべきである。しかもそれが國民大衆に理解させるために、指導理念を民衆化した繪畫によつて補はれてゐる事は、我々の取つて範となすべき所である。

### 三 島國日本の風土的特質

#### 一 風土の概念と其の考察方法

「風土」なる言葉、これは我々の常に親しみ深く感ずる言葉である。我々の眼前に展開してゐる此の風土は、先史時代から有史時代に、有史時代から現代に、更らに現代から將來に亘る永劫の間、我々日本人の生活と不可分の關係に置かれてある環境である。

我々はこの眼前に展開してゐる風土の特質を述ぶるに先ち、此の言葉に含んでゐる實質を明にしなければならぬ。自分の觀る所では、「風土」とは我々の生活と密接なる關係を持つてゐるあらゆる自然界の諸現象——地質も礦物も動物も植物もはた氣候も——夫自身と、更らに是等の自然界の諸現象が我々の生活との接觸交渉によつて、人文化された文化現象をも包含する。即ち言ひ換へれば、

風土とは人類社會の環境としての自然界夫自身と、其の自然界の生み出してゐる事象の人文化されてゐるものが、複合して、我々の周圍に實在してゐる總量をいふのである。



自分の手許にある著書で、最もこれを簡明に言ひ表はしてゐるものは、アメリカ合衆國の地理學者ザウアー教授の「風土形態學」The Morphology of Landscapeである。即ち以上の風土としての諸現象を左の如く解釋してゐる。たゞ、自然的風の中に動物を逸してゐるのは疑問である。

**自然的風土** 自然的風土の因子は、地球夫自身の構成とそれを包む氣象とが其の重なるものであつて、それに次いで植物がある。それらのものが、永い年處を經、かくして生れた風土の諸形式は、地表到る處に、氣候・土地(表面・土壤・流水・礦物資源)・海洋と海岸・植物となつて表はれてゐる。

**人文的風土** 人文的風土は、永い年處の間に、自然的風土が人類の持つてゐる文化と接觸交渉した結果、こゝに人口の密度と移動・住家の間取と構造・生産物・交通となつて表はれてゐる。

しかしこれらの自然的風土及人文的風土の諸要素を、全一體として、我々が觀る場合に、それを如何に言ひ表はす事が最も綜合的であり、また最も實證的であるか。これに就いて、ザウアー教授は「地域的實在」Areal Realityといふ言葉を用ゐるが、これは我々を圍繞してゐる自然的風土及人文的風土の有機的關係の現實を最も具體的にした言葉であると思ふ。

自分はなほ「風土」なる概念を明確にする爲に、二人の他の學者の所説を茲に述ぶる事にする。  
イギリスのホワルスは『地理的環境の研究としての我等の周圍の世界』なる小著に、

人類との關係に於ての地理的環境なる言葉は、その生活様式に影響を與へる土地の諸狀態——土地の形狀が、平野・丘陵・山地であり、土壤の種類が豐沃・瘠薄・適濕・乾燥であり、位置が半島であり、大陸であり、また沿海であり内陸である——のあらゆる場合は勿論、その氣候・植物・礦物資源から引いて國境をも包括しておつて人類の社會的並政治的狀態、その經濟的活動、その心理的並身體的發達にまさへ影響を與へるすべての狀態をいふのである。

といつてゐる。それによれば、我々の親み深い「風土」なる言葉は、今日に於ては、「地理的環境」なる術語に包含される諸事象を意味してゐるから、**風土**とは即ち地理的環境であるともいひ得るのである。

またドイツの人文地理學者ラツツェルの流を酌んだアメリカ合衆國のセムブル女史の著『地理的環境の諸影響』の卷章「歴史に於ける地理的要素」の中に

地球が人類を育て之に仕事を與へ思想の方向を示し、困難に遇はしては其の心身を鍛へしめ、また航海や灌漑の問題を提供すると同時に、其の解決の暗示をも與へてゐる。

と前提し、山地・河谷・高原・沙漠・海岸地方に於ける住民への地理的影響を例示して、我々は自然征服の方法に就いて誇張的に騒ぎ立てゝゐるが、自然は却つて黙々の間に人類に絶えず影響してゐる。我々は今まで人類發展の方程式の中に地理的因子の存する事を閑却してゐた。



といひ、

「歴史の外的環境としてのあらゆる地理的諸影響は、これを一體と看做す」と共に、更らに「進化的見地」より之を解剖し、計量しなければならぬと主張し、其の「歴史への地理的關係は進化する」に従つて、或時期には必要であつた外的環境も、他の時期には反つて有害なる事もあるといつてゐる。氏は是等の地理的影響を大別して、

一、身體的影響

二、心理的影響

三、經濟的社會的影響

四、民族的移動

と分つてゐる。即ち氏は風土即ち地理的環境を、人類への諸影響から考察してゐるのである。

以上述べた處を要約すれば、

風土は我々の環境としての自然的並文化的現象が複合してゐる地域的實在である。

といふべきであらう。

日本の風土の考察に就いては、如何なる方法に依るべきであるか。自分の觀る所では、二つの大きな方法に依るべきものと思ふ。其の一は風土を構成してゐる諸要素即ち自然的風土並人文的風土を構成してゐる主要要素を通じて、其の風土的特質を考察する事であり、其の一は、我々の祖先が如何に此の風土的現象を考察してゐたかを研究

する事である。前者は人文地理學・土俗學の研究範圍であり、後者は文學史・風俗史・文化史の研究範圍である。自分の年來關はつてゐる所は、人文地理學であるから、其の立場から我が國の自然的風土並人文的風土の主要要素に就いての所見を述べたいと思ふ。これは將來人文地理學の一つの部門であり得るし、また文化史の基本的研究部門として史學研究の一つの部門となり得べきものであらう。後者に就いても、從來あまり我が國に於て研究に着手されてゐないやうではあるが、自然的風土並人文的風土の主要要素に就いての人文地理學的研究と相並んで行はるべきものであると信ずる。此の方面に對して、破究せらるべく希望してゐる點を述べれば、奈良朝とか平安朝とか鎌倉時代とか江戸時代とかに於て、如何に日本の風土が、各時代の精神生活並經濟生活に交渉してゐたかを種々の方面から立證されたい事である。

我が國の風土的特質として、最も重要な事は島國であることであり、しかもそれが、大陸に近接してゐる所謂陸島 Continental Island であることである。我が國はもと亞細亞大陸と地續であつたから、其の生物中にも大陸的特徴のあるものが遺存して居るばかりでなく、現に大陸氣候の關係、民族の交通、文化の傳播にも比較的接近な地理的位置にある。例へば朝鮮との間には、對島・壹岐があり、琉球との間には奄美・吐噶喇の諸島が、點在してゐて、その間の航通の足掛となり、外に日本海中には隱岐・佐渡の島々が飛石のやうにあつて、その中間に



能登半島が突出してゐるなど、日本海の航通には少なからず役立つたことと思はれる。内田博士の『國史總論』(三〇頁)に

出雲の邊は遙に韓半島と相對し、彼の地との交通が容易であつた爲めに、早くから交通が開けて居つて、従つて早く土地も開けたものと見えます。早い時代に於て日本海沿岸の海上の交通は、割合に開けて居つたものである。阿部比羅夫が東北邊を經營したのも、船で行つたのである。今の北海道のことを渡島ワタリマと申し、中古之を陸奥に屬せずして、出羽國に屬するものとして居つたのも、矢張り北海道との交通が、日本海沿岸の方よりして早く先づ開けたからでありませう。

とあるのは、日本海の航通關係を歴史的に證據立てられる爲に述べられたのであるが、昔からかゝる航通關係を利用してゐる人達は、自ら日本海を中心としての風土にも順應した事はいふまでもない事で、此の海を環らしてゐる地域の住民は、或程度まで同様な環境に順應した關係上、其の經濟生活は勿論精神生活にもそれが反映してゐるものと見て差支あるまい。

日本海を流れてゐる環流のあることは、先年朝鮮總督府に居られた和田博士が、元山から多くの投壘をしてそれを實證されたのであるが、元山で流した壘が青森縣の十三瀨に流れ付いたといふ事實を聞いた事もあつた。これによつても、此の環流が航通にも漁業にも利用された事が想像するに難くない。吉田博士の『越後の歴史地理』(二〇

三頁)にも、また、

現に越前の敦賀の如きは、古來不易の交通點で、加賀・能登へかけて、千年以前の新羅や高麗時代の古事を語るものであります。欽明天皇紀に、五年、佐渡が島の御名部の崎へ、肅慎人が渡來し、暫く逗留した事を書き留めてある。一千三百餘年前の話で、此の肅慎人はミシハセと呼ばれ、今の北海道、當時で越の渡島といはれたところにも渡來して、殆んど一部の地を占領して居たと思はれる。

とある。これも日本を環つてゐる地域の航通關係を述べたものであるが、自分はこれをも、日本海を環れる地域を、一つの風土とし搖籃として、これに順應してゐた諸民族を考へる資料にしたい。たゞ此の風土への同化作用 Assimilation を實證し得る資料を、これ以上こゝに提供し得ないことを遺憾とするものである。同化作用を實證し得る確證は、將來日本海を環れる諸地域の氣候・生物及びそれを利用しての産業・民家・漁具・農具等に関する地理學的及土俗學的調査の遂行によつて、蒐集せられた研究資料の整理によつて明かにされるであらう。

(註) この日本海岸地域を、風土の共通地域とする基準となるべき事項を擧げて見ると、中央氣象臺で用ゐてゐる氣象區域には山陰道及九州北部を第四區とし、北陸道及奥羽西部を第六區としてゐる。又是等の日本海岸地域が、秋から冬にかけて北西季候風帯に屬し、従つて其の季節には何れも積雪の多い事は人の知る處である。自分は、日本海岸の秋田の出生であるが、昭和二年の五月、山陰道の鳥取に旅して、其の雪解けの季節の風土的印象と農民の風俗などを見て、郷土に歸つたやうな印象を得たのであつた。次いで同四年の春五月、信濃から越後に越ゆる柏原の小さな盆地——有名な俳人一茶の生れたところ——の風



土的印象は、信濃の乾いた風土的特質が、こゝに來ると忽ち霧の多い日本海岸の氣候を示すばかりでなく、野良に立つてゐる杉の木立、田に耕してゐる農夫の風俗など、全く故郷に歸つた感があつたから、かゝる地區は行政上では信濃國であるけれども、風土上では日本海岸の地域である。この印象を同車中の越後の人に聞いたら、全く越後と同じであるといはれた。かくの如く、風土を構成する重要な要素は、地形と氣象との抱合から生れる風土であり、風土が植物と抱合してこゝに植物生態を現はすのである。これが即ち自然的風土である。其の間に定住する人間の生活は、此の自然的風土に順應しつゝ自然物を利用して其の生活を営み、かくして永い年處を経てこゝに人文的風土を産み出す。だから風土のはつきりした認識は、先づ自然的風土の學的基礎に立たなければならぬ。而して自然的風土は季節と生物との關係を研究する花曆學 Phenology を基調としなければならぬ。即ち地域的氣候學 Regional Phenology は自然的風土の基本である。

## 二 日本の風土的特質としての瀬戸内海地域

瀬戸内海地域は、其の自然的風土からしても、また人文的風土からしても、我が島國の一つの大きな類型的地域であるばかりでなく、實に世界に於ても著名な類型的地域で、外人は「日本地中海」Japanese Mediterranean Sea と呼んでゐる。北は高原性の中國山脈が半島形をなして東西に連り、以て日本海岸地域と相隔て、南には比較的高峻な山地を中軸としてゐる四國島塊が同じく東西に横はりて、太平洋との間を分つてゐる。西は九州島によつて、また東は淡路島によつて、此の瀬戸内海地域は、自から特色ある内海地域をなしてゐる。即ち此の内海地域は、其



第一圖 瀬戸内海地域——花崗岩分布圖

の中に島嶼の碁布羅列するものがないとしても、四方陸地に包圍されてゐる點に於て、一つの纏つた内海地域である。今、内海に就いてセムブルの所説を顧みるに、

内海は近接せる隣保的集團乃至文化的事業を絶えず交換する場所を構成し、其の全體を高め且つ統一するものである。

然るに我が瀬戸内海地域は、あれ丈の面積に七百五十の島嶼が散在し、風土的特質を表現してゐると共に、北から南にまた東から西への航通にも役立つてゐる。島嶼夫自身が半農半漁の生活をなし得る好適な自然的風土をも提供してゐる。

### 一 自然的風土としての特質

瀬戸内海地域は、所謂地溝帯で、もと中國・四國と共に陸續であつた。所が地質時代に地體構造の變動で一上一下し、終に現狀を呈するに至つたもので、現形は地質學上比較的新しい時



代の所謂新生代の第三紀に出現したものと推定されてゐる。而して地質・地形の關係から見ての此の地域の風土的特質と稱せられてゐるものは、内海中の島嶼は勿論、中國側にもまた四國側にも最も多く分布してゐる花崗岩の地形に伴へる景觀である。即ち島嶼としては小豆島の寒霞溪の如き其の最も尤なるもので、志賀重昂氏は、『日本風景論』に於て 既にこれを紹介し、また脇水理學博士は、『名山と勝景』（大正六年十月に開かれた史蹟名勝天然記念保存協會第七回講演）に於ても、これを紹介されてゐる。即ち同博士は、其の時に發表された日本名山番附に於て、寒霞溪を勸進元（元）に上げられてゐる。

（註）脇水博士の「名山と勝景」の分類は、瀬戸内海地域に限らず、日本の自然的風土が人文的風土を生み出す重要な一つの要素としての山地を理解するに最も適切なる論旨であるから、こゝに其の一節を摘記する事にする。同博士は、「人に知らるゝ主なる原因によつて分てる名山の種類」として、左の三類を挙げ

第一類 史蹟によつて名高きもの及神祕的名山

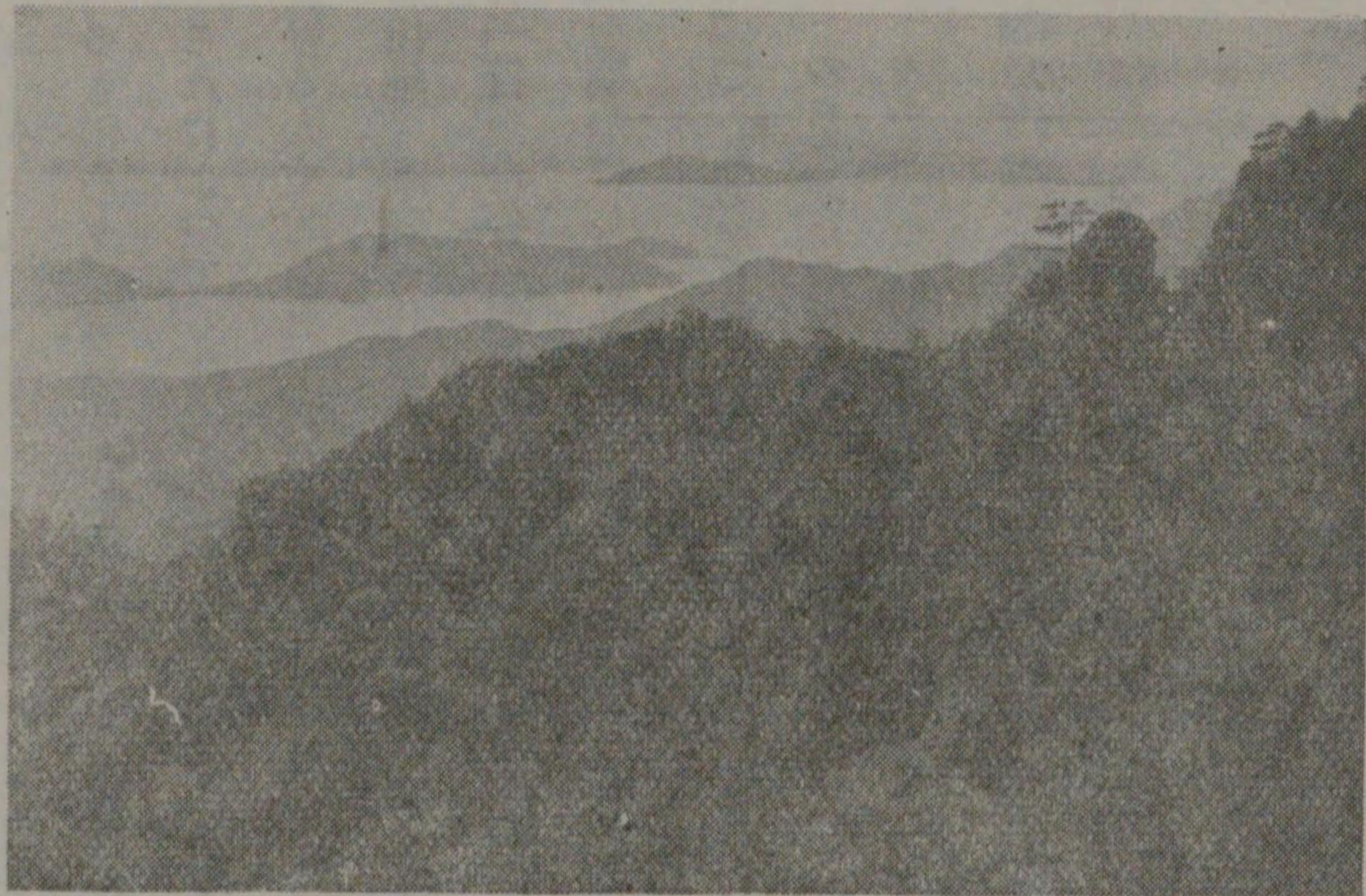
第二類 勝景によつて名高きもの

第三類 自然科学上名高きもの即ち自然地理學・地質學・火山學・植物學等の見地よりして著しとなすもの

更らに、博士自からの見解から

名山の要素（資格）——名山分類標準

- 一、絶對的及對比的の高度
- 二、山の貌（整形美と奇景美）



第二圖 寒霞溪

二 日本の風土的特質としての瀬戸内海地域

- 三、地理的位置
- 四、險易及登山の難易
- 五、溪澗美
- 六、森林美
- 七、人工美
- 八、四圍の狀況
- 九、地理學的興味の多少
- 一〇、歴史的及傳說的興味の多少

我々は、脇水博士の此の名山の要素としての分類を標準として、更に寒霞溪の勝景に就いての記述（『瀬戸内海航路案内』を讀まう。

絶勝には表十二景裏七景あり、何れも途中に於てこれを見るを得べく、山巔四望頂は、海拔五六〇米、數町の廣場にして馳望千里、南に阿讃の山水あり北に播備の域あり、蒼海杳渺



壯觀を極む。これより東に轉すれば道南に下る。所謂裏景に就くものにして、景の奇峭なること却つて表景に勝るものあり、峽景の各景を経れば道は自から元來し山麓に歸すべし。

これによつて、我々は瀬戸内海地域に於ける自然的風土としての島嶼に於ける山嶽美が、如何に瀬戸内海地域に於ける人文的風土の要因をなしてゐるかを理解する事が出来る。小豆島の寒霞溪ならずとも、あらゆる島嶼に於ける山地の高度と其の形貌は、到る處に夫々の景觀の要素となつてゐる。我々は更らに明治四十四年の春、太平洋畫會一行の合著『瀬戸内海寫生一週』に收められた小杉未醒畫伯の瀬戸内海島嶼圖(註)を觀ることによつて、其の大觀を明かにしやうと思ふ。

(註) 此の瀬戸内海島嶼圖は、畫伯は當時主として四國側を廻遊された關係上、中國側の景色に疎き憾がある。即ち尾道・宮津のあたりに瀬戸をつくつてゐる描寫を缺いてゐるし、音戸の瀬戸は海原のやうに描かれてある。嚴島の大鳥居を四國路に向けてあるのは故意の惡戯か。

瀬戸内海地域の自然的風土として、山地に次ぐものは瀬戸内の海である。海は大小の島嶼の散在によつて、所謂瀬戸をなしてゐる所が多く、海濱の地形にも崖があり磯があり灣がある。それに従つて、沿海に深淺あり出入がある。これらの陸海相觸れる處、景觀到る處特徴を現はすばかりでなく、また漁利・航運の基礎ともなつてゐる。今セムブルの海岸地の住民に就いて述べてゐる所を見るに、



第三圖 瀬戸内海島嶼圖

總ての地理的境界の中で、最も重要なものは、陸と海との間にある境界即ち地理的性質に於て、地球表面の二つの重要なもの、間の過渡地帯である。休む時なき海の強い侵寇を受け、これに抵抗する花崗岩や砂岩の硬軟に連れて様々なる幅を有してゐる此の過渡地帯には、陸と海との争鬭の傍が宿つてゐる。……航海術が發達し、人間の活動が陸から海を越えて他國に及ぶに連れ、それは海陸兩者を繋ぐ門戸となり、同時に探險・植民及貿易の出口となる。障壁と門戸、此の二つは海岸が歴史に於て常に演じた役目であつた。海上の航運は、今日では非常に盛んになつてはゐるが、地球上の海岸はまだ大部分其の住民に取つての障壁であつて、決して出口ではない。海岸は中間地帯として其の居住者に強い印象を與へる特殊な居住地である。海岸地・沿海平原・海岸都市或は海岸民族・海岸國民・海岸植民地と言ふ數多の言葉は、海の影響を強く受ける地、人種或は居住地といふ感銘を我等に與へるものである。海岸は「海岸線」といふ古い言葉で言ひ表はされるやう



なものではなく、測り得べき廣さを有つた地帯である。此の地帯は自然的に種々の特色を有してゐるが、人類學の意味に於ける本地帯の特性は、歴史の時期の異なるに従ひ、異なる場所に於て、其の地帯の外縁及内縁を利用してゐるので明かに示されてゐる。

我々は此のセムブルの所説を實證し得る瀬戸内海地域に於ける具體的な事例は、このやうな研究のまだ行はれてゐない我が國としては、新に實地の踏査によつて蒐集するより外に途はないが、島國としての我が國に於ては、瀬戸内の自然的風土が、このやうな海岸地の住民としての人文的風土を生み出すに最も適切な地域であり、また生み出してゐるのであると信ずる。

なほ此の地域の自然的風土としては、其の氣候的特質を挙げなければならない。此の地域は夏季に於てこそ、暑熱にして雨が少な過ぎる嫌がないではないが、一年を通じての氣候は中和であつて、植物の發育爲に宜しく、それが夙に農業の發達をも可能にし、従つて住民の定住をも可能にした。ドイツのヘルバツハの名著の「風土心理學」の所説に適合すべき事例も、また必ず此の地域の風土的特質が生み出しつゝあるであらう。是等の研究も未だ我が國に行はれてゐる事が少ないから、ここに其の事例を擧ぐる事の出来ない事を遺憾に思ふ。

## 二 人文的風土としての特質

瀬戸内海地域が人文的風土として、我が國で最も類型的のものである事は我が國の歴史を通讀してゐる誰もが首肯する所であるが、尤も此の地域を人文的風土として認識しやうとした論者は從來極めて少ない。日本の歴史地理學者としての吉田博士は、此の地域に對しても研究を進められ、其の論著としては、已に「瀬戸内海權史論」なるものを公にし、これは、同博士の遺著「日本歴史地理之研究」の中に收められてゐる。其の一節に

瀬戸内海に生れ、瀬戸内海を往來して京都に客死す、其間見は最も瀬戸内に熟せり、感懐の此間に迸發するもの大作短篇多く其詩集に存す、亦以て證すべき也、而も着眼の瀬戸内海史に及ばざるは惜むべきの限ならずや。惟ふに山陽の「一種東方相研史」弟子鴨里の補篇を併せ、皆是れ支那史の載記、世家の體に因るのみ、故に瀬戸内と云ふ如き地理上の想を以て足場を立つる無きも當然歟。但彼の軍書野史家が奥羽中國九州四國と地理上、關係より種々の戦史を編述しながら、曾て瀬戸内に及ばざりしは是れただ怪むべし、水陸の差こそあれ、其用兵の術たり交通の路たり人間死活の地たるに於て、土壤波浪の異なるを見ざる也。又之を動植金石の産、以て人生の利を爲すものに視るも、水陸の大差之なきに非ずや。關東には近年「利根川圖誌」といふもの刊行し、卑俚ながら利根川沿岸の事態を録せり、關西には一の瀬戸内海誌あるを聞かず。是等の情態は之を推究するに世俗眼が常に陸に遍くして海に疎かなるに由る。抑又陸の形勢は語り易く海の形勢は論じ難きに由る歟、而も今や邦人其口を開けば輒ち曰ふ、海國なり海島王なりと、吾は論じ難き所に居ると雖、終に之を措く能はざるを奈何せ



ん、既往は問はず、爾今は當に大に海洋を論すべきあるのみ。

筆者を以て之を觀るに、頼山陽が瀬戸内に生れながら瀬戸内に就ての論著のなかつたのは、風土に就いての意識が乏しかつた爲であつて、史家ではあつたが地理學者でなかつた爲である。然るに吉田博士は史家でありまた地理學者であつた。同博士は已に『大日本地名辭書』の大著を公にし、なほ早く雑誌『歴史地理』に其の研究を公にせられ、世間には歴史地理學者として知られてゐる。しかし、吉田博士は「歴史地理」の研究者として知られてゐる多くの他の研究者とは自から趣を異にしてゐた。吉田博士以外の日本の「歴史地理」の多くの研究者は、歴史的事件即ち歴史的事實に關係ある地名の位置の考證が主であつた。従つて「歴史地理」なる本質的な學的内容は我が國には誤解され勝ちであつた。これに就ては、先年内田博士（銀藏）在世中、此の愚見を述べ、同博士も從來の日本の「歴史地理」と稱するものは、歐米の所謂「歴史地理」と内容を異にしてゐるものであるといふに意見の一致を見たのであつた。これは從來の日本の「歴史地理」研究は、殆んど歴史家によつて研究された結果であつて、「地域に即した史的過程の究明」が等閑に附せられたからである。

地理學の一部としての歴史地理は、人文的風土としての地域的認識を明かにする爲の史的研究でなければならぬ。此の點に就いて、吉田博士は自から他の「歴史地理」の研究者と撰を異にして地域的認識を有つておられた。筆者は同博士在世中、同じく早稲田大學に居つた關係上、屢々親炙して教を受けてをうたが、博士が逝かれた後の

今日、最近に歐米の學者が「人文地理學」の主要點が、人類經驗 Human Experience を實證するにあるといふ論議を見るにつけ、吉田博士が歴史地理學に一隻眼を有しておられた事は、同博士の半生は、學窓にをらずして、幾多の世相の間に生長されたから、其の識見も多くの史學者が學窓のみによつて學び得たものと全く異つた體驗から生み出された結果に外ならない。日本の地質學の建設者としての小藤博士は、地理學者としても最も本質的な資質を有つておられた人であつたが、大正十二年の關東大地震後、此の地震の因果に就いて自から踏査に目もこれ足らなかつた傍、此の地域に就いての地理的文献の涉獵をも怠らず、従つて利根川流域の研究に就いての吉田博士の論著をも精讀されたが、小藤博士は地理學者としての吉田博士の識見に感服して、「吉田博士をして歐米の學風に觸れしめたら更らに大を成したらう」といはれた事にも立證される。

筆者は、昭和三年の夏、吉田博士の郷國越後の人口調査の公務を帯びて出張した際、同博士の令弟にして「越後史」の研究に専念し、また『越後史料』を刊行しておられる高橋義彦氏を訪ねて、

吉田博士の歴史地理の研究法が、現に歐米の歴史地理研究の眞神と合致して、自然的風土に育まれた人文的風土の認識を見出さうとされた着眼は、同博士の體驗之を然らしめたものではないか。

と質したのであつたが、果せる哉高橋氏によつて、

吉田博士の此の學的識見は、博士の先考の國學に就いての造詣と、地主としての家庭に生れた博士が、少年時代



に屢々耕地の検分、水腐地の改修等に關係して、自然的風土並に人文的風土たる地域的實在に就いて實證的研究を積まれた事が、かの自然科学者が其の實驗室に於て日々實驗を積成したと同じであつて、其の郷土たる安田に就ての研究が、「安田史料」として高橋氏が秘藏されてゐる事を明にした。

かく郷土の自然的風土から人文的風土を實證した吉田博士は、其の體驗によつて、日本の歴史地理の研究に着手し、また瀬戸内の歴史地理に就いても、頼山陽の研究方法を疑はれたのは、吉田博士には地域的實在に就いての體驗はあつたが、頼山陽にはそれがなかつた差異から來るものと斷じて誤ないと思はれる。高橋氏も、

亡兄の利根川流域の研究は、實家の小作地が信濃の千曲川縁にあつた水腐地に就いての體驗を延長したものである。

と語られた事によつても、これが實證されると思ふ。たゞ吉田博士の此の學風は、史家の中に繼承者がなかつた爲にそれが發展しなかつた事は遺憾である。

故に日本の風土への眞の認識は、これからの人文地理學者の手によつて更らに新に建設さるべきもので、ザウアー教授の所説の如き基準によつて着手されなければならない。日本の從來の歴史地理的研究が風土の認識を欠いてゐたやうに、日本の從來の地理學的研究も、また此の風土の認識を體得しての研究を基準としての研究が少なかつた。だから將來なすべき日本の風土の眞の認識は、其の歴史的研究と地理的研究の協働によつて、完成されなければならぬ。

ばならない。「風土」なる言葉は、『風土記』以來傳統的に親しみ深いものではあるが、此の風土の學的認識に對しては我々は新に努むる所がなければならない。

### 三 祖先の眼に映じたる瀬戸内海地域

此の瀬戸内海地域の人文的風土の特質を述ぶるに先ち、此の地域の人文的風土が、我々の祖先の眼に如何に映じたかを顧みる事は、我々の人文的風土の考察を豊かにする上から必要な事である。故にこゝでは其の特質たる景觀と航海と港に就いての文献を適じて、祖先の風土觀を探ぐる事にしよう。

景觀 に就いては、

有野有川有列峯 村邊花柳海邊松 平生性癖耽風景 到處逢人問舊蹤 攝津國路偶作『東行日記』

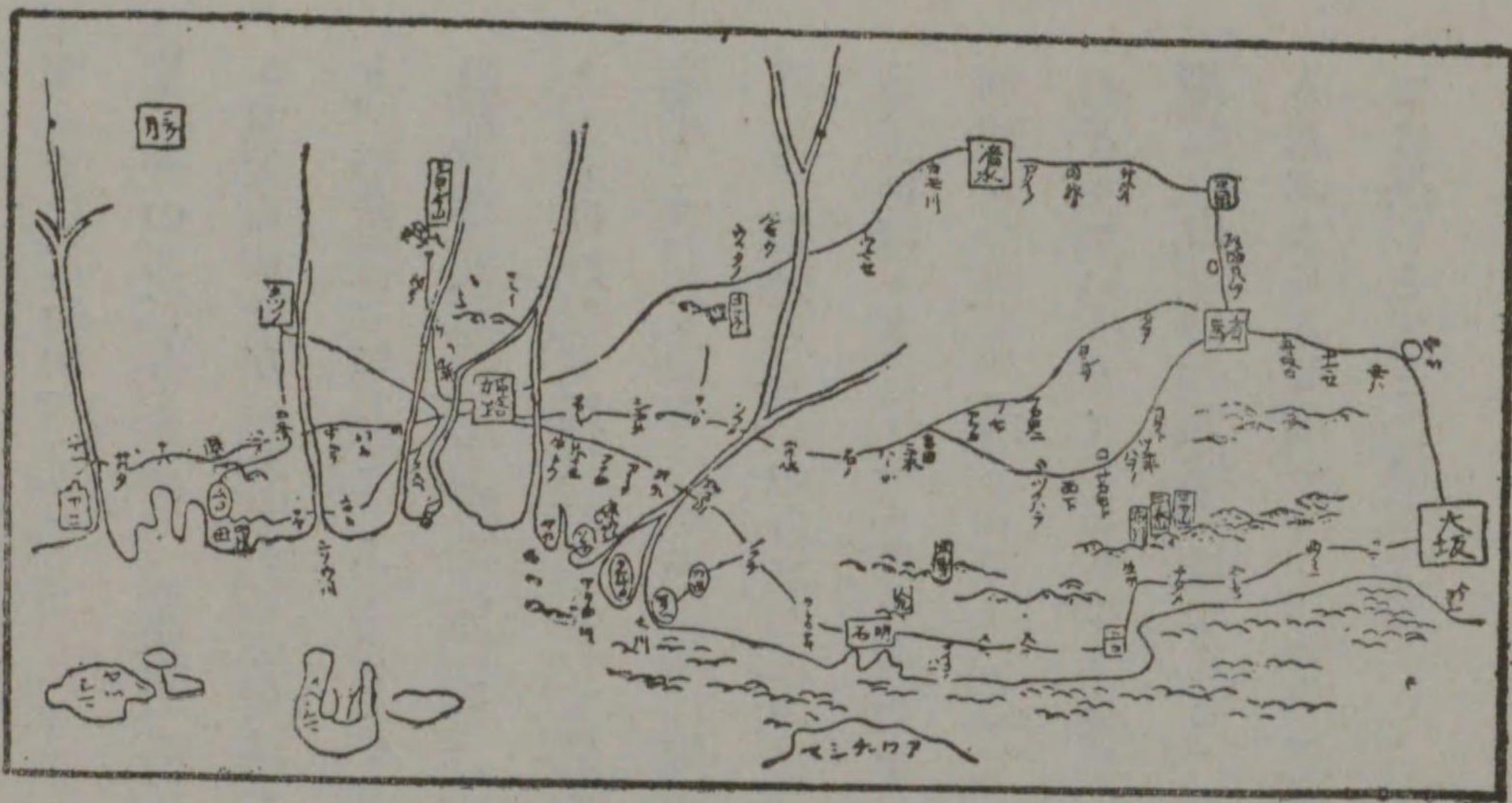
これは岡山の儒者松井先生が播州から江戸に赴かれる途中、播州から攝州への途中の風土を詠じたもので、漢詩ではあるが、比較的によく此の地域の風土の特質——風化した花崗岩の山地が北の方に連つておつて、其の間を流れてゐる川に沿ふて平野開け、海岸近くには花崗岩から崩解した白砂が連つてゐる。春光を浴びた海邊の松も、野邊に咲いた花も、附近の史蹟と共に、一層の輝きをあらはしてゐる風景——がよくいひあらはされてゐる。此の書



中にある「明麗なる山川」といふ四字も、またよく瀬戸内の風土を要約してゐる字句であると思ふ。

二十六日明七つ、傳法に漕出し、順風に帆を揚、すてに海面にのり出す、漸く日出、四方明ぬれば、北には甲山・武庫・六甲・摩耶の山々天を撐へ、兵庫のみさき須磨の浦、しほやの煙風になびく。東南には大和・河内の諸山、泉州佐野岸和田、紀州加田栗島の洲崎より、南に箱の島あり、追門はなはた近く見ゆ。向ふには淡路島・繪島の磯島・尾崎西東に横はり、次第々々に近くなる。前後左右遠近に大小の船數十艘、風帆颯々として算を亂して漕つらぬ。眺望の景筆にも盡がたし。須磨の浦に到りし所、風俄にやみけるゆゑ、一、谷の汀に船をとめて風をまつ。人々これを幸に小舟に移り陸に上り、須磨の里綱敷天神より光源氏や行平の舊迹を尋ね、重衡の生捕られし所として古松の四五本ある邊より須磨寺へ入る。……

時うつれども風なければ汀近く漕ゆく。明石城下の川口へ夜に入て舟をとむ。大阪より海上十五里なり。二十七日夜の八時より、追風を片帆にかけて出、日出て三竿はるかに姫路城・天守閣・書寫山など右に見ゆ。次第に室の湊もちかく、左に家島前に小島多し。東を顧れば明石の浦朝霧深く、淡路島山もかくれぬ。阿波の鳴門は二十里餘はるか東南に隔り、秋天と一色也。漸く赤穂の城も見え、左には小豆島の人家も若干あり、高松侯の預りしといふ犬島は、山上に犬に似たる石あり、南にあたり、八栗嶽・八島山、霧を帯て幽に見ゆ、五六里もあるらし。……



第四圖 播磨路程總圖『播磨巡覽記』口繪

南に當り、讃州高松の城闔夕日に映じて林梢に顯る。海上四五里なりといふ。申の刻より東北のかげに帆を開て漕出す。遙南に金毘羅山・丸龜城を望み、日くれて下津井の邊を過、終夜順風にて走りければ、鹽飽七島・水島灘、二十三里を夢中に過て、伊豫の鼻くりの間に暫船を留む。〔長崎紀行〕

これは、水戸藩の地理學者長久保赤水先生が、明和二年十一月、磯原村の廻船が難風に吹流されて、異國に漂着し、同四年七月、便船で長崎まで送り來られたので、迎に行つた時に大阪から瀬戸内海を通つた時の記述である（先生の水戸藩への出仕、地理志の編纂は此の後である）。我々は此の文字によつて、徳川時代の地理學者が、此の内海の風土を如何に地理的に觀察したかを、知り得るではないか。瀬戸内を中心として、其の四圍に展望される山地の位置及遠近が、かく簡約に書かれてあるものは少なく、これを小杉未醒畫伯の描いた「瀬戸内海鳥瞰圖」(第二圖)に對しながら讀返せば、瀬戸内の風光は、パノラマのやうに眼前に髣髴し



て来るではないか。

室の沖のあたりまでは、船路の右にも左にも小じまいとおほく見ゆ。土人はこれを名つけて四十八島といふとぞ。さて室より此方一里ばかりの程は平山にて、田島多く見ゆ。此の邊はすべて甚見事なる岩ども波うち際に磊落たり。形状種々にして、ふりよき松などもその間にならび植り。……

四月三日辰刻頃、空漸晴わたる。午刻すぎに丸龜をはなれて田口へむけて船出す。西風なるに一里許がほどひらき走りけれど、風負がたくして帆を下して漕ぐ、汐もあしかりければ田の口まではえゆか、申刻すぐるころ下津井に至りて泊る。けふ船路に四國の七島といふをおほたに見る。其の中に與島には船どもおほくかゝりありて近し。須彌島もそのあたりにみゆ。是等にわけ島・しゆつ石島をそへて讃岐につけり。立はじま諸木島、かましまは備前なり。すべて島々の海中に浮みて見ゆるは、盆に水を湛へておもしろき石ども入れをけるごとくにて、何所にあるも佳景ならぬはなきを、船をすゝめながら其をながむるは、状態種々に變化して、譬へばかの盆なる石どもをいろ／＼ととりなをし見るに似たり。此方は動かすして、彼方はうごくやうなるぞおかしかりける。……讃岐の山々島々丸龜の城など、みな眼下に見おろされて、樹色烟を含み、海氣日に映じ、布置の巧なる事名畫も及ぶまじとおぼへて、一望の絶景に精神これがために爽なり。眺入てたちざりがたき程におぼゆれども、かくては果じとてまたゆく。……

午刻ごろ、下津井に歸りて舟出す。下津井のまへをとほりて二里ばかり漕行て、備前と備中の境にいたる。北にあたるは玉島、南は備前の水島なり。こゝより備後の白石までを水島灘といふとなり。水島上下に分る。下なるは人家なし。上の水島には人家すこしあり。またゆきて北のかたに小島三つみゆ。備中のしやく島なり。其先にみゆるを三郎島といふ。南のかたの沖中に廣島見ゆ。又一里ほどゆきて瀬溝といふ小き湊の人家すこしみゆるあたりをいたる。これは笠岡のかたへゆく入海のみなとなり。また一里ほどにして白石にいたる。入口に瀬戸あり、中に白き石のあるによりて白石とは名づけしといふ。

申刻ごろ風なきて潮もあしきゆゑに、こゝにふねこぎいれて泊る。此入口よりみなとの内まで、左右岩石にておもしろき松どもの、わざとおしまげて作りたらむやうにて、古びたるが、大なる石どもの罅隙より、何を培にてかく生長すらんとあやしきまでなるが、いとおほくしげりて、おの／＼状態を競ふ如くにて、とり／＼に甚だ愛賞にたへたれば、あはれ／＼このうちの岩ひとつ木一本にても、京大阪又我名古屋のうちに搬きたるべくんば、いかばかりか諸人のよろこび賞して、其名もたかくきこゆべき。〔筑紫紀行〕一・二二

『筑紫紀行』は、名古屋の吉田重房といふ人が、享和六年、長崎に遊んだ途中の見聞を述べたものである。八月の半すぎに、大坂道頓堀から丸龜へ、更らに丸龜から九州へと船出した途中、此の瀬戸内の風土に就いての観察と叙述とは、これを長久保赤水のに比ぶれば遙に精密を極めてゐる。このやうな観察は、筆者の観察力がもとより其の



基礎となるけれども、速力のゆるやかな舟に乗つて島々の間を航海し得た事も、また此の觀察をなし得た原因といはなければならぬ。今日鐵道省や大阪商船汽船會社などによつて、夏季に瀬戸内海の巡遊航海が催されるけれども、眞の瀬戸内の風土の考察は、此の『筑紫紀行』に記述されてゐた程度の航海程によらなければ、其の目的を達する事は困難である。

筆者は、以上の吉田氏の精細なる觀察と對照するものとして、『海瀕之圖』上卷に描かれてある瀬戸内航路圖によつて、讀者と共に此の内海の風土的特質を明かにする補ひとしたい。其の中に、

此圖は寛文七丁未年、依嚴命而高林氏直重又兵衛向井氏某兵庫西國巡見ノ時國主領主各其領内ヲ分テ記ス所之圖ヲ取テ集之此度改テ作之

によつて、其の年代を明かにする事が出来るが、なほ、

- 一、國境郡境城池并町屋其外村々家數村ヨリ村ハ海路遠近記之海邊之外ハ不載之國々地高ハ除之
- 一、浦々島々ニ有之城地町屋記之并地方ヨリ島江之海路其外洲波石之有所記之
- 一、湊ノ方角廣狹淺深山ノ高下其外國々沙行ノ替難所海路直乘方角記之
- 一、道法ハ大抵二寸ヲ以テ壹里ニ定ム但國々地方ヨリ向地ノ國々島々遠近ハ此紙短ク貳寸壹里ニ難成凡壹寸一里斜分也書付テ以可見之

などと註記されてある。

### 航海 に就いては、

我々の祖先が此の内海の航海に如何に意を用ゐてゐたかといふ事は、『海瀕之圖』上卷にも處々に、航海上の注意が附記されてあるのによつても明かである。今此にこれを抄記すると、

一、兵庫湊南風ノトキハ不好トイヘドモ先ニ湊ナキアイタセンカタナク此内ヘカカル也 此時ハイカニモシテ筑島ノ内エ入ヘシ

一、此瀬戸ニ播磨地ト淡路地ト汐カハリ有是ヲ別道汐ト云也播磨地下リ汐ナレハ淡路地ハ上リ汐也是ヲ知ルヘシ

一、室ヨリ兵庫ノ間海路遠ク一汐ニハ乗カタシニ汐ノトキ汐ニナル間瀬戸ノ門ニテ向汐ニ不逢ヤウニ可心得

『播磨巡覽記』の附録にも、簡單ながらまた左の如く記されてある。

一、航路は大阪より兵庫迄十里は乗るもよし 難航なし。明石高砂まで乗るふねは天氣よく順風にあらざれば、舟かゝる事あり。また難風もあるべければ用捨すべし。

港 に就いては、

室の湊の入口三丁ばかり、東南のかた平山のうへに燈籠堂あり、そこを廻りて小島三つ西のかたにあり。沖のか

二 日本の風土的特質としての瀬戸内海地域



らみ・中のからみ・地のからみといふ。未の刻頃みなどにいたる(二見の沖より此室の湊まで十三里ばかり)。入口に陸のかたに船番所見ゆ。姫路の殿酒井家の紋付たる幕を張廻して、つくぼう、さすまた、鎗などたてならべて甚嚴重に見ゆ。此所は西國の御大名方の船出をし給ふところなれば、かくのごとしいふ。姫路より高三百石の御役人四人、下役の衆四十人ばかりつけ置れて守らせ給ふとぞ。湊の廣さ二丁四方ばかりにて、南は沖より乗入り、東西北のかたはみな山にて、山を前海邊を後にして町家たてならべたり。船よりあがりて見れば、家居は大かた土藏造りにて、中には板葺にして石を鎮にしたるもあり、いづれも石垣たかく築あげて軒下まで船つくべくかまへて、脊戸口は水際まで雁木五六段つゝあり、町中を行みれば、どうらん・たばこ入やうの革細工する職人多し。むかしは富りけんとおぼしき大なる家も、近頃は衰へ窮せりと見えて、こゝかしこ損じたる所のあるがあまた見ゆ。……今宵は此湊に泊る。町家には家々に居風呂をたて、泊り船の人々に浴せしむ。ある家に入て浴しみるに、釜いと大にして湯はすくなし。何方のもしかるべし。

六日風猶よからねばこゝ(鞆)に滞船す。此の地綿の商ひおほし。綿は備前・備中・備後よりも、安藝・讃岐よりも多くいだす。安藝の廣島より出すを上とし、備中の玉島、備後の尾の道より出すを中とし、讃岐より出すを下とす。此近き國々にて、綿核を油に絞る事制禁にて、すべて皆大阪へ核にてのぼせて、彼所にて油に絞りて、こゝにも諸國にも下す。大阪なる絞油屋どもの中より願ひを上りて、かくはさだまりしとぞ。さて此邊にも通用の銀

札ありて、近國にも通行し、近き國々の札もまたこゝにて行はる。廻船の津にて海路の便よき所ならんか。

〔筑紫紀行』一・二)〕

我々は此の室と鞆の二つの港の記述を熟讀する事によつて、徳川時代の瀬戸内海に於ける港の機構が、如何に我らの祖先の眼に映じたかをぼゞ想像する事が出来る。更らに、尾の道の條には、

北東は山にて南は入海の湊なり。町家五六千軒あり、町通り家居のさまなど、上方に替る事なし。商家は萬の問屋おほし。肴の市・野菜の市たつ。穀物・干鰯・綿種・鹽などつめる船ども諸國より夥しく輻輳す。……東南のかたの町端に築出しの新地あり、此内皆酒屋町にて藝子・女郎などあり、津の國の兵庫よりこゝまでの間に第一の大湊なり。魚物・青物を女の賣ありくこと鞆に同じ。

瀬戸内の港としての地理的位置に於て、東の兵庫と西の尾道は、兩々盛んになるべき地點であつた。かく海運の中心となつてゐる港に多い問屋などの機能的特質も、書き記されてはゐるが、それが文化的にも大きな中心となつてゐる事は、「町通り家居のさまなど上方に替る事なし」の一句よくこれを證據立てゝゐる。筆者は昭和三年の夏佐渡に遊び、郷土學者である山本氏から、「佐渡が京都の文化の傳統を引いてゐる事」は、天皇公卿僧侶などの流竄されたにも因るけれども、敦賀との航通が與つて力あると聞いて、海運が文化の傳播に與つて力ある事を、今更ながら思はざるを得ない。此の意味に於て、瀬戸内海に沿ふて發生した諸港は、以上の記述によつて、港としての



經濟的機能の中心をなしてゐた事を知り得ると共に、また文化の媒介と融合とに與つて力があつた事を思はざるを得ないのである。

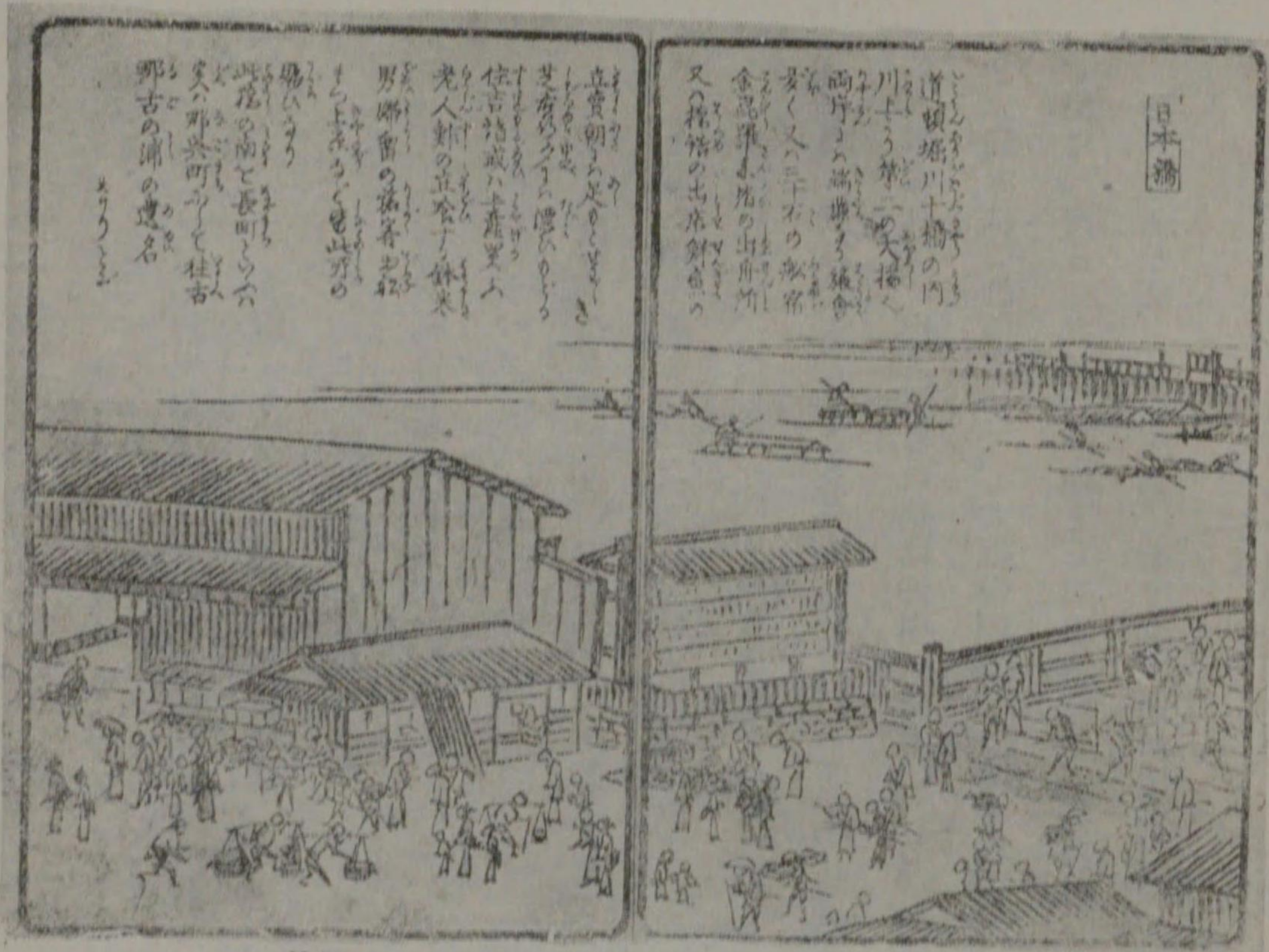
しかし兵庫にしる尾道にしる、要するに地方的の中心港であつた事は、以上の記述によつても明かである。之比すれば、大阪は全國的の中心港であつた。今、二三の記述に就いてこれを證するに、

道頓堀川十橋の内、川上より第二の大橋也、兩岸には端麗なる旅舎多く、又は三十石の船宿、金毘羅參詣の出舟所、又は橋詰の出店、鮮魚の立賣、朝には足もとせはしき芝居行、夕には漂ひもどる佳吉詣、或は土産買ふ老人鯨の立喰する鉢巻男、滯留の旅客、出船まつ上京など皆此所の賑なり。此橋の南を長町といふは、實は那吳町にして、往古那古の浦の遺名なりとぞ。(『浪華の賑ひ』二篇)

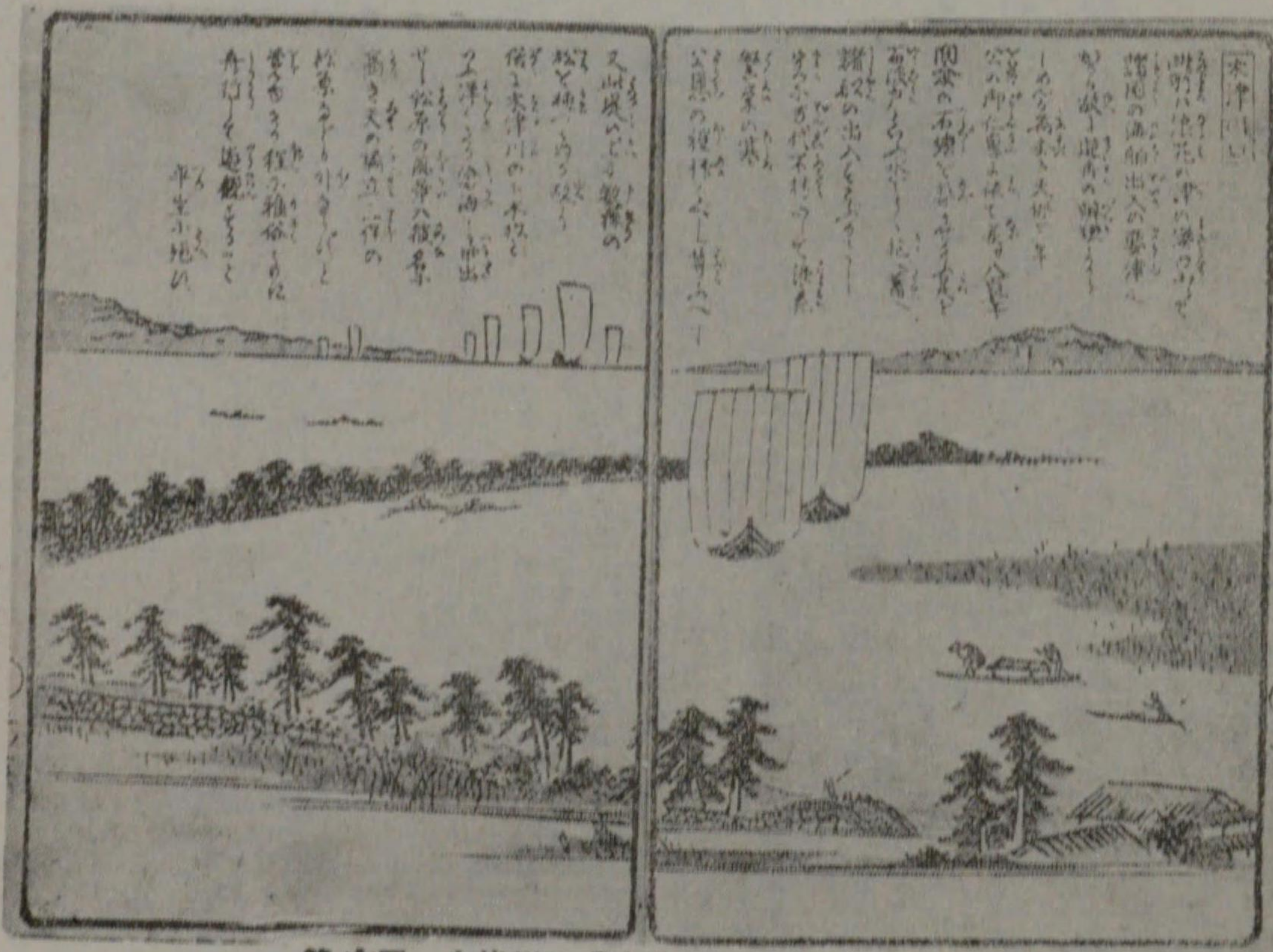
道頓堀よりふねにのる。是は讃岐國丸龜といふ所の船にて、彼所より此大坂にわたる人をのせ來りて、またこ、よりかしこにわたる人を乗せ行て、年中かやうにのみして行通ふふねなり。さて打のりて鹽谷と共にさし向ひて、たばこのみつ、船出をまぢるたるに、五兵衛はさしよりて、昨日仰かうふりし事を、御宿の主にも此船頭にも委細にたづねて書付置候とて、我前に恭しくさし置をみれば、

船宿 大阪道頓堀  
船頭 讃岐丸龜  
水主 同一所

大和屋彌三郎  
大黒屋清三郎  
貞八



第五圖 日本橋河岸『浪華の賑ひ』(卷二)



第六圖 木津川口『浪華の賑ひ』(卷二)



右船賃丸龜迄壹人分飯料共銀貳拾五匁也

丸龜より安藝宮島迄の船賃同斷

宮島より豊前小倉まで船賃同斷

以上船賃合銀三百目也

と書付たり。さて子ノ刻頃ならんとおもふころ、船こぎ出して、しばし有てまた船とめて、いかゞしたりけん船人ども音もせざれば、いぶかしくて船頭をよびてこゝはいづくぞととへば、川口と答ふ。何とてふねはとめたると問へば、風を待つなりとていと音もせざれば、我等もふしぬれど、浪の音高くうき寝の枕にひびきて、えいねもやらず、こしかたゆくするの事をおもひつゞくるほどに、夜も漸深更になり行、寅刻にもやあらんと思ふ頃、俄に船人どもこゑあらゝかにわめきて、帆柱押たて帆綱引上て、さても追風良の風也かななんといひて競喜ぶ躰なれば、出て見るに船は沖中に走り出たる、猶夜あけざればまたふしぬ。〔筑紫紀行〕一

我々はこれによつて、大阪の河港としての地區が、如何に特殊な居住状態を構成してゐたかに就いての觀察を明かにし得ると共に、河港としての大坂港の特質は、水路としての川口の状況を明かにし得る。従つて其の川口の修築と監理とは、此の河港に於ける重要な仕事であつた。



第七圖 河港大阪と其の附近『攝津國名所大繪圖』



此地(安治川口)は夷島の端にして、官家の監船所ありて、海船の出入を改め給ふ。西面の眺望すこぶるよし。此に續て御船藏ありて孔雀丸・難波丸・土佐丸・新土佐丸・紀伊國丸、海船には鳳凰丸等を藏め得る。又此南の方に天満宮の御旅所あり、六月二十五日の祭禮には舟にて神輿渡御ありて賑はし。御迎舟として此邊りの生子地よりいろ／＼の木偶を船にかざり、船諷うたひつれてさし上る光景美觀なり。さる程に是を見んとて、船に乗じて酒宴を催し、絃鼓をはやし興する賑ひ鼎のにゆるが如し。(『浪華の賑ひ』三篇)

此の所(木津川口)は浪花の津の湊口にして、諸國の海舶出入の要津也。かるが故に、廻舟の辨理よからしめんが爲、去る天保三年公の御仁恵によりて、長さ八百七十間餘の石塘を築かせ給ふ。是を石波戸(いしはど)といふ。水をよく抱へ蓄へ、諸船の出入すこぶるよし。實に萬代不朽にして浪華繁榮の基、公恩の程仰ぐべし尊ぶべし。又此堤の上に數株の松を植つらぬる故に、俗に木津川の千本松といふ。洋々たる滄海に築出せし松原の風景は、彼の名に高き天の橋立・三保の松原なども外ならずと覺ゆ。さる程に雅俗ともに舟行して遊覽する事平生(しんせい)に絶えず。

(『浪華の賑ひ』二篇)

我々は、以上の二つの記述によつて、河港としての川口なる自然的風土が、人文的風土への融合によつて、如何に特色付けられてゐたかを、祖先の此の「風土觀」によつて觀取し得る。我々は此の二つの記述を味讀して後、更らに『攝津國名所大繪圖』に描かれた港市大阪(第七圖)を讀むと、其の水陸相接する地帯 *Belt* に於て、殊に、「自然

的風土から人文的風土への融合としての河港」の「地的渾一」*L'unité terrestre* の表現を見るのであつて、ザウアー教授の所謂風土形態の表現として、最も類型的なものと言ひ得る。而して此の河港としての大阪の風土を最も具體的に表現してゐるものは、自分の知れる範圍では、中川山長のあらはした『大湊一覽』なる鳥瞰圖である。此の圖の凡例の一に曰く、

浪華ノ地位南北長遠ニシテ東西短狭ナリ今圖セル所此ニ反セルハ西洋ヨリ眺望ナレバナリ。

北東を上とし、南西を下とし、右は金剛山・葛城山から、左は暗峠・生駒山を背景とした此の鳥瞰圖は、其の構圖に於て已に人目を恃てしむるものがあるのに、蛇行せる淀川は左の隅の方から流れ、其の川口の安治川口には、白帆の翻々として、列をなしてゐる處が描かれてあるし、なほ傍に、註記して、新規に築き上げられた波よけ山の長さ・高さ・幅・橋・松などまで分るやうにしてある。また淀川から分岐してゐる木津川に就いても、波よけから、並木の千本松の事まで細記してある。圖の西の端に大きな都市的集團としての大阪港が描かれてゐるのに對し、東の端には堺港が描かれ、其の間に生起してゐる數多の聚落とこれを圍繞してゐる耕地も、淡彩であらはされてゐるから港市としての大湊大阪の風土は如實にあらはされてゐる。自分は此の圖を本稿に挿入し、讀者と共に、かゝる大阪の風土的認識を鳥瞰圖によつてあらはした我々の祖先の功績を偲びたいと思つたけれども、製版都合上、これを省くに至つた事を遺憾とする。



#### 四 人文的風土としての人口密度

人口集團の疎密は、其の社會的特質たる村落集團並都市集團に、著しく異つて表現される。しかし同じ村落集團であつても、人口の疎密は散村と聚村とに異つた形態となつてあらはれてゐる。一九二八年七月、イギリスのケンブリッジ大學に開催された國際地理學會議に於て、フランスの人文地理學者ドウマンジオン氏によつて提案された世界の村落居住 Rural Habitation に關する特殊研究題目に於ても、村落の居住様式を、其の人口集團の疎密によつて、散村 dispersion と聚村 agglomeration の二つの形態に分ち、其の起源と理由とを、自然的條件並民族的傳統と、經濟的並社會的事情とに求めやうとしてゐる。

我が瀬戸内海地域の村落集團の居住様式は、散村に屬すべきものが多いか、はた聚村に屬すべきものが多いかといふと、全國を通じて見ても、人口密度の稠密な此の地域の村落集團は、大體に於て、聚村が多い。我々が大阪から下關市に到る所謂山陽線の車窓からでも、少しく注視すると、此の瀬戸内海地域に於ける村落集團が著しく密集してゐるのを目撃し得るので、殊にそれが、山麓から山腹にまでにさへ這ひ上つてゐる事を見るのである。殊に播磨から備前・備中へかけての平野に於いては、村落集團の密集型の存在を指點し得るのである。

瀬戸内海地域を通過する山陽線の沿道に於て、尾道市から廣島市までの間に、横はつてゐる沼田川の溪谷に於



第八圖 瀬戸内海地域人口分布圖 (山本熊太郎氏)



ける村落的集團は、車窓から眺め得る村落地域の中では、最も疎らな居住様式を示してゐるが、これとても、我々の郷土たる東北地方、殊に岩手縣などの疎らな村落的集團が、全く點在の状態にあるのに比べると、遙に集積の状態にある。

備前の宇野港から讃岐の高松港へ、また備後の宇品港から伊豫の高濱港への船路に於て、船の中から目に觸れる島々の村落的集團は、海岸から山腹へと這ひ上つてゐるのを見る事は稀ではない。殊にこれらの村落的集團の背後の耕地は、概ね綺麗に整理されてゐる庭園のやうになつてゐる所の多いのは、土地と人口との集約的關係を表現する人文的風土の類型であるといひ得る。

高松市から丸龜市を経て、觀音寺・三島・新居濱・今治と、讃岐から伊豫への瀬戸内海地域の沿海都市を結び付けてゐる汽車の窓から見られる村落的集團も、また土地と人口との集約的關係を實證する密集的な居住様式を示してゐる適例である。

都市的集團は、村落的集團に比ぶれば、其の居住様式の密集さが、更らに格段の状態にある。殊に港市の多い瀬戸内海地域の都市的集團は、其の著しさを示してゐる。これは、前に「祖先の眼に映じたる瀬戸内海地域」の中の港の觀察——室・鞆・尾道——にもあらはれてゐる如くで、殊に、尾道市の如きは、少しく注視すると、汽車の窓

からでもはつきりと其の密集形態を明かにする事が出来る。

(註) 都市的集團としての港市の人口の密集の測定は、其の宅地面積の平均率とか、一戸の居住人員の平均率とかであらはずと、精確ではあるが、自分はまたそれ等の資料を持ってゐない。

山本氏の此の日本人口密度圖(第八圖参照)にあらはれてゐる瀬戸内海地域の人口分布の密集的な状態は、これを東北地方などのそれに比べると、瀬戸内海地域の人口密度の濃度は、日本の人文的風土として極めて集約的な類型の最も著しいものである事を證據立てゝゐる。

### 五 人文的風土としての人口移動

自分は、ある公務で、西南日本の二府十九縣に就いて、人口の移動調査をしたことがあつたが、これを人文的風土の見地から見ると、(一)ある地域に行はるゝ季節的移動と、(二)海外への移住的移動とに分たれる。

ある地域に行はれる季節的移動は、其の地元の經濟的事情が、季節的に勞力の過剩を來たす爲であつて、其の風土的原因は地元としての地域が(イ)山地が多くて耕地が少ない地勢であるか、(ロ)冬季荒勝ちな氣候であるか、

(ハ)人口が地積に比して殊に稠密であるかに起因する。しかし鐵道が開通し、到る處に大中都市の發達を見るに至



つた今日に於ては、地域的に限られてゐた此の人口移動の動向は、著しく進展し、従つて其の需給地域を擴大するに至つた。即ち従來宿命づけられてゐた風土的環境中に鎖されてゐた小地域的人口移動は、内的には、地域内の農業技術の進歩並人口の増殖、外的には都市の發達並交通機關の普及とに動かされて、人口の全國的移動を可能にした。

これを瀬戸内海地域に見るに、従來は山陽道では中國山脈に近い山地地域から南方の沿海地域に季節的に人口移動が行はれ、また四國の讃岐では、人口に對して耕地の少ない事は、全國でも屈指であるが爲に、季節的の人口移動は従來盛んであつた。瀬戸内の島々、殊に小豆島の如きは、耕地の少ない割合に人口が多く、香川縣を通じて、農家一戸當の耕地が平均五反七畝歩であるのに、小豆島では僅かに三段八畝歩に過ぎないから、昔から大阪への出稼が多かつた。また廣島縣では、農家戸數は二十萬餘で、耕地に比して戸數が多い。従つて一戸當の耕地反別が平均五反五畝歩である。かくて従來農業者の季節的移動が、縣内にもまた縣外にも行はれてゐるのは、勞力の過剰な爲であつて、最近農業技術の進歩によつて、此の趨勢が一層激化されつゝあるといはれてゐる。

特定地域に於ける農民や漁民が、年來の生活環境に依據しつゝ、よりよき生活を支持すべき一條の血路として、傳統的に季節的移動を行つてゐる間に、他の特定地域に於ける住民は、更らに遠い海外諸國への移住となつて、新なる人口移動があらはるゝに至つた。此の人口移動は、季節的移動に比べると、時期に於ても長く、距離に於ても

遠く、従つて移住者自身の素質も違つて來る。これは、海の子ともいふべき漁民が其の先驅であり、海に親しみある半農半漁の環境に置かれた人々は之に次いで起つた。即ち地上の生活に恵まれなかつたが、海には生まれた人達の第一に選んだ動向であつた。

これを瀬戸内海地域に見るに、山口縣の大島郡は人口に對して耕地の少ない所で、其の對岸の玖珂・大島二郡もまた半農半漁の地域が多い。廣島縣に於ても、沿海地域たる安藝・安佐・佐伯・賀茂諸郡は同一の經濟的事情の下にある。香川縣の小豆島をはじめ、廣島縣や山口縣の島々でも、是等の諸郡と共に、日本でもはやい海外への移住者即ち渡米者を出した處で、何れも同じ人文的風土に育まれた人達である。

我々が廣島市から嚴島に赴く山陽線の車窓から、眺められる農家の家構の比較的に壯大なのは、これらの渡米者の歸郷して建築したもので、山口縣の大島郡でも、家構の和洋折衷のものは、同じく移住民の歸郷して建築したものである。

かゝる人口移動は、人文的風土としては、他の靜的現象に比べては著しく動的である。従つて其の觀察は、一々の踏査に基かなければならない。かくして得た資料を祖先の遺した地方生活記録としての文献と對照することは、かゝる地域の人文的風土としての推移を究明するのに、取らなければならない方法である。



## 六 人文的風土としての産業

自然的風土としての特色ある此の瀬戸内海地域は、我が民族の定住地域として長い年處を経てゐるから、其の土地と人口との集約的關係の表現ともいふべき農業經營の上に、最も其の類型を示してゐる。試に瀬戸内海を隔て、相對してゐる岡山・香川二縣に就いてこれを見るに、秋から春（十一月—四月）にかけては共に雨少なく、また夏（七月—八月）も比較的雨が少ない。秋から春にかけて雨の少ない事は、岡山の儒者松井先生の所謂「明麗なる山川」なる自然的風土を現出する要因であるばかりでなく、田の二毛作に對し、畑の作物に對し、またすべて野外作業を主とする農業労働に對して、どれ丈多くの便益を與へる事であらうか。また夏に雨の少ない事は、製鹽業の發達を可能にした要因でもある。かく春から夏にかけて雨の少ない事は、此の瀬戸内海地域に果樹栽培の發達を可能にした要因ともなつてゐる。

常食とする米を作る爲の水田耕作が、農業を生業とする我々の祖先が代々受け繼いで來た農業作業である以上、此の雨の少ない瀬戸内海地域に於ける用水の需給施設、即ち自然的風土に適應した人文的風土の出現は、必然的な要求であつた。かくて比較的大きな河川、吉井川・旭川・川邊川の多い岡山縣に於ては、是等の河水を利用する爲の規模の大きな用水路が設けられ、従つて用水組合の數も多い。川邊川の上流をなしてゐる高梁川沿の酒津に、近年

設けられた配水池が、最も大きくまた最も新式であるのも、かゝる人文的風土の一つの特色である。我が國の水田の發達地域に於ける水田の分布が、各地方を通じて、中流以下に多いのに、香川縣に於ては、財田川・土器川の上流、岡山縣に於ては吉井川・旭川の上流に、水田地域の分布の廣いものを見るのは、此の地域に於ける自然的風土と人文的風土との適應から生み出されたものであらうと思はれるが、自分はまだはつきりと其の理由を明にするを得ない。地域の狭く従つて大きな河がなく、流程の最も長い土器川でさへ、十里に満たない讃岐に於て、古來用水に充つる爲の堤の多い事もまた人文的風土の一つの特色である。

かく自然的風土に結びついた人文的風土として、瀬戸内海的特質が強く滲み出てゐるのは、産業中最も主要なる農業に見られるのであるから、是等を基調としての農家の生活にも、それが自から現はれてゐるであらう。農家の生活と風土的要素との關係を其の衣食住の上に求めるならば、近代産業並近代交通の影響の少なかつた明治初代の生活現象に就いて、其の資料を求むる事が、最も基本的である。しかし此の如き研究は、自分としても未だ着手してゐないフィールドであり、我が國に於てもまた着手せられてゐるものが少ないやうに思ふ。今日農政史の研究が幾分手を染められてはゐるが、農民史・農民誌の少ない我が國としては、已むを得ない事であらう。『イギリスの村落社會』 English Village Community を著して名高いシーボン氏は、近著『イギリスの農家の進化』 The Evolution of the English Farm, 1927. の簡単な序言のはじめに「友人達の好意の助言も届きかねる世界から生み出



された此の書物には淋しさがつきまといつてゐる」と述べてあるのによつても、我が國に於ける農民史や農民誌を通じて、各地風土の特質を明かにする事は、近き將來には望まれぬ事であらう。しかし、「日本の國民史」の一部門には、將來必ず各地域に即した日本農民史の添加さるゝ日の必ず来る事を我々は望み且期せねばならない。自分は、かゝる方面への開拓として、『郷土研究圖譜村落篇』として長野縣と栃木縣に就て試みた。

マイヤー氏は三十年以上もドイツ民俗學の樹立に苦心したが、其の名著『ドイツ民俗誌』Deutsche Volkskundeの序文の中に「他のものはすべて移り變る眞只中に、依然として農民階級に止まつてゐた人達は私の民俗學に於ける研究對象となつてゐる」といつてゐるのも、『フランスの農民』Les Populations Agricoles de la Franceを著してゐるポドリヤール氏が、「フランスに居住して農事の範圍内に其の生活を包含されてゐる人間を、私は數年間觀察するに努めた。……農村の状態には傳統・氣候其の他の地理的事情が著しく影響し、慣習のすべての多様性は、一地方でありながら本當と思はれないほど併存してゐる」と述べてゐるも、特定地域に於ける農民生活は、その人文的風土の最も類型のものである事を證據立てるものであつて、ポドリヤールの所謂地理的事情は、別言すれば風土を意味するものであるといひ得る。

農業にしても、漁業にしても、また工業にしても、これを風土的に考察する時には、まづこれを生業としてゐる人達の生活と其の生産物の特質とを併せ觀なければならず、更らにそれが地域的に如何に分布し、其の一つ一つが、

地域への生活と如何なる關係にあり、それが如何に變遷してゐるかを見なければならぬ。其の一つの適例として、床井・齋藤二氏の『日本地誌略物産辨』（明治八年）を見るに、左の如く述べてゐる。

- 一、其物時トシテ興廢アリ故ニ古ハ産シテ今多ク産セサル者或ハ無キコト能ハズ
- 二、産物ノ製造法ハ地ニ由リテ其法ヲ異ニス又新ニ發明シテ昔日ニ變ゼン者アリ今其梗槩ヲ録ストイヘドモ其詳細ニ至リテハ各其邦人ニ訂スベシ

三、地ニ隨テ形ヲ變ズル者アリ源五郎鮎・宮重大根ニ於テハ大ニ尋常ニ異ナリ見ル人其圖ヲ怪シムコトナカレ

四、篇中マ、各國ノ部ニ於テ同名ノ産品アリト雖其地ニ因リ製法異ナル者ハ故ニ再記シテ洩サズ且諸州産スル處ノ品物各其地ノ方言アリテ名稱同ジカラズ故ニ同質ノモノト雖其地ノ稱呼ニヨリテ之ヲ舉グ看客之ヲ疑フナカレ

五、卷中載スル所ハ書籍ニ據レルアリ實物ヲ目撃シテ載スルアリ

此の例言によつても、此の書の産業的記述に風土的色彩の豊かな事は明かで、今日の地理教科書と大に趣を異にしてゐる。更らに、瀬戸内海地域に於ける物産の記述を見るに、

攝津國物産（摘録）

御影石 菟原郡ノ御影ヨリ出ルニ因リテ此名アリ、……皆質硬ク光アリ石燈籠・墓碑・庭石等其他諸建築ニ用キル

二 日本の風土的特質としての瀬戸内海地域



ナリ。

池田炭 豊島郡市倉ト云フ處ヨリ出シテ池田ニ送り、夫ヨリ他國ニ頒チ賣ル故ニ池田炭トイフ、櫟ヲ竈ニ入レ熏燒ニシタルナリ……茶人地爐ニ用キル者はナリ。

伊丹酒 豊島郡ノ伊丹ヨリ産ス……諸國ニ輸スコト多ク良品本邦第一トス、……秋ニ造リ入レ春ニ至リテ熟ス、色黄ニシテ氣烈ナリ。

油 武庫郡西ノ宮邊ヨリ産ス、菜種ヲ採リ絞リ出シ油ニ製スルモノニシテ火ヲ點スニ用キ、又食物ヲ燂グベシ、因リテアゲ油トイフ、多クハ蕪蕔子ヨリ搾ル、蕪蕔ハ常ニ食用ニス、冬菜ハタカメノ一種ニシテ葉色濃ク其子油多シ、秋分ニ子ヲ下シ花ヲ開カザル前ニ心ヲ摘ミ食用ス、枝ヲ多クシテ子ヲ收ムルモ亦カラシメンカ爲ナリ、四月頃花ヲ開キ齒色四辨ナリ、花後莢ヲ結ブ、其子ヲ以テ油ヲ搾ル。

木綿 河邊郡ヨリ産ス、又大阪天滿邊ヨリモ出ヅ、此地ヨリ産スル綿木綿ハ最モ佳品ナリ。

藤蓆 住吉郡住吉ノ近地ヨリ出ヅ、藤ノ皮ヲ取り之ヲ編ミテ造リ蓆ヲ用ニ換ルトイフ。

檜席 菟原郡ヨリ出ヅ、檜ヲ薄ク削リ、之ヲ柔カニシ編成シテ製スルモノナリ。

真田織 河邊郡尼崎邊ヨリ出ヅ、木綿ヲ織リナセル條ニテ、刀ノ柄ヲ卷キ緒又紐ニ用キルナリ、絹ニテモ製ス

……慶長ノ頃真田幸村ト云人、紀井高野山ノ麓九戸村ニテ初メテ織出セルヲ以テ今ニ真田織ト云フ。

薄雪昆布 東成郡玉造村、住吉郡住吉邊ヨリ製出ス、北海諸國ヨリ産セシヲ再製造セシナリ、其ノ形薄ク挽キテ

縹絮ノ如ク製シ、白色ニシテ柔滑味美ナリ諸國ニ輸出ス。

播磨國物産(摘録)

姫路革 飾磨郡姫路ヨリ産ス……木製ノ匣ニ被ランメタルヲ革文庫ト稱シ有名ノ品ナリ、其ノ外面ニ草木花果鳥獸等ノ模様ヲ寫スコト最モ工ナリ、諸國ニテ珍重ス。

明石縮 明石郡明石ヨリ産ス、精巧ナリ……諸國ニ輸出ス、然レドモ今ハ鮮シ。

赤穂鹽 赤穂郡赤穂ニテ製ス、内國第一ノ品ニシテ其味他産ノ及バザル所ナリ……殊ニ燒鹽ハ名アリ、各國ニ輸出ス。

章魚 明石郡明石ヨリ産ス、是所謂章魚壺ニテ捕レル者ナリ……海藤花ハ章魚ノ鱈ニシテ醃ニシテ諸國ニ出ス酒客ノ貴重スル所ナリ。

鯛 明石郡明石浦・舞子濱ノ邊ヨリ産ス、三月ヨリ五月ニ至リテ最モ多シ……鯛ノ雌ハ味最モ好シ。

備前國物産(摘録)

蠟石 兒島郡眞島ヨリ出ヅ……其色白アリ赤アリテ其質柔ナリ、佩墜・印材等ヲ刻シテ諸國ニ輸出ス其彫刻頗ル巧ナル者アリ。



白魚 兒島郡福島、湊・藤戸、渡邊ヨリ産ス、小魚ニシテ夜間篝火ヲ燒キテ之ヲ漁ル、干シテ他國ニ輸出ス。

米蝦 即チ糠蝦ナリ、邑久郡袖浦及牛窓邊ヨリ産ス、細ナルコト針ノ如ク其ノ色淡紅ナリ蕃椒ニ和シ醃ニシテ

蝦醬 トス、多ク海邊潮ノ満干スル所ノ溝堀ニ生ズ、味ヨシ、他國ニ輸出ス。

海藻 兒島邊、藤戸邊ヨリ産ス、就中海苔ハ藤戸海苔、又ハ浮洲海苔トモ云フ、有名ノ産ナリ、又牛窓ノ邊ヨリ

出ル龍鬚葉ハ形燈心ノ如ク黒褐色、瀾キテ食用トス、其他海蘊ヲモ産ス。

砂糖 御野郡岡山近地ヨリ産スト云フ。

蠟 各郡所々ヨリ産スト雖、甚多カラズト云フ。

忌部陶器 和氣郡伊部ト云フ地ヨリ産ス、古ヨリ名器ヲ出ス、今モ德利・皿・壺・茶碗・土瓶等ヲ製ス、土質頗ル堅

ク、且種々ノ形ヲ出シテ、一種ヲナセリ、世ニ備前燒ト唱シテ其名高シ。

刀劍 磐梨郡長船ト云フ地ニテ産ス、其他福岡・吉岡ノ名工アリ、鍊刀ノ妙ヲ得タルヲ以、世ニ備前物ト云フ其

名天下ニ聞ユ、今ニ至リテ刀劍多ク備前ヲ稱ス。

備中國物産(摘録)

藍 小田郡各地ヨリ産ス染料ニ供ス。

鯛 小田郡笠岡邊ノ海岸及水島灘ニテ多ク漁スト云フ。

鱒 同所水島灘ヨリ産ス……五月ヨリ十月前最モ多シ、味甚美ナリ……西海邊殊ニ多シトス、此鱒ヲ唐墨ニ作ル

赤目烏ノ鱒ニ及バズト雖モ、形大ニシテ、味亦佳ナリ。

紙 諸郡ヨリ産ス、大高檀紙・奉書・杉原・小杉・半紙等種々産ス。就中、檀紙ハ松山・廣瀬産ニシテ、柳井勘右衛

門ト云ヘル者創メテコレヲ造ル、奉書ハ三好奉書ト云フ、精巧ノ者アリ、皆楮ヲ以テ製成セルモノナリ。

蘭席 哲田郡矢田・神代・夏川邊ヨリ産ス、備後ノ産ニ及バズト雖、製造最モ巧ニシテ其質強シ、他國ニ出ス。

陶器 上房郡松山近在ヨリ産ス、殊ニ大原燒ト云フハ最モ精良ナリ、種々ノ陶器類ニシテ其製造備前ニ劣ラズ、

諸國ニ輸出ス。

備後國物産(摘録)

蠟 御調郡尾、道邊ヨリ産ス、櫨漆ノ木ノ實ヨリ液ヲ取りテ製ス。

鯛 沼隈郡鞆津及御調郡小栗濱邊ヨリ産ス、漁最モ多クシテ鞆津ノ町ニ年中絶ルコトナシト云フ。

繰綿 三上郡庄原新上邊ヨリ産ス、草綿ヲ島ヨリ取り、繰車ヲ以テ實ヲ繰リ取りタルモノニシテ、未ダ弓弦ニカ

ケ打分ケザルヲ云フ、此近地皆草綿ヲ造リ繰綿トシテ他國ニ出ダス。

蘭席 國中諸郡ヨリ産スト雖ドモ、御調郡尾、道邊最モ多ク出ス、……備後表ト云フハ則チ是ナリ、水田ノ中ニ植

エ作ル、其色青緑ニシテ強シ、之ヲ席ニ織ルニ、草ノ老イザルニ當リテ刈ルヲ以テ、其莖長カラズ、中ニテ織



ギ織ル故ニ、中ツギト云フ、強クシテ光澤アリ、席ノ上品トス、其十分ニ長ジタルヲ以テ織レルヲ通シト稱ス  
久ニ耐フルコト中ツギニ及バズ、諸國ニ輸出ス。

花苳 同郡尾ノ道及靱津邊ヨリ産ス、……青黒赤ニ染メナシタルヲ蓆ニ織レルモノナリ、其組織最モ美ナリ一名ヒ  
シ蓆トモ云フ、縁ヲ着ケテ敷キモノトナス、其製巧ナルガ故ニ諸國皆珍重セザルナシ。

保命酒 沼隈郡靱津町ニテ醸ス、其味甘美芳烈ニシテ數百里ノ遠地ニ送り數月ヲ經ルト雖、其味變ズルコトナシ

安藝國物産(摘録)

蜜柑 刈島・向カマリ島・下島等ノ諸島ヨリ産ス、其地賀茂郡ノ海上ニ在リ最モ多ク出ス、南方温暖ノ地及海邊ノ  
砂地ニ宜シ。

綿 安藝郡海田・廣村等ヨリ産ス。

牡蠣 安藝郡海田邊及草津爾保浦ノ海邊ヨリ産ス……諸國ニ輸出ス、殊ニ大阪ニハ舟ヲ泊シ、冬春ノ間コレヲ販  
ク、人々ノ賞スル所タリ……生ニシテ膾ニナシ煮テ羹トナス、其他炙蠣・蠣飯等ヲ製ス、又其殻ヲ細末シテ石  
灰ニ換ヘテ壁ヲ塗ルニ用ケルナリ。

以上 瀬戸内海地域としての諸國の物産を通覽するに、各地の自然的風土たる氣候・土地(土壤・礦物資源・植物・  
海洋・動物などが、何れも人文的風土の地域的分布の基底をなしてゐる事が明かである。即ち氣候と植物とを基底

としての蜜柑・砂糖・蠟・綿・樟腦・蘭、礦物資源を基底としての御影石・蠟石・陶器、海洋を基底としての魚類は勿論、  
更らに文化的特質の表現としての工産物たる織物・醸造品・刀劍なども、また人文的風土の一表現として、地域的意  
義を示してゐる。是等の物産を生み出す人達の生活状態、殊に其の住家の間取と構造との關係、其の生産物を賣出  
す爲の交通機關の利用状態も、夫々の地域に即しつゝ自から人文的風土の地域的意義を表現しつゝあるのである。

かく『日本地誌略物産辨』に記述された産業を通しての人文的風土は、明治初年の記述である文に、それは封建  
時代に生み出された産業を通しての人文的風土であつて、明治・大正の産業革命を経た日本の人文的風土ではない  
『日本地誌略物産辨』が公にされた明治八年から昭和十三年までの六十餘年間、即ち半世紀に亘る日本の産業的變  
遷は、日本の産業史の上から見て、全く劃時代的の時期であるから、全國に於ける産業地域として、最も複雑を極  
めてゐる瀬戸内海地域の人文的風土としての産業の考察には、其の變遷を比較して、人文的風土の本質にあらはれ  
た産業の變異をも明かにする必要がある。例へば礦物資源を基底として新に興つたものには、山口縣の石灰岩と石  
炭、愛媛縣の銅とアンモニーがあり、土地を基底としてゐるものには、兒島灣岸の干拓事業がある。また廣島・山  
口二縣を通じて漁民の朝鮮への出漁の如きは、人文的風土の動的現象として、最も注目すべきである。かゝる見解  
からすれば、風土の學術的解釋に重要な役割をなすべき地理學の研究方法には、風土と緊密な關係をもつ生産の  
史的考察が取入れられ、以て人文的風土の複雑性が釋明されるべきである。



(註) これを要するに、人文的風土は自然的風土を基底とした地域的文化現象である。従つてそれには比較的時代の推移を免れてゐる靜的現象もあるけれども、また社會進歩に伴ふ時代の推移をなす動的現象もある。此の意味をフランクリン・トーマスは、其の名著『社會的環境の基底』The Environmental Basis of Society に於て、人文的風土の動的現象が、社會進化の法則に支配されつゝある事例を述べながら、其の研究の必要を説いてゐる、中にも

十九世紀の人文地理學の科學的なた系統的な發達は、此の世紀間の科學と思想の發達と不可分の關係にある。地理的要因は人種的差異と社會的過程に關係があるといふ昔から行はれた意見は力弱いものとなつたけれども、此の相關關係の包含的理解は、生物學の本質的事實の十分な智識と、土地の地形的並氣候的狀態に對しての親和さをはなれては、其の目的を達する事が出来ない。(第二章歴史的背景)

といつてゐるのは、人文的風土を地域的進化の上から考察する事が、「社會的環境の基底」として研究の上にも一大寄與をなす事を立證するものである。だから、瀬戸内海地域にしても、また其の他の地域にしても、人文的風土を考察するが爲に、その地域の進化を明かにする資料を蒐集する事は、第一次の仕事であり、其の資料の蒐集の目標は、常に其の地域の社會的過程を説明すべき環境的基底を考察する點に置かなければならない。我が國の地理學的研究にはかかる研究方法が乏しい憾がある

### 七 人文的風土としての都市

瀬戸内海地域の人文的風土としての産業を、地域的進化の上から考察するには、最も變遷の著しかった最近五十年間の變遷を考察すべき必要があり、殊に産業的推移の最も著しい都市、即ち瀬戸内海地域の都市としての港市の

時代的推移を示す動的現象が、如何に社會進化の法則に支配されつゝあるかを明かにする必要がある。これは、瀬戸内海地域の人文的風土の考察上、最も重要な觀點でなければならぬ。

然らば人文的風土としての都市の考察に必要な觀點は、如何にあるべきであるか。フランスの人文地理學者ブラーシユは、

都市なる言葉の眞の意味は、より大きな廣がりには於ける社會組織をいふ。

といつてゐる。故に都市の人文的風土の考察は、都市目體の社會的機能の地理的研究でなければならぬ。フランスでの眞の社會進化論者であり、そして組織的な觀察 Observation の下に、社會學者ルブレーの學風を酌んで、地理學と人類學と經濟學と社會學とを結び付けやうとしてゐるレッス、ムンフォードの「地域主義の理論と實際」なる論文(イギリスの『社』(會學評論)所載)の中で、「地域と都市」に就いて

都市は地域の結節であつて、すべての資源も便益もそこに集まり、それが地域内の人達の爲に役立てられる……都市と道路との關係は心臓と動脈とのその如くで……都市は地域と結付いた生きた組合の中にある。

といつてゐる。また人文地理學の見地から「風景地理學の理論と實際」に就いて、過去七年間イギリス國內及世界各地で調査した資料に基いて、一書を編纂されつゝあるコルニシは、雑誌『地理學』所載の「風景の調和」なる論文に於て、第一章「文明の風景」と題して、



一、工場地域 二、群集の壯觀 三、都市の風景線 四、構造的技術と自然的風景との結合  
の四要素を擧げて述べてゐる。

以上の所説の中に「社會組織」といひ、「組合の中」といひ、「群集の壯觀」といふ。何れも都市集團の社會性を目標としてゐるのに徴しても、人文的風土としての都市の考察は、社會經濟的たる事を要求してゐるのである。殊に自然的風土として特色多き瀬戸内海地域、更らにまた文化のふるいそして産業的推移の複雑な瀬戸内海地域を基底として生立つてゐる都市の人文的風土としての社會經濟的特質は、最も類型的であり、しかもそれらの變遷の多い港市の實在こそ、日本の各地域を通じて、産業的推移の著しい都市的風土の類型的なものであらねばならない。

然らば、瀬戸内海の港市としての類型的都市は、何れの諸都市であるか。自分の考では、

一、徳川時代の航路の重要な寄港地であつた大阪・兵庫・室・牛窓・下津井・鞆

二、明治時代になつて殊に進化した大阪・神戸・尾道・高松、また新に發生した宇品・下關

などに就いて其の特質を比較研究すべきである。

周防の室津半島に於ける室津港に就いての左の記述吉本信雄氏の論文は、實地踏査に基いたもの丈に、瀬戸内海地域に於ける港市の人文的風土の一つの特質を示したものと見てあげ得ると思ふ。

室津半島は、北から南に瀬戸内海に突出してゐる小さな半島で、長さ三里餘、幅は廣い所で一里餘狭い所は十數

町。大部に丘陵が続いてゐるから、平野が少ないので山腹まで耕地に開かれてゐる。従つて人口と耕地との關係は餘程切迫してゐるらしく、農村から、朝鮮や滿洲に出稼にゆくばかりか、布哇や合衆國に出稼してゐる者も多い。布哇や合衆國に出稼してゐるもので相當の蓄財をしたものは、歸つて新様の住宅を築くのが慣しとなつてゐるので、茅葺の農家の中に、それらの家が點々してゐるのが殊に目につく。海岸の部落が職業としては半農半漁であるのに、海岸を離れた部落は純農であり、従つて風習上から見ると、前者は後者の質實であるのに反して享樂的である。

室津港は、此の半島の西南端に位し、三四町隔てゝゐる長島とは上ノ關瀬戸によつて、長島の上ノ關港と相對してゐる。此の小さな海峽の間の入江には、大小の和船が多く碇泊するが、僅かばかりの發動機船も着く。かゝる地理的位置が、此の港をして漁港たり避難港たらしめてゐる。即ち漁港としては、半島の南端に位してゐるので、南方に周防灘の漁場を控えてをつて、此の灘に出漁する多くの漁船は其の漁獲物を運び來易く、爲に此處にはそれを容れる生簀や、魚類を氷漬にする爲に要する氷庫もある。かくて、集散する漁船の必要品を販ぐ商店も、また漁夫の享樂する機關も自から賑つてゐる。避難港としては、地形上東風も西風も防ぎ得るから、此の港に出入する船舶の數は多く、従つて和船の造船所も出來てゐる。しかしそれを鐵道の通じなかつた明治初年に比ぶれば船舶の吃水がまだ少なかつた明治初年に出入した船舶の多かつたに反し、今日は遙かに少なくなつたといはなげ